

YUN-KANG
CAVES ONE TO FOUR
VOLUME I
TEXT



8691832793

京都大学文学部



PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE
FIFTH CENTURY A. D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL
SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE
TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938-45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAIRO

VOLUME I
CAVES ONE TO FOUR
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLII

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西曆五世紀における中國北部
佛教窟院の考古學的調査報告

東方文化研究所調査

昭和十三年—昭和二十年

水野清一

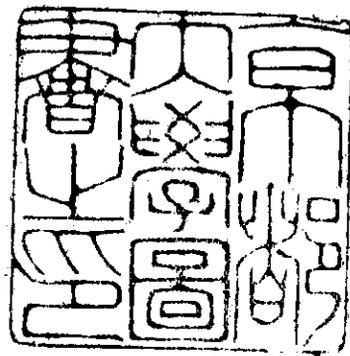
長廣敏雄

第一卷

第一洞—第四洞 本文

京都大學人文科學研究所

1952



PRINTED IN JAPAN
BY THE "NISSHA" PRINTING CO. LTD.
日本寫眞印刷株式會社

序

先人の精神と睿知とを打ち込んだ文化の所産が、時の経過に従って、次ぎから次ぎにと姿を消してゆく間に在って、蒙境雲岡の石窟群が、千數百年も以前の佛教藝術を、今も猶まざまざと残存することは、東方文化史上の一大惠福である。

明治三十五年(1902)我が伊東博士によって、ついで同四十年(1907)佛蘭西のシャヴンヌ教授によって、この石窟群が世に紹介せられ、大同に蟠居した時代の北魏の社會に、かゝる壯麗な藝術の輝いたことが知られてから、當代一般の文化相が新たに認知せられるに至ったことを思へば、世界は貴重なるこの遺寶の存在に對して、深い感謝を寄せねばならぬ。然も惜しまらくは、この遺寶は僻遠の奥地に位し、一般の觀覽に不便な上に、脆弱の砂岩に刻出せられてあつて、自然の風化作用を受け易く、今までにこれによって被つた破壊の箇所も多いことあり、今後に於ては一層急速にその禍を見るであらうこと疑ない。その上に思慮なき輩の人爲的破壊の手も加はつて、損傷の程度は日に月に高まるばかりである。こゝに於てか學徒の間では、一方にはその保存を計り、他方には現狀下に於て徹底的に調査研究の歩を進めると共に、これを忠實に寫眞して、廣く一般に展示する途を講ずることが急務であるとの聲が盛んになった。然しながら、この巨大な遺蹟を永久に保存する計畫は、方法の上からも經費の上からも至難の事であり、實際についての精細な調査や撮影とても、諸種の條件に制せられて、容易に實現し難く、空しく長嘆するばかりであつた。

かゝる情勢の間に、京都の東方文化研究所員水野清一、長廣敏雄兩君は、昭和十一年(1936)これと類似の響堂山や龍門の石窟を調査し、既に公にせられたやうな成績を擧げたので、その知識に基いて、一層精密にして大規模な雲岡石窟の調査を計畫し、遂に昭和十三年(1938)東方文化研究所の事業として、その實施に入ることになった。それ以來兩君は、昭和十九年(1944)に至る七年の間に互り、毎年三ヶ月乃至六ヶ月をこの遺蹟に起臥し、一行と共に、この事に従事した。時はまさに大戦のさ中に當り、平時に於てすら貧弱といはねばならぬ程度の經費を以てしては、所要の器具や資材の不自由は言ふまでもなく、現地に於ける日々の生活すらも困乏を極める有様で、その辛苦は想像も及ばぬものがあつたと思はれる。かくして昭和二十年(1945)終戦の幕が下り、この事業を切り上げねばならなかつた時には、第一洞から第二十洞に至るまでの大石窟は大概調査を了り、寫眞の撮影、實測圖の作製、拓本の打出しなど、至難の工程も一段落を告げ、主要なる石窟の現狀を忠實に記録する目的は遺憾なく達成せられてゐたのである。

然しながら、かやうにしてこの調査事業に成功した兩氏の前には、また新たな難關が横たはつてゐた。この成績を出版して廣く一般に提示することがそれである。もしこれを成し得ないならば、折角懸命の苦心も一半の意義を失はなければならぬ。然も戦後に於ける國內の情勢は、この尨大なる事業を企圖するには餘りに深刻で、百方の畫策も功を奏せず、積み上げた貴重の資料を前にして煩悶を重ねる有様は、深く同情を禁じ能はざるものがあつた。幸にしてその後、國情は漸く平靜に復し、東方文化研究所も京都大學人文科學研究所の機構の中に移つて、在來の活動を一層振興すべき機運に向つたので、こゝにこの出版のことも始めて光明を認め、政府當局の理解による積極的援助を得て、遂に本書の刊行を見るを得たのは、眞に欣幸の至りである。

如上苦心の経過を辿つた本書は、本文圖版各十五卷、合せて三十冊の巨帙で、昭和廿六年から五年に亘つて逐次刊行の豫定の下に、その中の數卷は既に出版せられた。毎卷本文に、この石窟や、石窟の調査に關する概論的序章を以て始まり、ついで所收の各洞について、規模、彫像、裝飾技術等を詳細に説述し、最後にその特徴を論述し、圖版は遺蹟の全貌から、彫像圖文等の各部を細大漏らさずコロタイプ版で印出し、卷末に解説を附して懇切な説明を施してある。通じてこれを觀ると、從來學界に發表せられた石窟内一部の彫刻に關するものゝ外、この大小幾百の洞窟について、凡そ注意すべきものは一々綿密に基本的考古學的調査や研究を施し、また困難至極の實測や、苦心慘憺たる寫眞によつて、現状を能ふ限り忠實に寫してあつて、この遺寶を現在及び將來に傳ふる上に於て、遺憾なきを得た大著と言はねばならぬ。

願ればこの事業は、着手以來今に至るまで、通じて十有五年の歳月を経過した。然もこの間は、我が國開關以來初めて遭遇した苦難の時代で、世は澎湃たる戦争氣分にあほられ、ついで悲惨な虚脱状態に陥つた。かゝる環境に在りながら、學術のために不撓不屈、あらゆる苦難を克服して初一念を貫徹し、今後縱令雲岡の地に桑海の變を見るときも、そこに燦然たりし北魏文化の光は、永く如實にこの書によつて、世界に輝くに至らしめた著者の學魂と功績に對しては、衷心より深い尊敬と感謝を捧げねばならぬ。

余は東方文化研究所の開設當初からその理事として、ついで所長として職を奉じ、この事業について詳知する關係から、需められるまゝにその経過の大略と所感の一端とを記して序文とする。

昭和27年1月

羽 田 亨

雲岡石窟公刊に際して

水野長廣兩君の七年にわたる雲岡石窟の調査が果を結んで、十五卷の大著作となって公刊せられることになった。不幸にしてこの聖地を訪れたことがなく、この著書を通じて始めて偉大な佛教藝術の全貌に接することを得た私には、僻遠の寒村における長期の工作がどれほどの困苦を伴ったものであったかを實感することは出来ない。この機會に兩君から示された調査の日録を讀んでみて、少しづつ、この事業の性質がわかりかけてきたばかりである。

われわれは水野長廣兩君の仕事を雲岡石窟調査と呼んだが、ほんとはこれは調査といつてすませるものではない。この調査の途上第九、第十洞前の廣場の發掘を始めとして幾度か大小の考古學的發掘を行つて、多くの新事實を發見したのであるが、これらの實際の發掘を含んだ全體の調査自身が發掘であり、新發見にみちたものであった。寫眞の撮影が先づさうである。實測がまたそれである。石窟内の佛像などの上には埃が長年の間に吹き溜つて五センチ以上に積つてゐる。寫眞をとる前に先づこの塵を掃う工作を必要とした。また小さな入口と明窓しか持たない全く暗闇の洞窟の奥深くへ鏡によって太陽光線を導き入れねばならないし、また十數米の高い洞窟の上部は足場を組み上げねばならない。最初に着手した第六洞の方柱上部の撮影に當つて足場を組んで太陽光線を反射させたとき、この天蓋に連珠文をもつた方格のなかに龍と鳥との浮彫りがあることが見出されて、調査員たちを大いに驚かせたと日記はしるしてゐる。この工作を進めて行くうちに、このやうな新發見は續々として現れてきたのである。

今から五十餘年前伊東忠太博士は雲岡石窟の存在を世界の學界に報告せられ、ついで佛國のシャヴァンヌ教授がこゝを訪れた。伊東博士の發見はこの莊麗な記念物を人類の全い忘却の底から呼び起したのであった。水野、長廣兩君の調査はこの大殿堂の全細部を暗黒から照らし出し、塵埃の中から掘り出し、鮮明なコロタイプと完全な拓本、精密な實測圖と詳細な記述によって全世界に紹介しようとするものである。この調査は兩君が東方文化研究所の在職時代に同所の事業として行はれたのであるが、新たに東方文化研究所を合併した京都大學人文科學研究所がこの成果を刊行する、光榮あるしかし困難な責務を負ふことになった。

全十五卷の報告の出版は現在の我が國の財政と出版事情の下においては容易に實施に移すことができないことは、我々もよく察知してゐた。しかし雲岡の大石窟の隅み隅みまでを正確に報告するのがこの事業の本質である以上、この出版計畫に大變更を加えることは

無意味であると考へたが故に、敢てこの大計畫の實現に手を染めたのであつた。この報告の出版は昭和十九年の東方文化研究所の下において企畫され、圖版の一部は刷り上つたのであるが、東京の戦火によって烏有に歸したのであつた。調査事業に對したと同じ英雄的な熱情をもつてこの復興に當られた著者たちの不撓の努力をまのあたり知る私は、いつの日かこれに一臂の力を借し與へてくれる理解者が出て、至難な出版が實現するにちがいないことを信じて疑はなかつた。しかしこの日が案外にも早く來て、この大悲願が成就しようとしてゐることは私の衷心から喜びに堪えないところである。

翻つて考へるとこの雲岡石窟の調査の大業は決して水野長廣兩君個人の力でよく完成しうるのではなく、無数の結縁の人々の協力のできたものであつた。兩君を中心とした雲岡石窟調査團のなかで、終始寫眞撮影に従事して約五千枚に上る原版を製作された羽館易技手、複雑な實測を行つた高柳重雄、北野正男兩助手の勞は特筆すべきであるが、そのほかにすでに鬼籍に入られてこの著書を示すに由もない鈴木義孝、戌亥一郎諸君の名も忘れようとして忘れられない。そればかりでなく現地においてこの事業に好意をもつて助力を與へられた華北交通株式會社、現地の官吏各位、軍關係の各位、また内地において側面から激勵された雲岡石窟調査後援會會員の力も大きく働いてゐる。

この書の出版に際しても、戦火にかゝつた初版の作製を擔當された座右實刊行會並びに現在編輯に任じている齋藤菊太郎君の熱意と、この精巧な印刷を一切擔當しつゝある日本寫眞印刷株式會社の協力は特記しなければならない。それとともに、この出版の意義を認め、この實現に援助を與へられた内閣總理大臣吉田茂氏、文部大臣天野貞祐氏、京都大學前學長鳥養利三郎氏をはじめ文部省、京都大學當局、雲岡石窟刊行會の全會員に厚い感謝を捧げなければならない。

著者たちは佛陀の足亦を東から西にたどつて、佛教美術の起源を探らうとする大計畫をもつてこの雲岡石窟の研究に着手した。そしてこの大問題は日本だけでなく世界各國の學界の共同に解決すべきものであり、その資料の一つとして提供するために、邦文解説とともに英文の全譯を附することにした。これは出版に二重の負擔を課するものであるが、最後まで遂行する決心である。内外の學者がこの書に對して忌憚のない批判と助言とを與へられんことを希望してやまない。

昭和27年1月

人文科學研究所長

貝塚茂樹

序

そのころは東方文化研究所の創設(昭和四年)から四、五年の歳月がたってゐた。ばらばらの個人研究から、やうやく共同研究に重點をうつさうとする時期であつた。それで、われわれは共同のテーマとして中國における石窟寺院の調査と研究をとりあげた。もともと、考古學の分野では等閑にされやすい、かういふあたらしい時代の研究をとりあげたのは、われわれが、佛教藝術に興味をもつてゐたからであり、そのころ研究所で『金石萃編』の會讀などをやつてゐたことも關係がある。もとより、中國の石窟はひじやうにその數が多く、佛教のさかえた南北朝から隋唐時代にわたつて、さかんな遺構をのこしてゐる。その研究は、中國の美術考古學のうへばかりでなく、佛教史のうへにも大いに寄與するところがある。のみならず、わが國の佛教文化を研究するうへにも、是非しらべておかねばならぬ分野である。

昭和十一年(1936)春、われわれが、はじめて中國の石窟調査にでかけようとしたとき、故濱田耕作先生は、いままでに調査されてゐない未知の石窟を調査するやうにといはれた。それで、そのころ手にはいった顧燮光の『河朔金石目』『河朔訪碑記』などで、いろいろあたらしい目的地を物色してみたが、けっきよく治安の確立してゐない中國では無理な注文であつた。けれども、先生の諸研究にみられた烈々たる開拓精神は、たえず、われわれをはげまし、その後みじかくない石窟研究の道程にあかるい光明をあたへてくれた。この年は、河北河南の省境にある南北響堂山石窟と洛陽南郊の龍門石窟とを、おのおの一週間ばかり調査した。

翌年(1937)は、中國最大の石窟である雲岡石窟の調査をもくろんだけれども、不幸な事變の勃發によって、中國にわたることはできなくなった。翌十三年(1938)になつて、大同方面の治安もやゝ安定したので、寫眞には當時の所員羽館易氏、當時飛鳥園にゐた米田太三郎氏、拓本には北京の碑帖舖の徐立信氏、測量その他には北京に留學中の小野勝年氏の助力をえて、水野ともに五名が四月から六月まで雲岡石窟の調査をした。翌十四年(1939)には外務省から特別研究費を支給されたし、華北交通株式會社からも調査費の一部を援助されたので、羽館、小野兩氏、水野のほか、前年は事故のために参加しなかつた長廣がくはゝり、なほ京城博物館の有光教一、米田美代治、所員北野正男、岡崎卯一の諸氏があらたに参加して、八人が、八月一日から十月十五日まで調査した。その後、京城博物館の杉山信三、京都大學建築學教室の鈴木義孝、および所員鹽田義秋、山内啓藏、高柳重雄、戌亥一郎、日比野丈夫諸氏の援助をえ、昭和十五年(1940)には原田仁氏によって雲岡の地形圖がつくられなどした。また昭和十八年(1943)からは大同炭鑛株式會社からも調査費の一部が援助された。昭和二十年(1945)

すれることはできない。いま、計畫の一部をあらためて全十五卷三十冊とさだめ、その刊行事業をより容易にするために、あらたに一万田尙登、梅原龍三郎、細川護立、堀朋近、上野精一、大原總一郎、坂内義雄、中野種一郎、福田平八郎、鳥養利三郎諸氏の發起により雲岡石窟刊行會がつくられた。いまこれらの諸氏に對し、また、かうした刊行會の成立その他に、目だゝない、親身の斡旋を煩した、岩井武俊、杉村勇造諸氏に對しても、ふかい敬意をはらふものである。

最後に、もと東方文化研究所長故松本文三郎先生が、われわれの雲岡調査のため、はるばる現地をおとづれられたことや、その他の斡旋に勞をおしまれなかつたことを想起するとともに、東方文化研究所最後の所長として終戦前後の難局を擔當された羽田亨先生から、このたび懇篤な序文を賜ったことは、われわれのふかく感銘するところである。なほ、いまは亡き初代所長狩野直喜先生をはじめ、東方文化研究所を育成し、われわれの長期研究を可能にした外務省當局に對し、またわれわれの研究にふかい同情をもち、ときに激勵し、ときに助言を惜しまれなかつた同僚諸兄に對し、ふかい感謝の念を禁じえないものがある。

1952年1月

水野清一

長廣敏雄

例 言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち第一巻にあたり、第一洞から第四洞までの調査と研究とをまとめたものである。

これらの諸洞は、主として昭和十四年(1939)、もと所員羽縮易氏が、所員岡崎卯一氏を助手として撮影した。たゞ巻頭の原色版一葉は、もと華北交通株式會社のため坂本万七氏の撮影したものである。さいはひ戦災をまぬかれた校正刷と現地の色見本にもとづいて、ふたゞびこゝに製版した。測量は主として昭和十九年(1944)高柳重雄、岡崎卯一兩氏、および長廣、水野の手によっておこなはれ、製圖ははじめ濫谷和氏により、のち高柳重雄氏によって完了した。たゞ測量原圖の一部——第一洞方柱東面、南面、西面圖(高柳測)第一洞、第二洞、第四洞平面圖(岡崎測)、第三洞平面圖(水野測)——が終戦の際に紛失し、こゝに掲載できないのは、このうへもなく遺憾である。拓本は昭和十三年(1938)、徐立信氏が作製した。巻末の地形圖は昭和十五年(1940)夏、原田仁氏の測量するところ、昨年のくれ日本地圖協會森三藏氏によって浄書された。

本書の記述は著者二人の共同執筆である。英文翻譯は國立博物館の原田治郎氏を煩したが、その校正その他には Peter C. Swann 氏の熱心な援助をうけた。

本書の刊行は、本所の出版費をもとゞし、その後、文部省當局および京都大學の配慮によって、すくなからぬ經費の追加をうけて達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に對し、心から感謝の辭をさゞげるとともに、過去十數年間の調査と研究に有形、無形、さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し、さらに本巻の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎、陳顯明の兩氏その他に對し、深甚の謝意を表したい。

1952年1月

著 者

目 次

序	ix
序	xi
自 序	xiii
例 言	xvii
序 章	雲岡石窟序説	I
第一章	第一洞	15
第二章	第二洞	20
第三章	第三洞	23
第四章	第四洞	28
終 章	東方石窟群の特徴	29
圖版解説	第一洞	37
	第二洞	43
	第三洞	48
	第四洞	53

實 測 圖 目 次

I.	第一洞	縱斷面圖(長廣敏雄測,高柳重雄製圖)	16
II.	第一洞	門口展圖(高柳重雄測並製圖)	16
III.	第一洞	南壁實測圖(高柳重雄測並製圖)	16
IV.	第一洞	東壁實測圖(高柳重雄測並製圖)	17
V.	第一洞	西壁實測圖(長廣敏雄測,高柳重雄製圖)	18
VI.	第一洞	北壁實測圖(高柳重雄測並製圖)	18
VII.	第一洞	天井實測圖(高柳重雄測並製圖)	19
VIII.	第二洞	縱斷面圖(岡崎卯一測,高柳重雄製圖)	20
IX.	第二洞	橫斷面圖(岡崎卯一測,高柳重雄製圖)	20
X.	第二洞	南壁實測圖(長廣敏雄測,高柳重雄製圖)	20
XI.	第二洞	東壁實測圖(長廣敏雄測,高柳重雄製圖)	21
XII.	第二洞	西壁實測圖(岡崎卯一測,高柳重雄製圖)	22
XIII.	第二洞	北壁實測圖(岡崎卯一測,高柳重雄製圖)	22
XIV.	第二洞	塔柱實測圖(1) (a)北面 (b)西面(水野清一測,高柳重雄製圖)	23
XV.	第二洞	塔柱實測圖(2) (c)南面 (d)東面(水野清一測,高柳重雄製圖)	23
XVI.	第二洞	天井實測圖(高柳重雄測並製圖)	23
XVII.	第四洞	縱斷面圖(岡崎卯一測,高柳重雄製圖)	28

地 圖

雲岡石窟地形圖(原田仁測,森三藏製圖) 1-3

拓 本 目 次

		参照頁
RUB. I.	A. 菩薩光背(第三洞 主室 右脇侍)	50
	B. 菩薩寶冠(第三洞 主室 右脇侍)	51
	C. 菩薩寶冠(第三洞 主室 左脇侍)	51
	D. 佛光背左半(第二洞 北壁 中央龕)	45
	E. 菩薩光背右半(第二洞 北壁 左廂)	45
	F. 菩薩光背左一部(第二洞 北壁 右廂)	45
	G. 菩薩光背(第一洞 北壁 右廂)	41
RUB. II.	A. 蓮瓣文帶(第一洞 東壁 上層 南部)	40
	B. 唐草文帶(第一洞 東壁 下層)	40
	C. 蓮瓣文帶(第二洞 南壁 上層 西部)	44
	D. 蓮瓣文帶(第二洞 東壁 上層 南部)	44
	E. 蓮瓣文帶(第二洞 塔柱 東面 第三層 軒裏)	46
	F. 蓮瓣文帶(第一洞 塔柱 西面 上層 軒裏)	42, 43
	G. 斗拱(第二洞 塔柱 西面 第二層)	46
	H. 獅子頭三つ斗(第一洞 塔柱 西面 下層)	43
	I. 獅子頭三つ斗と多臂神束(第一洞 塔柱 東面 下層)	43
	J. 寶帳(第一洞 南壁 西部)	38
	K. 塔柱天蓋(第二洞 塔柱 東面)	46
RUB. III.	A. 蓮華文(第二洞 天井 南部 東端)	47
	B. 蓮華文(第二洞 天井 南部 中央)	47
	C. 楣拱額(第一洞 塔柱 西面 上層)	42
	D. 楣拱額(第一洞 塔柱 南面 上層)	42
	E. 楣拱額(第一洞 塔柱 東面 上層)	42

插 圖 目 次

卷頭圖版	第二洞東壁上層坐佛列像	iii
第一圖	長城地帶	2
第二圖	庫倫天津間斷面圖	3
第三圖	春麥地帶圖 (Lossing Back, <i>Land Utilization in China</i> , Map 9)	3
第四圖	大同附近圖	5
第五圖	北魏大同附近圖	7
第六圖	雲岡石窟配置圖 (原田仁測, 高柳重雄製圖)	12
第七圖	東方石窟群平面圖 (原田仁測, 高柳重雄製圖)	12
第八圖	東方石窟群橫斷面略圖 (原田仁測, 森三藏製圖)	13
第九圖	第一洞第二洞平面略圖 (關野貞, 常盤大定『支那佛教史蹟』第二集評解, p.34-35)	16
第十圖	維摩像 (第一洞南壁東龕) (岩田秀則寫真)	16-17
第十一圖	文殊像 (第一洞南壁東龕) (岩田秀則寫真)	16-17
第十二圖	螺髻梵天像 (第一洞南壁西龕) (岩田秀則寫真)	16-17
第十三圖	水瓶菩薩立像 (第一洞西壁第一龕) (岩田秀則寫真)	16-17
第十四圖	第一洞地形斷面略圖 (高柳重雄製圖)	17
第十五圖	第二洞塔柱尊像配置圖	21
第十六圖	二佛並坐像 (第二洞西壁第一龕) (岩田秀則寫真)	22-23
第十七圖	佛倚坐像 (第二洞東壁第二龕) (岩田秀則寫真)	22-23
第十八圖	佛坐像と左脇侍 (第二洞東壁第一龕) (澤村專太郎寫真)	22-23
第十九圖	第三洞平面略圖 (原田仁實測, 高柳重雄製圖) a) 外形 b) 洞内	24
第二十圖	第四洞第四A洞平面略圖 (原田仁測, 高柳重雄製圖)	28
第二十一圖	第四洞第四A洞外景 (岩田秀則寫真)	28-29
第二十二圖	菩薩上身 (第四洞方柱東面右脇侍) (岩田秀則寫真)	28-29
第二十三圖	佛上身 (第四洞方柱東面本尊) (岩田秀則寫真)	28-29
第二十四圖	佛三尊上身 (第四洞方柱南面) (岩田秀則寫真)	28-29
第二十五圖	佛三尊上身 (第四洞方柱南面西群) (澤村專太郎寫真)	28-29
第二十六圖	菩薩上身 (第四洞方柱南面東群右脇侍) (岩田秀則寫真)	28-29
第二十七圖	菩薩上身 (第四洞方柱北面東群右脇侍) (岩田秀則寫真)	28-29
第二十八圖	塔形各種	30, 31

a) 第八洞東壁第三層 b) 第七洞西壁第一層 c) 第十洞前室東壁上層

d) 第一洞西壁 e) 第二洞西壁 f) 第二洞東壁

g) 第一洞東壁 h) 第一洞東壁 i) 第六洞周壁

第二十九圖 光背各種 33

- a) 下華嚴寺脇侍(遼)
- b) 下華嚴寺本尊(遼)
- c) 第三洞脇侍
- d) 第三洞本尊
- e) 北響堂山北洞(北齊)
- f) 北響堂山中洞(北齊)

序 章

雲 岡 石 窟 序 説

1

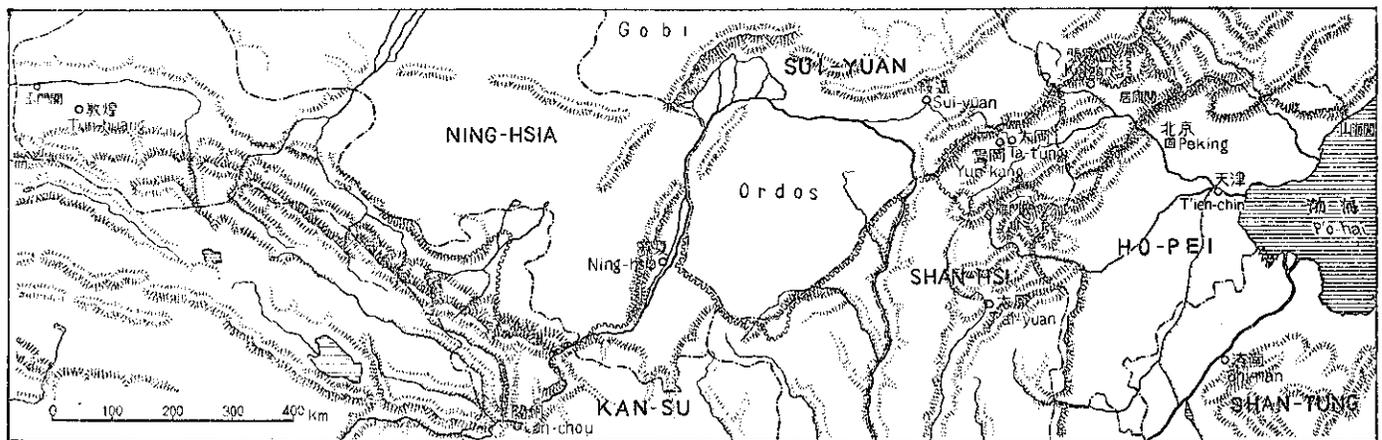
萬里の長城が中國の歴史にもつ意義は、はなはだ大きい。萬里の長城のはしつてある地帯が、中國の地理にもつ意義も、またはかりしれないものがある。秦の始皇帝が、北のかた匈奴をふせぐため、はじめて萬里の長城をつくったとき、西は臨洮Lin-t'aoにおこり、東は遼東Liao-tungにいたったといはれてゐる。いまの長城は西、甘肅のはて敦煌におこり、東は山海關Shan-hai-kuanで海に達してゐる。(Fig. 1) この長城走向の變遷にも歴史の複雑な表情がよみとられる。山海關から長城にそつて西すると、居庸關Chü-yung-kuanちかくで長城は内外の二つにわかれてゐる。一は獨石口、張家口から陰山Heng-shanのうへを西にはしり、一は小五臺山にむかつて南下し、涿源から北嶽恒山の南をとほり、雁門關Yen-mén-kuanをへて偏關、河曲にむかひ、つひに合一してオルドスの南に入る。

外長城のそとは 1,500m に達する玄武岩溶岩basalt lavaの蒙古高原である。外長城はその縁邊をはしつてゐる。内長城の南は河北平原であり、また山西の高地である。外長城と内長城にはさまれた長城地帯は、ちょうどその中間の臺地になる。海拔約 1,000m、桑乾河のながれる地溝帯である。南北に岬々たる山骨がならび、なかは黄土の堆積である。東に懷來、宣化の盆地があり、西に大同朔縣の盆地がある。桑乾河のながれはゆたかであるけれども、年雨量約 400 ミリ以下で乾燥し、氣温は夏平均 23 度、冬平均 -10 度以下で、農作は夏にかぎられてゐる。つまりロッシング・バックJohn Lossing Buckの春麥地帯である。(Fig. 3) 寒冷乾燥の内陸遊牧地帯と、温暖濕潤な平原、冬麥地帯との中間である。古來北方の遊牧民と南方の農耕民との雜居した土地であつたことは、その新石器時代の遺物にも反映してゐる。²⁾ 時代のくだつた遼金時代にも、この地は、いはゆる燕雲十六州とよばれ、北族國家の手中にあつた。西紀前 221 年、秦の始皇帝が天下を一統し、前 202 年、漢の高祖が漢帝國を建設すると、長城地帯は、もとよりその郡縣制のうちに包括せられた。けれども、漢の高祖は白登山Pai-téng-shanで逆包圍にあつて苦杯をなめ、漢の武帝は馬邑Ma-i(朔縣)に匈奴をおびきよせて、匈奴討伐のきっかけをつくつた。それが、みなこの大同朔縣の土地である。

漢代では懷來、宣化は上谷郡であり、蔚縣は代郡であり、大同朔縣は雁門郡であり、綏遠盆地に

¹ John Lossing Buck, *Land Utilisation in China*, Shanghai 1937, p. 3, 7, 8.

² 江上波夫、水野清一『内蒙古長城地帯』(東方考古學叢刊、乙種第 1 冊)京都 1935 年, p. 36—40.



第一圖 (Fig. 1) 長城地帯

雲中, 定襄, 五原, 朔方の諸郡がおかれた。しかし, いったん中原國家の勢力がおとろへると, 雁門以北の諸郡はたちまち放棄され, 北族の蹂躪にゆだねられた。そのころ, シラムレンの上流から蒙古高原にてた鮮卑族は, 綏遠盆地にて、西紀 312 年, 代國をたて, 長城地帯を制壓して 398 年大魏の國號をとらへた。さうして, その國都を平城, いまの大同にさだめたのである。

2

大同の府城は大同盆地のまんなかにある。北京から鐵路 383km, 南口から居庸關の谷をのぼりつめて懷來の盆地にでる。さらに蒙古の高原にでるには張家口からマンノルヴァの坂をのぼらなければならない。鐵路は張家口から外長城を右にみつゝ, 洋河をさかのぼり, 天鎮, 陽高をへて, 丘陵地帯をこえると玉河の大同盆地にでる。大同から鐵路は北折し, 方山の溶岩臺地にそうてすゝみ, 長城線をのりこえて豊鎮, 平地泉にいたると, このあたりは, もはや蒙古的風貌を呈してゐる。しかし, さらに西折して綏遠盆地におりると, 北に大青山すなはち陰山山脈が連互して, 蒙古の高原はそのうらにかくされてしまふ。つまり京包線は蒙古高原の縁邊にできた褶曲山脈のうちをはしつてゐるわけで, これがまた, さきにいふ長城地帯にほかならない。

蒙古高原は第三紀に噴出した玄武岩溶岩の臺地であるが, 縁邊の山々は古生代, 中生代にわたる石灰岩と砂岩の累積である。この 300m をこえる砂岩, 頁岩は, その累層中に大同の名産たる石炭の層をいくつもふくみ, また, その最上層にわれわれのいふ雲岡の石佛を彫りつけてゐるのである。

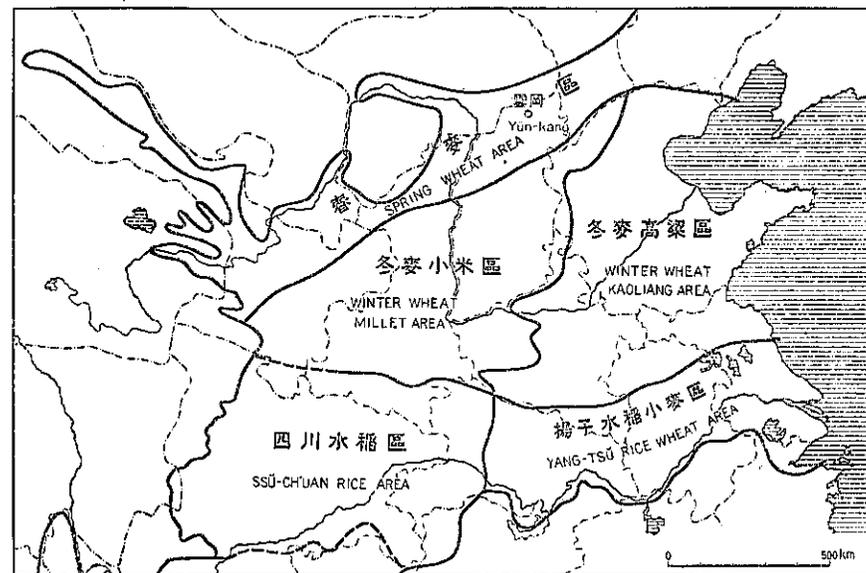
玉河の盆地は, いたってせまい。東西 20km, 南北 30km, 西に武州山の連互があり, 北に玄武岩の方山があり, 東北から東方にかけては白登山以下の丘陵が起伏してゐる。南だけはやゝひらけて桑乾河の朔縣, 應縣の盆地につらなつてゐる。しかし, これも雁門關, 陽方口にいたつて内長城線の山々にぶつかるのである。



第二圖 (Fig. 2) 庫倫天津間断面圖

北京からくると、玉河をわたりをはって大同驛につく。驛をでると南に大同の府城がみえる。まづ北關外の町なみをすぎると廢墟のやうな北關にはいる。兵營になつてゐる北關の道をつきぬけると北門になる。驛うらから、このあたりまでは漢の平城縣であり、北魏の平城皇城であつたらしく、瓦片の豊富な包含層があり、大きな礎石列がある。東關外へでると玉河である。玉河の名はそのむかし北魏皇都の御河から轉じた名稱かとおもはれる。このやゝ北に河水を鎮壓する鐵牛の像がある。いま城門には鐘樓があり、鼓樓があり、上下の華嚴寺があり、南寺とよぶ善化寺がある。南關から南郊にでると一望の平原である。西關はあれはてゝなにもない。たゞ目に入るものは、こはれきつた大樓門の夕日に映えるすがたばかりである。これをでると西山のしたまで黄色っぽい原野である。坦々たる大道が畑のなかをはしてゐる。路傍に小さい廢廟がある。谷の入口には小站の部落がある。これから黄土のあひだを、武州川にそうてさかのぼるのであるが、水量はかなりある。雨でもふるとたちまち濁流が岩に激してすさまじい。途中觀音閣があり、大同の九龍壁になつた五彩陶製の三龍壁がある。すこしすゝむと右手に大きな佛の一字を彫りつけた岩がある。よつて、このあたりを佛字灣といふ。それから石灰をやく青磁窰になる。そのうち道は河原にてゝ、はるかに古寺の黄緑の蔓が緑林のうへにかゝやくのをみる。これが名におふ石佛古寺、この部落が雲岡鎮である。(Fig. 4)

雲岡鎮の部落はいたつて小さい。約百戸ばかり。のみならず、いたつて貧弱である。土豪劣紳といふほどのものは一人もない。みな、その日ぐらしの農民である。かれらの農場は水の手



第三圖 (Fig. 3) 春麥地帯圖

るい左右の丘のうへにある。まったく自然の降雨にまつだけの原始農業である。粟、黍、莠麥の一毛作、小麥はつくらぬし、高粱すらつぐれない。わづかに馬鈴薯(山藥)が、なにかのまへ作になつてゐると、けしの栽培が井戸のまはりすこしあるばかり。河東の作とは大ちがひだと土民はこぼしてゐる。おなじ長城地帯でも、玉河の灌流する盆地とこの山間部とで

は、また作がらのうへにかなりの相違があるのであらう。これでは土地だけでも、ひろければまだしもだが、かならずしも、それも充分ではないらしい。それにいくばくかの寺領すら、村民の土地所有をせばめてゐる。それでも1937年以前は、大同にでる宿場として馬子宿の二三もあり、馬、驢、牛車の錯綜するのがみられたが、近年はそれすらなくなって、いまではたゞ長途汽車(バス)のちよつとした休憩地たるばかりである。

寺の方も、これに應じてさびれてゐる。大同からの遊客もなく、近村からの參詣人もない。埃にまみれた佛殿、調度もなにもなくなった客殿、わづかに厨房の一部が外來者の宿泊に供されるのみであった。住職は一人、小僧が一人、毎日、茅屋のなかの觀音さまに禮拜し、大佛殿に焼香、燃燈するだけのおつとめである。

この黄土の臺地を開析してなされる武州川の谷を、さかのぼってゆくと吳官屯となり、白廟となり、つひに左雲縣になる。さらに分水嶺をこえると右玉縣になり、北の殺虎口から長城をでると綏遠の盆地になる。そこに和林縣があり、代國時代の都たる盛樂の遺蹟がある。つまり和林縣の土城子である。さらに、その北、綏遠との中間に、いはゆる昭君墓、實は北魏の金陵がある。太祖以下獻文帝まで代々の天子は、みな雲中の金陵に葬つてゐる。當時の記録に雲中の金陵とも、定襄の金陵ともいはれてゐるのは、けだし、その地が雲中と定襄の交界にあつたためであらう。

左雲右玉の縣は、もとより近代の設置である。けれども、この往還はふるくから利用されたものであらう。遼の最後の天子、天祚帝も大同から西に遁走するのに、この道をとほつてをり、清朝の康熙帝も、その三十五年(1696)エルツトのガルダン(厄魯特葛爾丹)親征の歸途、この道をとつてゐる。康熙帝は、このとき石佛寺に一泊し、莊嚴法相の扁額をたまはつたが、その額は、いまもなほ第五洞まへのこつてゐる。

3

武州川の名は、おそらく武州塞からでたものであらう。武周川ともかくが、これは正しくない。和平初年(460)沙門統曇曜が文成帝に請うて、五大石佛をおさめた五大石窟をつくらうとしたとき、つまり雲岡石窟の創始にあたり、武州塞の地といふことがみえてゐる。武州塞の名は『魏書』が初見でない。すでに『史記』匈奴傳に、馬邑をおかさうとして匈奴十萬騎が武州塞にはいったことがみえてゐる。けだし、漢代以來、重要な邊塞であつたらう。北魏の皇帝は、しばしばこゝに雨ごひをしてゐる。あるひは造寺以前に、すでになんらかの靈地とみなされてゐたのかも知れない。

いま武州塞の位置を、かりに雲岡石窟のあたりにあてゝゐるが、はたしてそれほど限定されたものかどうかあきらかでない。北魏の酈道元(469—527)は、その著『水經注』に桑乾河のことを

1 森鹿三「酈道元」(東洋史研究, 第6卷2號) 京都1941年刊, p. 52

Lei-shui 灤水といひ、Yü-ni-ho 玉河、淤泥河のことを如渾水といひ、それにはいる Yang-shui Chên-ho 羊水 (鎮河) の源を「平城縣」の西苑外、Wu-chou-ch'üan-shui 武州塞に出づといつてゐる。また今日の武州川、つまり武州川水は武州縣の西南山下に出で、北流して縣故城の西をへて東北するとある。さうすると武州川の上流、いまの左雲あたりに漢の武州縣があり、羊水上流に武州塞があり、また雲岡鎮に武州塞があつたといふことになる。つまり、武州縣、あるひは武州塞とは、いまの左雲縣あたりをひろくさしたもののやうである。『水經注』灤水の條には、なほ桑乾水にそぐ Wu-chou-sai-shui 武州塞水といふものをあげてゐる。これは左雲方面より東南流して Shan-yin 山陰あたりで、桑乾河に合する水流とみられる。(Fig. 5)

『水經注』によると武州川水は武州縣の西南山下からで、東北流し、右に Huang-shui 黃水をうけて東流し、Huo-shan-hsi-hsi-shui 火山西溪水と合流する。火山西溪水は源を Huo-shan 火山に發するが、そこには火井、湯井、風穴があるといふ。これはいま Ma-chi-liang 馬脊梁における水蒸氣の噴出地をさすのであらう¹⁾。武州川水はさらに東南流する。さうして東轉して靈巖の南をとほるといふ。さてこの靈巖とは雲岡石窟のことであるが、その敘述はつぎのごとくである。

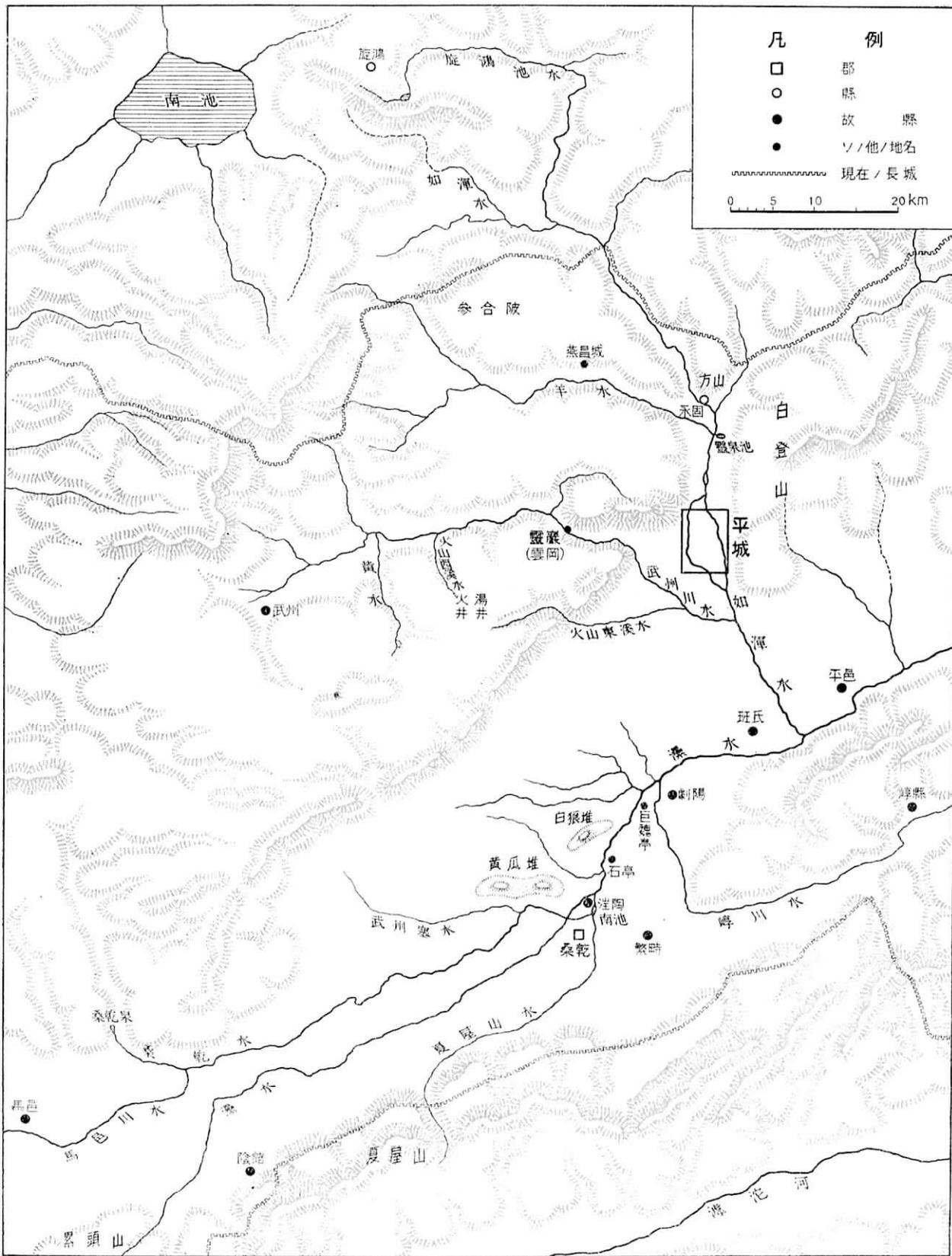
石を鑿り、山をひらき、巖によりて結構する。^{まことのすがた}眞容は巨壯にして、^{まれば}世法に希なるところ。山堂あり、水殿あり、煙のうちに寺が相のぞむ。林は錦のごとく、淵は鏡のごとく、目をみはるほどの新しい眺望である。

と。すなはち石窟のそとに山堂水殿がたちならび、綠林淵池の點綴したさまがうかゞはれる。のみならず、これを證する遺蹟も、丘の上下に發見されてゐる。

武州川はさらに東南して山をでる。『水經注』は、こゝで『魏土地記』をひいて、平城の西三十里、武州塞口だといつてゐる。塞口では、ながれをわかつて疏水をつくり、これを東にみちびいて西苑内の諸園池をめぐらすといふが、いまはたゞ荒寥たる粟、黍の畑である。北魏のむかしをしのぶべくもない。武州川は枝をわかちながら本流は東南にながれ、こゝで Huo-shan-shui 火山水を受ける。火山水はHuo-shan-tung-hsi 火山東溪にて、Shih-li-ho 十里河にそぐ。いまの十里河である。『水經注』は、このところで山に石炭あり、火熱は樵炭におなじといつてゐる。つまり大同炭の記述である。したがって、まさしくいま大同炭鑛のある K'ou-ch'üan-chên 口泉鎮の谷あひこそ、この火山東溪にほかならない。大同炭の歴史も、またふるいはなければならぬ。かくて武州川水は平城の南を東流して如渾水にはいる。如渾水は、さらに Fan-chih 班氏縣故城の東をへて東南流し、灤水(桑乾河)にはいる。

灤水は Lei-t'ou-shan 累頭山にでるといふ。内長城線の山である。東北流して山をいで、陰館故城の西をとほる。これはいま雁門關廣武鎮の北にある土城子である。こゝを樓煩の郷といふのは、もとこゝに北族の一分派たる樓煩の戎がゐたといふわけであらう。灤水は東北流して左に桑乾水をうける。桑乾水は桑乾泉にでる。桑乾泉は、いま神頭鎮の泉である。水は豊富で清冽である。山西汾陽縣

1 日比野丈夫「武州川の火井をたづねて」(東方學報, 京都第11冊第1分)京都1940年刊, p. 138.



第五圖 (Fig. 5) 北魏大同附近圖

燕京山の天池の水をうけるといふ。灤水はさらに東南流して、右に馬邑川水^{Ma-i-ch'üan-shui}をうける。馬邑川水^{Mo-ch'üan}は馬邑縣の南を東流して桑乾水にはいる。馬邑の故地はいま朔縣西門外にある。馬邑川は磨川ともいふが、胡語の音訛だと酈道元はいつてゐる。それほど、この地は北族の言語が影響力をもっていたわけである。

灤水はさらに東南流(東北流)して亂流し、池沼をつくる。そこへ左から武州塞水をうけ、右から夏屋山水^{Hsia-yü-shan-shui}をいれる。その左に黃瓜堆^{Huang-kua-tui}、白狼堆^{Pai-lang-tui}の砂丘が發達し、いまもなほ黃花堆^{Huang-hua-tui}の名でよばれてゐる。さらに崞縣^{Kuo-hsien}の南よりでゝくる崞川水^{Kuo-ch'üan-shui}、つまり今日の渾河^{Hun-ho}に合する。崞川水は恒山の北にでゝ西流し、山口をでゝ北折し、繁峙^{Fan-chih}の東をすぎて灤水に入る、繁峙故城^{Ying-hsien}は、いま應縣東方の東張寨にある。

4

さらに『水經注』によって當時の國都平城のさまを、すこしうかがはう。平城はもとより、漢の雁門郡のうちの一縣である。これが國都になったのは天興元年(398)魏の建國による。ときに鮮卑^{T'ien-hsing}の托跋珪^{T'uo-pa Kuei}(太祖道武帝)は山西、河北を平定して天下一統の志をたて、こゝに國都を平城にいとんだのである。もともと遊牧出身のかれらが都城をもたうというのは、たいへんな變化である。これから太和十八年(494)洛陽遷都にいたるまで約百年間、その前半は主として各地の住民をこゝにうつして大同、朔縣の盆地を充實した。さうして後半にはやうやく建設もすすみ、國都としてかなりの充實をみることになった。『水經注』に記すところはその最盛時の狀況である。

現在の大同驛から北關にかけたあたりは平城の中心であつた。漢の平城縣、北魏の皇城は、このあたりにあつたらしい。瓦の包含層も多いし、礎石列の發見もある。この皇城には乾元、中陽、端門、東西二掖門、雲龍、神虎、中華の諸門がひらかれ、曹魏になつた太極殿を中心に、いくたの宮殿がいとなまれた。皇城は西郭からはいつた支流と東郭からの本流とにかこまれ、中央端門のまへ^{Huang-chiu-ssü}の御路、つまり中央大街にはその左右にさうて水流があつた。御路の東に白樓(鼓樓)があり、皇舅寺^{Yung-ning-ssü}の五級浮圖、永寧寺の七級浮圖がそびえてゐた。東郭からはいつた本流はまっすぐ南下し、その東に道教の大道壇廟があり、西に三層石浮屠があり、東郭外に祇洹舎があつた。南郊には明堂、藉田、藥圃があり、西郊には西苑があり、苑内には水をひいて洛陽宮以下の建物があつた。北郊には廣大な北苑があつた。苑内には池沼相ならび、如渾水の支流がこれをつらねてゐた。こゝに虎をやしなふ虎園^{Ning-hsien-kung}があり、獻文帝の引退した寧先宮があつた。さらに北苑西山中には鹿野苑佛圖があつたといふ。それは寧先宮の西十里(約6km)にあり、巖房禪室、そのなかに禪僧がゐたといふ。しかし、いまそのあとは知りがない。

1 『魏書』卷一〇五、天象志には天賜二年(405)都城を修繕してはじめて邑居の制度ありといつてゐる。
2 『魏書』卷六、顯祖紀に景興四年(470)十二月甲辰、鹿野苑石窟寺に幸したといふのはこれであらうか。

東郊は世祖太武帝^{T'ai-wu-ti}のときに大學をつくったが、廣々とした講武の場所であり、田獵の地であった。やゝ北によつた白登山には太祖廟(白登廟)があつた。さらに北にゆくと平城のま北にあたる玄武岩臺地、方山には孝文帝の祖母、文明太后の山陵がいとなまれた。いまも大同の町から北をのぞむと、その平頂の方山のいたゞきに土饅頭のあることがみとめられる。それは太后の山陵であるが、そのやゝ東北に小さい孝文帝の壽陵がつゝましくきづかれてゐる。孝文帝は、のち洛陽遷都のため、こゝに遺骸をおさめなかつたが、太后の陵側につくった小さい壽陵に、その孝心のほどがうかゞはれる。二陵の南には文石でくんだ永固堂があり、正面の四柱は洛陽八風谷の黒石でつくつたといふ。四方には二つの石趺のうへにたつ青石の屏風をおき、忠孝貞順の畫像を彫つたといふが、そのさまは、いまつたはる北魏の線刻畫像によってほゞ察することができよう。¹⁾ 廟前に碑あり、碑獸があつたといふ。いまも方山のうへには文石の散亂するものがあり、龜趺のよこたはるものがある。青石とは青灰色の砂岩であつたとおもふ。いまは玄武岩の岩肌をあらはした臺地で、木一本ないが、當時は左右に柏をつらね、畫もなほくらしといへば、北京天壇^{T'ien-T'an}の列樹がおもひだされる。さらに南に思遠浮圖があり、齋堂があり、南門に二石闕が對峙してゐたといふ。思遠浮圖、その他は一段したの臺地にある遺蹟がそれらしい。これにおりるためには、かたい玄武岩の崖を切つて大きな御路をデグザグにつくつてゐる。こゝからした靈泉宮^{Ling-ch'uan-kung}をのぞむと、皎若として鏡をみるがごとしだといふ。その靈泉宮は如渾水の亂流によって、山下にできた水郷である。ながれが縦横にあり、これをひいて池があり、東西百歩(約150m)、南北二百歩(約300m)、もと白楊泉^{Pai-yang-ch'uan}といひ、白楊樹が多かつたといふが、いまもそのおもかげはのこつてゐる。『水經注』には南は舊京(平城のこと)に面し、北は方嶺^{Fang-ling}を背にし、左右は山原なり、亭觀は刺繡のごとく峙し、方湖^{Fang-hu}に三山が倒映するといつてゐる。

5

北魏が山西省の北部、大同の地に國都平城をいとなんだのは、もとより北方遊牧の出身であつたためである。大同の地は、なんといつても天下の中心とはいへない。それに作物もゆたかでない。それで、しばしば遷都の議がもちあがつてゐる。さうして、その移轉^{Yeh}さきは、いつも河北の鄴であつた。孝文帝の洛陽遷都も、はじめから洛陽ときまつてゐたわけではない。孝文帝は平城をでて、最初に鄴をおとづれてその廢墟の規模を視察してゐる。それから洛陽にむかひ、洛陽の舊址を検分して、つひにこゝを都としたのである。とにかく、この強引な遷都をするまで、かれらが大同にとゞまつてゐたわけは、主として軍國^{Tsui Hao}的の見地からであつた。司徒崔浩の建議によれば、一は河北にうつれば國人すくなく數州の地に滿たず、かならず河北人の輕悔をかふであらうこと、二は國人

1 奥村伊九良「魏馮邑妻元氏墓誌の畫象」(瓜茄, 第1號)京都1935年, 同「鍍金孝子傳石棺の刻畫について」(同, 第5號)1939年

地をうつせば水土にならはず、疾疫死傷を生ずること、三はその虚に乘じ北方の蠕々族が來寇する^{Juan-juan}かも知れないこと、さういふことであつた。¹⁾ それに大同の利點をかぞへると、山西、河北はその制壓下にあり、陝西へのならみもきく、そのうへ黄河をさかのぼれば甘肅との連絡もさして不便でないではないかといつてゐる。かういふわけで、ともかく約百年間は、天下を二分した北朝の國都として平城の都がつゞいたのである。

ところがそれでも、いよいよ孝文帝の洛陽遷都がきまつて、この地はまた長城にちかい邊陲の地となつてしまつた。隋唐間には、たゞ恒安の靈巖寺として知られてゐた。唐末五代になつて、いくらか北族が隆盛になり、遼金時代にはいると、また大同が西京とよばれることになつて、この地方の建設も活潑になり、雲岡の復興もおこなはれた。けれども、それもながい歴史からみれば、ほんの一時的で、明以後はまた邊土の一佛寺となりをはつた。したがつて、この地の主たる土木事業も、佛寺の修繕よりは、北狄防衛の長城修治にうつつたことも、またやむをえぬといふべきであらう。

¹『魏書』卷三五、崔浩傳。

雲岡石窟

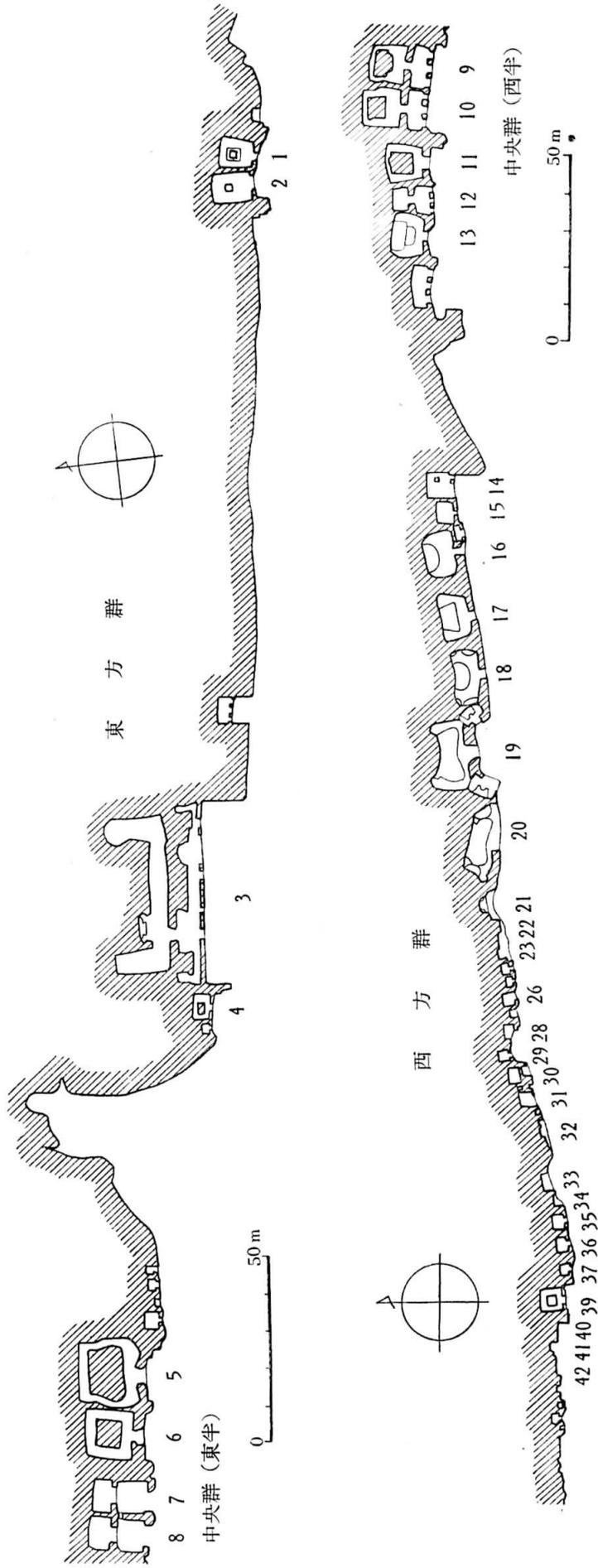
雲岡鎮は大同の西三十里(15km)にある。いま山西省大同縣に屬してゐるが、民國二年(1913)までは左雲縣に屬してゐた。現在の石佛古寺は貧弱であるが、北魏の石窟は武州川に面した北の崖にならび、大窟二十一、中窟二十、小窟佛龕、數を知らずといふありさまで、北魏の偉業をほこつてゐる。丘のたかさは約30mである。これに切りこんで絶壁をつくり、そこに洞窟をほりこんでゐる。全長をいへば3kmにもおよんでゐるが、主要なものは約1kmのあひだにあつてゐる。その間二つの小さい谷があつて、東方、中央、西方の三群にわかれてゐる。石窟の番號は東方からつけてあつて、第一洞から第四洞までが東方群、第五洞から第十三洞までが中央群、第十四洞以下第四十二洞までが西方群である。(Fig. 6)

東方群のうち、第一洞と第二洞とはどちらも塔柱をもち、一雙窟である。第三洞と第四洞も塔柱をもつが、形態のうへでは、すこしも塔のかたちをしてゐないので、われわれはこれを方柱とよぶ。第三洞と第四洞とは方柱をもつた未完成の石窟である。そのうち第三洞は雲岡最大の規模をもつてゐる。

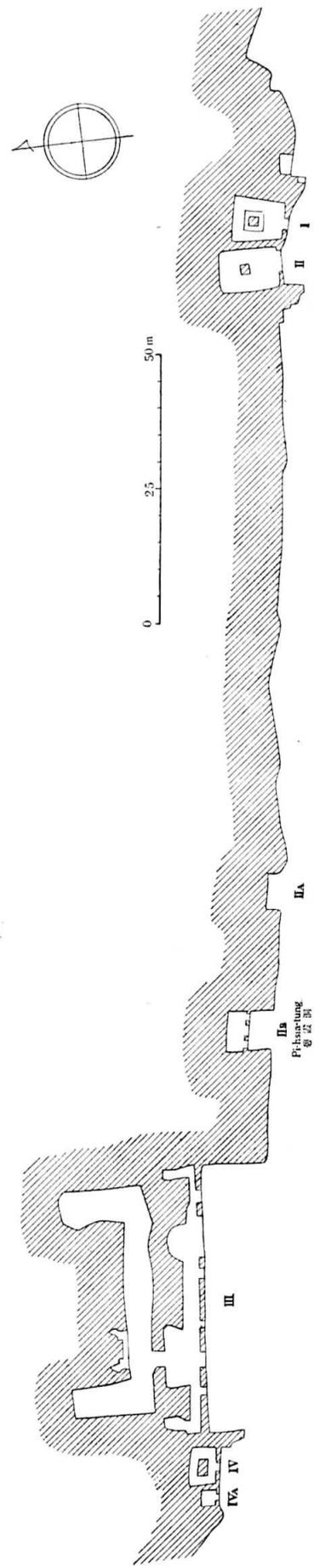
中央群は現在石佛古寺のあるところである。したがつて、東端三洞のまへには佛閣がたつてゐる。東端の第五洞は坐佛洞、第六洞は塔柱洞で一對をなし、第七洞と第八洞とは列龕ばかりの一對洞であり、第九洞、第十洞もまへに列柱をならべた一對洞である。これにつぐ第十一洞は方柱があり、第十二洞は第九、第十洞に似て列柱があり、第十三洞は大きな菩薩交脚像がある。いま第九から第十三洞にいたる五洞を村民は五華洞Wu-hua-tungの名でよんでゐる。第十一、第十三洞外壁には小さい佛龕が多く、そこには可憐なうつくしい佛菩薩の像があるので有名である。第五洞の東隣にも中小窟がならんでゐるが破損がひどく、いふべきほどのものはない。また第五洞の上層から東にかけても中小窟がいくつかならんでゐるが、これも破損がはなはだしい。

西方群は、こはれた第十四洞からはじまり、萬佛洞とよばれる第十五洞につゞき、さらに第十六洞から第二十洞にいたる曇曜T'an Yaoの五窟になる。この五大窟は沙門統、曇曜の奏請によってひらかれた最初の石窟であつて、そもそも雲岡石窟の發端をなすものである。大窟がならんでゐるのみならず、どの作もみな雄渾をきはめてゐる。そのうち第十九洞は最大で、坐佛の本尊をもつが、なほ洞外左右に大きな脇洞をもつてゐる。つまり三洞一組の構成である。あるひとは、これに別々の獨立した番號をあててゐるが、われわれは一括して第十九洞とよぶ。したがつて露天の大佛は

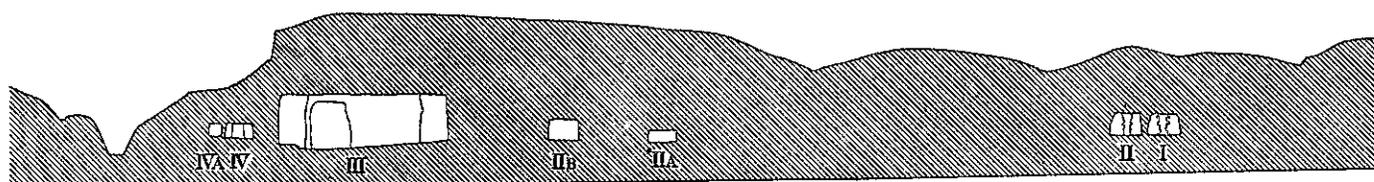
1 第一洞から第二十洞にいたる二十窟に、第三十九洞をくはへた二十一の洞窟である。



第六圖 (Fig. 6) 雲岡石窟配置圖



第七圖 (Fig. 7) 東方石窟群平面圖



第八圖 (Fig. 8) 東方石窟群横断面略圖

第二十洞である。これは前壁崩壊のため坐佛の全容が洞外に露呈したもので、もとは他の石窟とおなじやうに洞内にあったのである。この大佛は岩肌が白く、とくにうつくしいので、土民からは白佛爺Pai-fo-yehの名でしたしまれてゐる。

西方群は第二十一洞以下は中小の石窟ばかり、ついに西端の第四十二洞にいたる。そのうち第三十九洞は、まんなかに木造塔をまねた塔柱があり、西方塔洞ともよばれてゐる。一般に第二十一洞以下の諸窟は、その作ゆきがきしゃで、雲岡後期、つまり490年以後、北魏滅亡にいたる造建をものがたつてゐる。

武州川をすこしさかのぼった南岸、魯班窰Lu-pan-yaoとよばれる突角にはなほ二つの石窟がある。さらに吳官屯Wu-kuan-tunまでさかのぼると、その北岸の岩壁に小窟の群集をみるが、その破損ははなはだしく、いふに足りない。また逆に第一洞から東の方に川をくだると、北岸の岩壁に四、五の石窟をみるが、ここにも、とくに記すべきほどのものはない。

いま石窟のそとに木造の樓閣をもつてゐるものは第五、第六、第七洞にかざられるが、第八洞には近年まであったし、その他にも、みな、もとはあったものらしい。その證據に、遼代の瓦埴はいたるところに豊富であるのみならず、第二十洞まへの發掘からいふと、屋瓦の埋没するものがいたつて多く、北魏のむかしにも、洞外の全面に建造物を想定しなければならない。それに西部の臺上も發掘したし、第三洞のうへも發掘したが、やはりここにも寺院のあったことがあきらかになった。さらに東方の丘、西梁とよばれるところにも、北魏の礎石とともに瓦片の散布するものがあつた。だから石窟以外にも、『水經注』にいふごとく山堂水殿たちならび、かなりの範圍におよんでゐたことがあきらかである。いま、さびれはてた雲岡鎮の丘にたつて往時をしのべば、まことに感慨のふかいものがある。

第一洞—第四洞

東方石窟群

東方石窟群とは第一洞から第四洞までをさす。(Pl. 1, Fig. 7,8) そのうち、第一洞と第二洞とは隣接してゐるが(Pl. 3), 第三洞はとほくはなれてゐて、その崖の西端にある。(Pl. 68) 第四洞は第三洞の附屬である。第一洞、第二洞は塔柱を中心にした、中くらゐの塔廟窟である。第三洞は未完成の大洞で、主室は中心の方柱もしあがらず、荒壁のまゝであるが、洞外左右の兩塔、中央の上室は一應完成をみたものである。現在は、未完成の方柱の一部に、のちの時代につくった大三尊像が泰然としておさまつてゐる。第四洞も未完成。しかし、これもまんなかに方柱があり、方柱四面の尊像は、みな北魏の製作である。なほ第四洞西わきに三面三龕の小窟がある。これをいま第四A洞とよぶ。(Pl. 102)

このほか第二洞と第三洞とのあひだに、碧霞洞と彫つた未完成窟、第二B洞(Pl. 65A)、その東にこれに似た、もうひとつの未完成窟、第二A洞(Pl. 65B)とがある。それから、これを東方群にふくめてよいかどうかわからぬが、第一洞の東、小さい谷をこえた河岸の崖にまた三、四小窟のむれがある。たゞし、なにもみるべきものはない。(Pl. 2A)

第一章 第一洞

〔外景〕 第一洞は第二洞と隣接し、ともに塔柱をもつた塔廟窟である。大きさも似てをり、壁面構成も一致するから一對窟であらう。たゞ第七洞と第八洞、第九洞と第十洞にみるほど、その一致、照應が嚴格でない。ことに平面配置は、かなりいびつである。(Fig. 9)

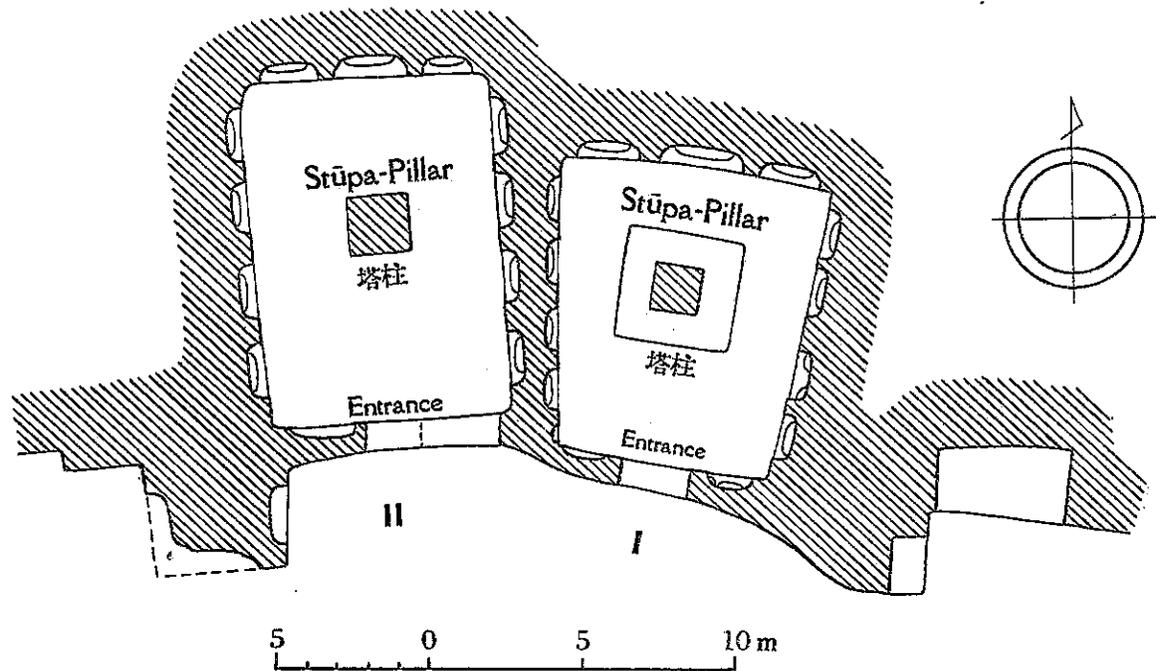
第一、第二洞のまはりには若干の石窟、佛龕があつたらしいが、それはPl. 3Aにみるとほり無慚なすがたである。たゞ、この東端に「左雲交界」の文字が彫つてあるのは注意するに足る。いま大同縣に屬してゐるこの雲岡鎮も、民國三年(1914)までは左雲縣に包括されてゐたのである。(Pl. 2B)

外壁は摩滅してゐるので、さっぱりわからない。たゞ近代遊人の題記が二三彫つてあるのをみる。これは第二洞内部や、すぐその西に清冽な泉があつたためであらう。拱門のうへには、わりに小さい明窓がひらかれてゐる。なかにはいと幅約 18.50m、奥行約 10.00m の石窟で、たゞまんな

かに方約 4.80m の大きな基壇をもった塔柱がたつてゐる。(Pl. 4—8, Plan I)

〔南壁〕 南壁の幅約 6.50m, 高さ約 5.40m, そのまんなかには拱門がある。拱門のわきが中層である。これが佛龕をきざんだ主な壁面である。そのしたに腰壁があり, うへに天井につゞく上層がある。上層のまんなかには, 比較的小さい明窓があいてゐるが, 縁かざりもなし, 東西側壁の浮彫もない。たゞのアーチになつてゐたらしい。(Pl. 9, 10, Plan. III)

拱門は尖拱額, 拱端に小さい虎形がある。拱額には坐佛を中心に, 左右四人づゝ胡跪合掌の供養者を彫る。拱門は, その側壁から天井にかけて, 交龍の意匠がある。それは第十二洞拱門に似てゐる。(Pl. 11, Plan. II)



第九圖 (Fig. 9) 第一洞, 第二洞平面略圖

東龕は維摩^{Vimalakīrti} (Fig. 10) を中心にし, それに文殊^{Mañjuśrī} (Fig. 11) を配した屋形龕, 西龕は佛を中心に, パラモン (Fig. 12) を配した屋形龕。いづれも説話的にやゝ自由なポーズであらはされてゐる。前者は『維摩詰所説經』(大正大藏經, 第十四卷)の造形化であるが, 第七洞南壁東西龕の形式と異り, 第六洞南壁のそれにちかい。たゞ維摩と文殊とを一龕内にまとめ, 維摩を主像としたのは異例である。西方龕の主題は不明であるが, 『維摩詰所説經』佛國品第一に釋迦佛を中心にして^{Sāliputra} シャリプトラ(舍利弗)と螺髻梵王との問答が, この土の淨不淨についてとりかはされてゐるから, たぶん, その螺髻梵王と^{Sākyamuni} 釋迦牟尼佛であらうとおもはれる。(Pl. 14, 15)

腰壁との境には, 半パルメット並列文があつたことがわかるだけで, 腰壁自身は摩滅してなにもみえない。

上層は, まづ蓮瓣文帯がある。第七, 第八洞ほど雄大ではないが, とゞのつてゐる。このうへに

第十図から第十三図までは未許諾のため削除

第十圖 維摩像 (第一洞南壁東龕)

Fig. 10 Vimalakīrti (Cave I, South Wall, East Niche).

第十一圖 文殊像 (第一洞南壁東龕)

Fig. 11 Manjuśrī (Cave I, South Wall, East Niche).

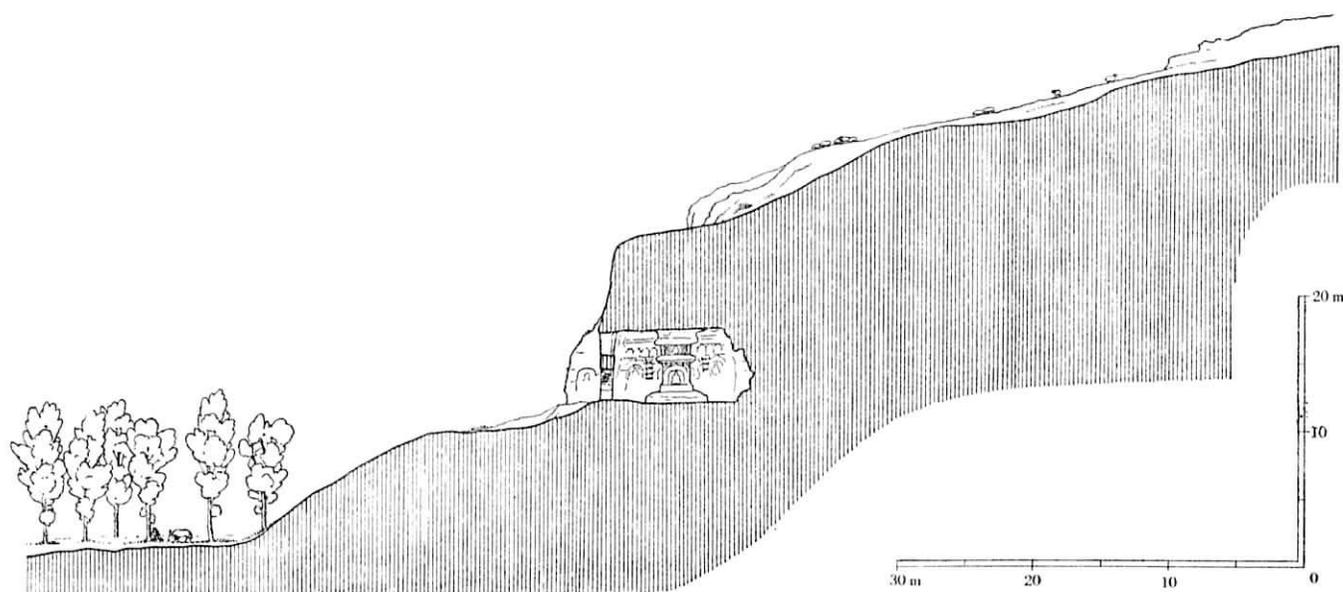
第十二圖 螺髻梵天像 (第一洞南壁西龕)

Fig. 12 Brahmā (Cave I, South Wall, West Niche).

第十三圖 水瓶菩薩立像 (第一洞西壁第一龕)

Fig. 13 Bodhisattva with Vase (Cave I, West Wall, First Niche).

坐佛の列像があり、寶帳があり、天井に接して樂天の列龕があることは第六洞に一致する。坐佛はみな合手、禪定のすがたである。衣に二種があり交互におく。一はシムメトリックの通肩、他は衣端で右肩と右腕とをすっぽりつゝんだ形式である。後者は、その衣のはしを、もう一度手くびにまき、あまった衣端をまへにたれてゐる。また內衣が胸まへからみえてゐる。舉身光のあひだに蓮上合掌の化生aupapādakaがつきてゐる。寶帳はひだをとった、たれ幕と三角垂飾よりなる。三角垂飾のさきは珠をつらねた紐にまるいものをぶらさげてゐるが、鈴でなく、ふさ(流蘇)²⁾であるらしい。つぎは樂天の龕列である。そのしたに幅約 0.18m の無文の一帶があり、龕中の樂天の膝からしたをかくしてゐる。これはバルコニの欄楯にあたるものである。(Pl. 12, 13) 事實、第九、第十洞の前室では、



第十四圖 (Fig. 14) 第一洞地形断面略圖

これにあたるところに萬字くづしの欄楯が、みごとにあらはされてゐる。(本書、第六卷、Fig. 13, Pl. 8, 9)

〔東壁〕 東壁の幅約 9.40m、高さ約 5.60m、壁面の層序は南壁とおなじである。中層には、四個の佛龕があり、楣拱龕と尖拱龕とを交互におく。すっかりいたんでゐるが、第一龕坐佛、第二龕二佛並坐、第三龕交脚菩薩、第四龕坐佛といふことだけはわかる。龕のあひだに木造塔にかたどった層塔が、わづかに尖頭部をのこしてゐる。その形制が第六洞周壁の塔に似てゐるのみならず、塔柱の役割が、その龕の構造からすっかり遊離してしまつたところも一致する。(Pl. 16, 17, Plan. IV)

1 『法華經』(大正大藏經、第九卷)「信解品」第四(p. 16)に、ある長者の起居をのべて「師子の牀に踞し寶几もて足をうけ、もろもろの婆羅門、刹利、居士みな恭敬し、圍繞せり。眞珠瓔珞の價千萬なるをもつて、その身を莊嚴し、吏民僮僕手に白拂をとつて左右に侍立せり。おほふに寶帳をもつてし、もろもろの華幡をたれ、香水を地にそゞぎ、衆の名華を散じ、寶物を羅列して出内取與すといふ。

「見寶塔品」第十一(p. 33)に東方の諸佛を叙し「あまねく寶幔をはりて寶網うへにかゝれり」、また佛が娑婆世界の莊嚴をして「寶をもつて交露せる幔その上をおほひ……」といふ。かういふ寶帳、寶幔が、まさにこのやうなものかとおもふ。また『法華經』中には繪蓋といふことばも、しばしばみえ、かういふものを推察させる。

2 『鄴中記』(龍溪精舍叢書所收)に「石虎の御牀は、辟方三丈あり、冬月熟錦をほどこす、流蘇の斗帳は四角に純金の龍頭を安じ、五色の流蘇をふくましめる」といふ。

上層はまったくひどい破損で、樂天の列龕は消滅してゐる。たゞ坐佛列像のあひだの化生に、二三瓔珞を輪のやうにさげてゐるのがみられる。(Pl. 18)

腰壁は北端がもっともよりのこり、その中層とのあひだを劃する唐草文帶も、そのしたの物語の浮彫帶も、最下の在俗供養者列像もみとめられる。この配置は、その形式とともに第六洞腰壁とよく似てゐる。浮彫の物語は第九洞前室北壁(本書、第六卷, Fig. 15, Pl. 19—26)にもあるシヤマSyāma(睽摩迦)本生である。(Pl. 19, 20)

〔北壁〕北壁は幅約 8.70m, 高さ約 5.70m で、南壁よりはるかにひくい。壁面は一大楣拱龕で占められ、それが三間にわかれてゐる。左右の隅は層柱、まんなかは柱なく、たゞあさく天人像を正面むきに彫つてゐるのみである。上層は左右壁から坐佛列像その他が延長してきてゐるらしい。坐佛列像は中央の楣拱水平部にいたつてをはるが、わりにひくい楣拱であるから、これよりうへの樂天列龕は北壁いっぱいにあつたものかとおもはれる。北壁大龕の基壇はうまつてゐるが、これは側壁の供養者列像帶と一致し、またその列像をもつてゐるとおもはれる。(Pl. 21, Plan. VI)

中央龕内は高さ約 3.00m の交脚菩薩像で、うづくまつた獅子を左右にひかへ、第六洞方柱東面に匹敵するほど堂々としてゐる。光背も第六洞に似て複雑である。左右蓮上に直立する脇侍菩薩はわりにあさく彫つてある。左右の廂内には半跏思惟の太子像¹⁾を彫る。すっかり破損してゐるけれども、竹か籐でできたとおもはれる几に坐し、半パルメット縁かざりの寶珠形光背をおうてゐる。左右にあさい脇侍立像を彫ることも本尊におなじである。

楣拱額の框内には、それぞれ輕妙な飛天をおさめること例のごとくであるが、そのしたの張幕がみえない。ちやうど、張幕のひきしぼつた弧狀にかたどるごとく、彎曲した飛天が彫つてある。第六洞北壁大龕に似ながらも、その意匠は構造的意圖が稀薄になつてゐる。(Pl. 22, 23)

〔西壁〕西壁の幅約 9.30m, 高さ約 5.60m, その構成は東壁にまったくおなじである。たゞ腰壁の摩滅はよりはなはだしく、上層の保存はやゝよろしい。南から楣拱龕と尖拱龕を交互におき、坐佛、坐佛、倚坐像、交脚像といふ順序になつてゐたらしい。南端だけは楣拱龕の右廂がやゝひろく、こゝに水瓶を手にし、すらりとたつた脇侍菩薩が彫つてある。(Fig. 13) 龕のあひだには五層の層柱がある。東壁の木造塔の形式とはちがつて、長方形の屋根をいたゞいた特殊な形式である²⁾。石窟内では往々柱の役わりを果してゐるので、われわれは層柱とよぶが、塔廟の意味をもつてゐることはあきらかである。第二洞西壁の層柱(Pl. 52)には頂上に覆鉢形がある。各層の塔身には一二體づゝの坐佛をおさめ、屋根には三角垂飾を彫つてゐる。頂上の、化生をなかにした承花³⁾はやゝ萎縮してゐる。(Pl. 24—30, Plan. V)

〔塔柱〕石窟の中央部にある塔柱は大きな基壇をもつてゐる。基壇は方約 4.80m, 塔柱の高さ

1 本書、第六卷, p. 22。

2 類例は第七洞拱門、主室東西壁(本書、第四卷)、第八洞主室東西壁(本書、第五卷, Plan X)、第九洞前室北壁、西壁(本書、第六卷, Plan IV, VII)にある。

は約 5.60m ある。塔は二層になってゐるが、下層は瓦葺屋根、上層は天蓋やうである。天蓋のうへは、いちおうくびれるが、うへにゆくほど須彌山のいたゞきはしだいにひろがって、天井につゞく。塔柱は、うへの二點で第六洞の塔柱に一致するが、相違點は、ほそく、小ぢんまりしてゐることゝ、天蓋のうへに龍の盤踞した須彌山である。

下層は四面とも尖拱龕の坐佛、かどかどが摩滅してゐるのでよくわからないが、いづれも一尊像であるらしい。上層は四面とも楣拱龕、三間に按配してゐる。南面は三尊坐佛、東西面は三尊交脚菩薩像であり、北面は破損して不明である。こゝに、めづらしいのは下層軒組である。これもかなり大破してゐるが、東西南の三面にのこるところを綜合すると、中央に獸面をもった平三つ斗、その左右に多臂神の坐像からなる束がある。たゞ隅の三つ斗が、どうなつてゐたか不明である。ペルシアの獸形柱頭飾がインドにはいり、アショカ^{Asoka}(阿育)王柱となつたのは有名であるが、その後カ^{Kārlī}アルリイ石窟¹⁾などにも獸頭の柱頭飾はさかんであつた。さういふところから、轉々として、この三つ斗に轉用されたものとおもはれる。雲岡ではこゝと第十二洞とにのみ、かうした獸形三つ斗がみとめられる。左右にてた拱は側面形の獅子がある。まんなかには正面形の獅子頭がある。また東のかはりをした多臂神は、第一手をまへにし、第二手で桁をさへへてゐる。高髻をもち若々しい容貌をし、すっかり雲岡ふうになつた神像である。やはりイシュヴァラ^{Īsvara}(自在天)とか、マヘシュヴァラ^{Mahēsvāra}(大自在天)とか、ヴィシュヌ^{Viṣṇu}(韋紐天)とかいつた天神であらう。

上層東西面の交脚の菩薩は、もとより彌勒菩薩であらうが、東面右廂の脇侍が錫杖をもった僧形であるのはめづらしい。塔の天蓋は、上段に蓮華と三つ葉四出文の框組があり、それから三角垂飾がさがり、そのしたにひだをとつた繪帛がたれさがつてゐる。『法華經』にいふ繪蓋といふやうなものとおもふ。天蓋内の天井には、とゞのつた蓮瓣かざりがある。(Pl. 31—37)

〔天井〕天井は東西の幅が約 5.30m、奥ゆきが約 7.20m ある。中心の塔柱のうへは山岳形になつてゐる。「たこ」のあたまのやうな山峯が重疊としてかさなつてゐるのは、やはり須彌山をかたどつたのであらう。須彌山をまもる龍が四隅からおこり、八頭の龍が縦横にからんでゐるのは、壯觀である。鱗がみえ、力づよくふんばつた、みじかい脚がみえる。そしてからんだ龍は、けつきよく正面に頭をだしてむきあつてゐる。東面、西面、北面はこはれてゐて、よくわからない。南面だけに、からうじて、これだけのことがみとめられるのである。この龍の胴はながく、いちおうインドの龍^{nāga}であるが、四足の鱗蟲である中國古來の傳統もつよくたもたれてゐる。(Plan VII)

須彌山はわりに整然として、天井の中心をほゞ正方形に占居してゐる。この方形をめぐつて、おなじ方向にとぶ飛天の一行がある。西がははおくにむかひ、北がはは東にむかひ、東がはは門口

1 本書、第六卷、Fig. 8 参照。もとよりインド、ガンダアラ地方には多いが、アフガニスタンの例はドクタル・イ・ノシルヴァン(Dokhtar-i-Nōshirwān)の石窟壁畫にもあらはされてゐる。A. et Y. Godard et G. Hackin, *Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān* (Mémoires de la Délégation Archéologique Française, Tome II), Paris et Bruxelles 1928, Fig. 27. 村田治郎「阿育王柱の様式的考察」(佛教藝術、第九冊)大阪 1950年刊、p. 46-75.

にむかひ、南がはは西にむかつてとんでゐる。ちやうど右繞Pradaksinaの法にかなつてゐる。これで東、西、北の天井はをはるが、南がはは、まだ餘白がある。そこで、こゝに三つの大蓮華を彫つてゐる。二重の蓮瓣で、ごくあさく彫られてゐて、線刻にちかい。まんなかの花托にある子房がいちじるしく目だつてゐる。(Pls. 38, 39)

第二章 第二洞

〔外景〕 第二洞の外景には、鑿りのこした西のそでが突出してゐて、二三の佛龕がみえる。外壁は崩壊して慘憺たるありさまであるが、西半には腰壁に逆髮形供養者をのこしてゐる。蓮瓣文帯のうへには胡跪の供養者像がみえる。

明窓、拱門は第一洞とおなじ構造であつたらしい。いまは外壁東半がこはれて、明窓も拱門もひとつになり、大きな洞口をひらいてゐる。たゞ拱門西うへのすみか、すこしのこつてゐるので、この拱門天井に交龍の浮彫があつたことがわかる。(Pl. 40, 41)

〔南壁〕 石窟は幅約8.20m、奥ゆき約10.20mの長方形で、中央に、軒の方約2.80m、高さ約5.60mの塔柱のあることも第一洞におなじである。南壁拱門の拱額の一部が、わづかにみとめられる。拱額いっばいに彫つた、優雅な坐佛の一群である。第一洞とちがひ、過去佛の列坐をつくろつたらしい。そのうへの合掌胡跪も、わづかに一二體がのこつてゐる。(Plan X)

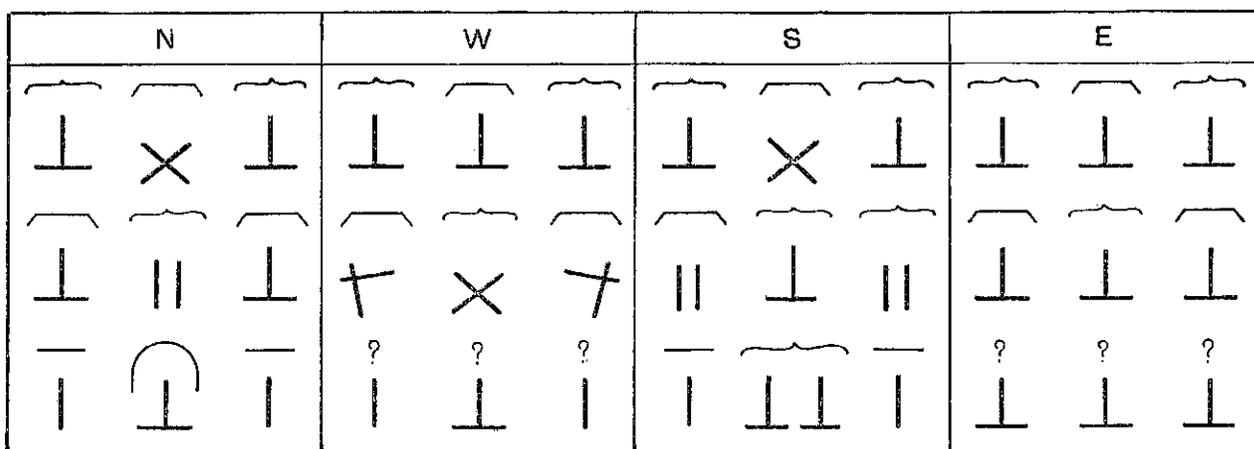
東半は全部破損してゐるが、のこつた南壁西半は、中層、上層、腰壁にわかたれること第一洞におなじである。縁飾として、うへを蓮瓣帯、したを半パルメット並列文帯でかざつてゐる。上層には坐佛列像帯、寶帳帯、樂天列龕帯をかさねる。これらはすべて第一洞におなじである。それに細部も、ほとんど同巧であつて、こゝに再説する必要がないほどである。たゞ壁面の荒れかたは、この第二洞の方がはるかにひどい。

中層も、第一洞とおなじ屋形龕である。屋根のうへには鴟尾と、三角飾と正面および側面形の鳥とがある。第一洞には鳥形はなかつた。軒組みのないこと、帳幕を弧形にしぼりあげたことは、第一洞東龕に一致する。左右のほそい角柱も第一洞にはない。龕内の中心は冠のある菩薩形である。右手をあげ、身體をなゝめにむけ、籐几に半跏の姿勢ですはつてゐる。この右脇に、合掌してたつ小形の比丘像がゐる。顔面はうしなはれてゐるが、つよくまへのめりの姿勢で、直接中心像にはたらきかけてゐるやうすである。いまこれに對する南壁の東龕をうしなつて、確實なことはいへないが、やはり維摩と文殊對問の一龕とおもはれる。したがつて本尊は、もちろん文殊像、比丘はその經中にしばしばあらはれるシアリプトラSāliputra(舍利弗)でなからうか。あるひはこの洞の東龕に照

應するのでなく、第一洞の東龕に應ずるものかも知れない。(Pl. 42)

〔東壁〕 東壁の幅約 10.20m, 高さ約 5.40m, 層序のわけかたは南壁におなじである。しかし、中層、下層の風化は、入口ちかくなるほどはなはだしい。中層は第一洞のとほり東壁に四龕あり、楣拱龕、尖拱龕が交互になってゐる。各龕の本尊は風化と破壊のため、いたましい状態であるが、南から、それぞれ坐佛 (Fig. 18), 倚坐佛 (Fig. 17), 交脚像, 坐佛であることが、からうじてわかる。楣拱額の框には軽快な飛天をいれ、しぼった張幕のかはりに三角垂飾をつけてゐる。左右廂には、それぞれ天蓋のもとに、ほっそりした菩薩立像をおさめてゐる。それが本尊とともに、折目のただしい衣裳をつけ、第五、第六洞の佛像に似てするどく繊細である。たゞ第一龕だけは、その南がはに餘白ができたのか、菩薩像のそとに、腰衣をつけ、左手をあげた逆髪形の像を彫りくはへてゐる。もとより、有力な神ではなからうが、大力があつてものをさゝへ、佛法僧に奉仕する神格の一種にちがひない。造形的にいへば重量のあるものをさゝへるアトランテスの變形といへよう。(Plan XI)

第二、第四の尖拱龕は龕傍に比丘の小像でもあつたらしい。拱額のうちは禪定の佛を中心に、



第十五圖 (Fig. 15) 第二洞塔柱尊像配置圖¹⁾

左右から天人たちがひざまづき、禮讚し、合掌し、恭敬してゐる。化佛といふべきであらうか。拱端には龍をおき、上身を反轉して化佛の方にむけてゐる。尖拱龕でも、楣拱龕でも、拱額のわきの空白に髻のある天人、あるひは逆髪の天人をおさめてゐる。(Pl. 43—46)

龕のあひだには、第六洞とおなじ木造形の塔がある。第六洞におけるごとく、龕の構造とはもはや關係がなく、獨立してゐる。どれも下層がきえてゐるが、五層塔であるらしい。屋内は幕のしたが並坐の二佛、あるひは倚坐の一佛、交脚の一菩薩といふふうになってゐるが、なかには尖拱龕、楣拱龕のところもある。頂上は五成の露盤、その四隅にでる承花、まんなかにある覆鉢、そのうへの刹柱には七つの相輪、頂上に寶珠といふことになって、寶珠のもとから幡が左右にひるがへつてゐる。その點、よく法隆寺の木造塔などに一致し、當時大同あたりにあつた木造塔を髣髴させる。

腰壁は北壁ちかくにのこつてゐて、浮彫佛傳圖のあつたことをしめす。太子競射の場面であ

¹⁾ 挿圖にもちひた略符號は┌坐像, ||倚像, ×交脚像, ㄚ半跏像, |立像をあらはす。

る。上縁の帯は半パルメット並列文である。したの供養者列像は、どこにもものこってゐないが、その存在は第一洞から推定してあやまりないであらう。(Pl. 48B)

上層は坐佛列龕、寶帳帶、樂天列龕がかさなつてゐる。坐佛は通肩形式と右肩右腕を衣端でつんだ形式との二つが交互にならべられてゐる。相接觸する背面に蓮瓣形舉身光を線刻してゐる。最上部の樂天列龕は尖拱龕の並列である。そのなかに膝からうへをあらはした樂天が、いろいろの樂器を奏し、またおどつてゐる。それに彩色がうつくしく華やかである。色彩は、もとより、當初のまゝではなからうが、朱と緑と黄土からなる色調は、だいたい、もとのおもむきをつたへたものであらう。(Pl. 47, 48A, 卷頭圖版)

〔北壁〕 北壁は幅約 8.20m, 高さ約 5.20m, なほ、すそがすこしうまつてゐる。現状は慘憺たる状態で、楣拱額か、尖拱額かすらわがちがたい。たゞ三間になり、中央に坐佛をおさめ、左右に半跏思惟像をおさめた三尊形式であつたことだけはわかる。その點は第一洞の交脚菩薩を中心とし、半跏菩薩を左右に配したのと、たがひに照應してゐるとみるべきであらう。いはゞ、こゝが現在佛釋迦の石窟であり、第一洞が未來佛彌勒菩薩の石窟である。(Plan XIII)

本尊の波狀にした頭髪がわづかにのこつてをり、火焰と飛天にかざられた光背が神祕的で、きびしい餘韻をとめてゐる。脇侍の火焰光背とともに、第五洞、第六洞とのいちじるしい類似が想起される。(Pl. 49—51)

〔西壁〕 西壁の幅約 10.00m, 高さ約 5.40m である。この壁の風化はどこよりもひどい。尖拱龕を第一とし、楣拱龕を第二とし、順序が東壁と逆になつてゐる。第一洞では東西壁とも楣拱、尖拱の順にしてゐるから、けつきよく、この西壁だけが四壁のうちの例外になるわけである。南から二佛並坐 (Fig. 16), 交脚菩薩, 坐佛, 交脚菩薩といふゝうになつてゐる。楣拱龕の拱額内は飛天, 尖拱龕は坐佛供養者群をいれてゐる。ふしぎに東壁におなじであるが、楣拱龕のしたゞけは、三角垂飾にならず、しぼつた張幕になつて、第一洞東壁に一致する。左右脇侍のうへは天蓋なく、それだけ脇侍が大きくあらはされてゐる。(Pl. 52, Plan XII)

龕形のあひだの塔がまた異例である。つまり瓦葺^葺の屋根がなく、第七、第八洞以來の層柱塔が變化したものとおもはれる。平屋根の部分がひくゞ、塔身が大きい。そして塔身に佛龕をつくつてゐるため、よほどかはつてみえる。しかし、けつきよくは層柱塔である。頂上まんなかに大きな伏鉢がある。左右に小さく退化した承花もついてゐる。伏鉢のうへには平頭^{平頭} harmika があり、そのうへに相輪、寶珠をもつた刹柱がある。

〔塔柱〕 塔柱は石窟のまんなかにある。大きさは第一洞の塔柱ほどであるが、基壇がどうなつてゐたかわからない。まだ、したの方が、かなりうもれてゐるにちがひないが、第一洞ほど大きな基壇はなかつたらしい。塔の高さ約 5.60m, 軒のまはり方約 2.80m。こゝは瓦葺^葺屋根の三層塔で、うへに天蓋がある。屋根や軒組みはかなり忠實にうつされ、軒うらの檼がいはゆる扇だるきになつて

第十六図および第十七図は未許諾のため削除

第十六圖 二佛並坐像 (第二洞西壁第一龕)
Fig. 16 Two Buddhas Seated Side by Side (Cave II, West Wall, First Niche).



第十七圖 佛倚坐像 (第二洞東壁第二龕)
Fig. 17 Buddha with Two Legs Pendant
(Cave II, East Wall, Second Niche).

第十八圖 佛坐像と左脇侍 (第二洞東壁第一龕)
Fig. 18 Seated Buddha and Left Attendant
(Cave II, East Wall, First Niche).

る。軒組みは平三つ斗と叉首束で、これをうけて四隅に大面とりの柱がある。柱は上ぼそりて、大斗があり、すそにも礎板がある。いま柱のうちがはに溝があるのは勾欄をつけたためとおもふ。それは、おそらく木造であったかとおもはれるが、木造が当初からの施設であるかどうかは、たしかめるすべがない。組物の内部天井に、蓮瓣装飾のあることは、第一洞方柱におなじである。

塔身は各層とも三間にわけ、尖拱龕、楣拱龕を、たがひちがひに配置し、整然として落ちついてゐる。尊像各種の配置は第十五圖のごとく變化をきはめてゐるが、南面に對し、北面はよく對應してゐるし、西面もまたこれに照應してゐる。たゞ、東面はすっかり坐佛でうめてあって、まったく照應しないのはふしぎである。このうち北面第一層の中龕は、降魔の龕であるらしく、拱額のかはりに、魔衆が龕をとりまいてゐる。西面第二層左右龕は、ともに白馬カンタカKanṭhaka（韃陟）とわかれる半跏の太子像である。第一層だけは、三龕のうち、なほ一列小さい樂天の龕を配置してゐる。それは小さいけれども、周壁上層の樂天列龕と同様である。

三層の軒の出は、ほとんど同様に、傾斜はゆるやかである。そのうへに出る天蓋の出もおなじで、よくそろって美しい。おそらく最初四角な方柱をのこし、漸次それに加工していったものであらう。軒、天蓋の出は、つまり最初にのこされたブロックをしめすものであらう。天蓋は第一洞上層とおなじく蓮華文をならべた框組があり、それからさがる三角垂飾があり、またひだをとった繒帛がある。天蓋のしたはふかく鑿りこんであるが、荒けづりのまゝである。

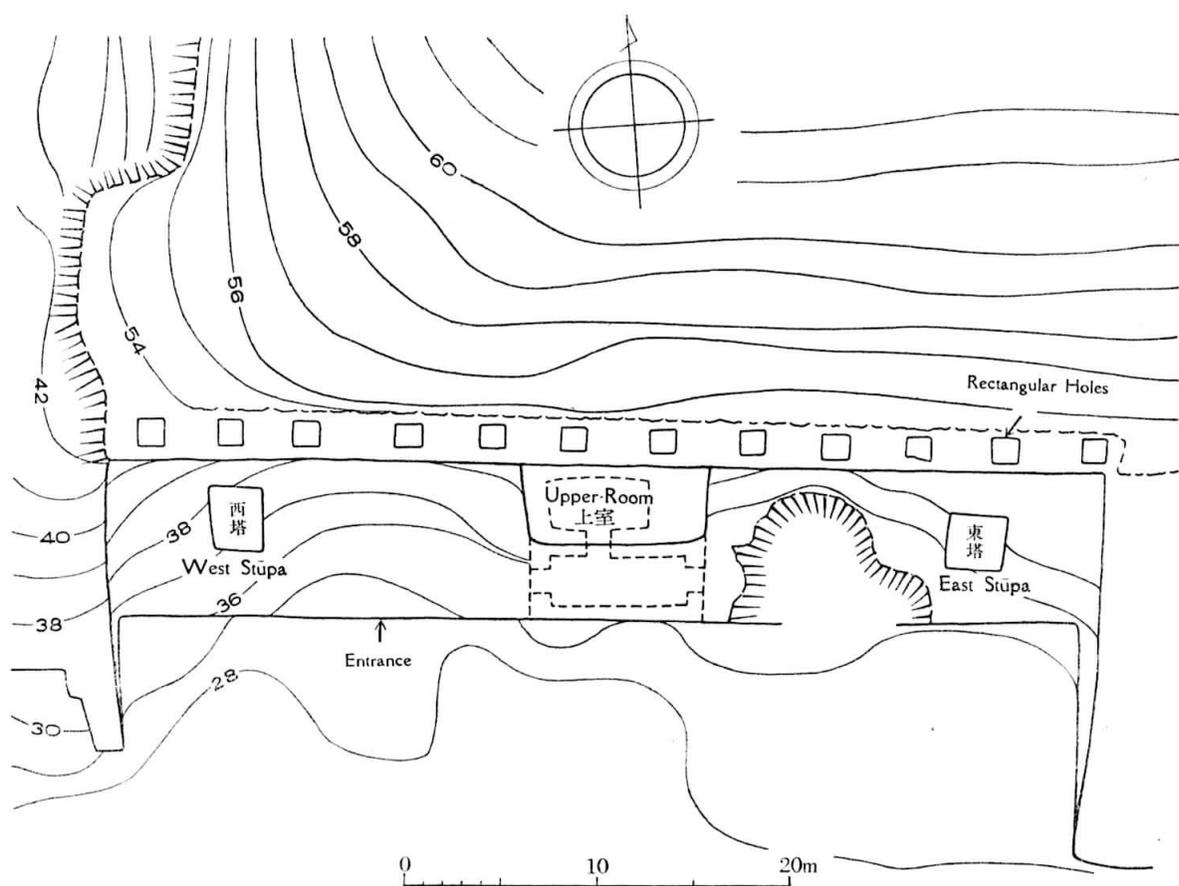
この天蓋のうへも、いったんふかくくびれ、さらにひろがって、天井についてゐる。山岳の状、龍の盤踞など第一洞におなじである。(Pl. 53—62, Plan XIV, XV)

〔天井〕 天井もまた第一洞とおなじである。東西の幅約 6.00m、奥ゆき約 7.80m。中央の塔柱から、のびあがってきた須彌山は、天井のまんなかを方形に區ぎり、そのまはりをめぐって一列の飛天が彫られてゐる。そして、のこった前方部の空白に、三つの大蓮華を彫ってゐる。大蓮華の彫りがあさく線刻にちかいことも、第一洞と同様である。旋回する飛天は、なかなか肉つきのゆたかな、おっとりした作ゆきである。(Pl. 63, 64, Plan XVI)

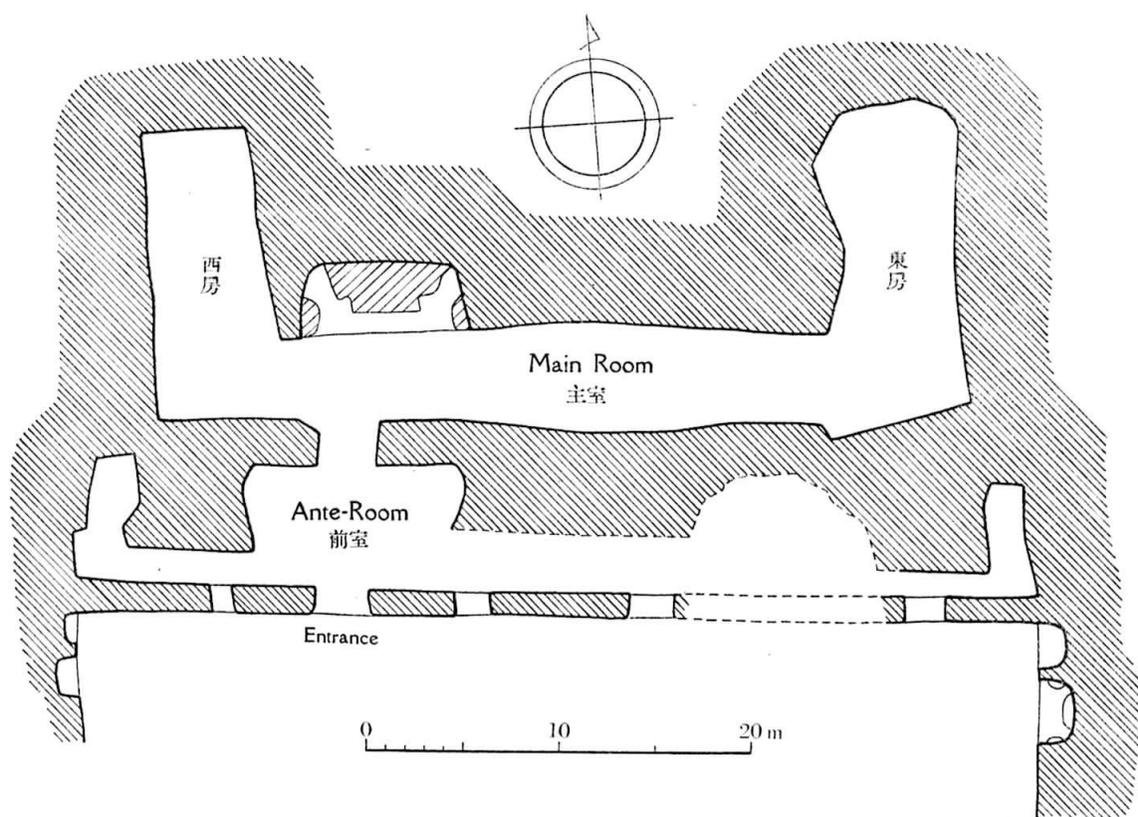
第三章 第三洞

〔外景〕 第三洞は未完成窟である。しかし、その規模の廣大なことは雲岡石窟第一である。北魏の着工であることは、洞外に完成をみた左右双塔、および上室によつてうたがふことはできない。山をふかく切りこんで、たかい垂直の外壁をつくつてゐる。その幅はさうたうひろく、約50.00mにおよび、その左右に袖状の岩塊を鑿りのこしてゐる。この外壁の上方に、長方形の梁孔が一列に

雲岡石窟第一洞—第四洞



第十九圖 a (Fig. 19 a) 第三洞外形平面略圖



第十九圖 b (Fig. 19 b) 第三洞洞內平面略圖

十二ならんである。その孔は、いったん水平におくにはいり、さらにかぎの手に折れて垂直になり、丘のうへにつきぬけてある。その點、第五洞、第六洞外壁の長方形の孔とおなじである。しかし、これが、どういふ機能をはたしてゐたかは推定にくるしむ。もし、これが豫想どほり梁の孔だとすると、梁をロップでひきあげるためなど、作業上の便宜のためかとおもはれる。この梁の孔のすぐうへに、樞をおさめたとおもはれる、小さいまるい孔が水平にならんである。さらにそのうへにそうて、水平にながく壁がくぼんである。こゝには棟があつたものとおもふ。この棟は梁間が十一あり、そのした中央に上室が鑿られてある。けれども、その棟の東端は、鑿りのこした石壁の袖におほひかぶさつてある。西端は、これよりやゝさがつて、また樞の孔の並列がみとめられる。(Pl. 68, Fig. 19 a)

この垂直の壁のしたは、ながいテラスになつてある。そしてテラスのまんなかには鑿りのこした岩塊があつて、これに上室を鑿りこんである。さうして、その東西シムメトリックに双塔があつてある。双塔は、どちらも、まったく北魏の制。岩を鑿りのこしてつくつたものである。木造塔を模した三層塔である。瓦屋根、軒組みをまね、塔身は三龕、もしくは一龕であるが、みな三間にわかれてある。頂上はこはれて、いまはなく、基壇もよくわからない。あるひは正面だけにしか基壇を鑿つてゐなかつたのかとおもふ。(Pl. 69—71)

上室の内部については、のちにとくが、この双塔のあひだにあつた上室の外形が、どんなふうであつたかといふことは、まったくわからない。いま後世の石づみが、前面をおほひ、まへに二つの小窓をつくり、左右の側面にアッチの入口をつくつてある。

テラスのしたは前室になつてある。これにはいる入口は東西二つあつたが、東の方は崩壊はなはだしく、現在利用されてゐない。西の入口はアッチになつてあるが、方立は直立し、天井がやゝ彎曲してゐるのみで、その接觸點はかどになつてある。そして、なんの裝飾もない。たゞ、入口の左右、つまりテラスのしたの外壁に、また一列の樞孔がある。やはり、こゝにも、いつかさしかけの屋根があつたものであらう。(Pl. 72)

〔前室〕 入口をはいると、そこは約 10.00m に 6.00m あまりの前室だが、廊下が東西にほそくのびて、兩端がかぎの手におくまつてある。東西全長約 50.00m。(Fig. 19 b) 東の入口をはいったところにも、一室あつたわけだが、こはれてゐるとともに、もともと未完成であつたらしい。全壁風化はなはだしく、東半はまったく崩壊してゐる。もともと、壁面には、なにも彫つてゐなかつたらしい。たゞ西の入口のつきあたりに、また主室にはいる入口がある。この入口にも、なんの裝飾もない。この入口のうへには明窓がある。これと對應の位置、東の方にも明窓がある。この二つの明窓は、前室とは、なんの交渉もなく、テラスのうへに口をひらき、主室と外界とを直接に通じてゐる。東西の明窓は石窟全體に對し相稱の位置にある。けれども、西の入口に應ずる東の入口は、うがたれてゐない。

〔主室〕 主室内部は近ごろまで、村民かだれかのすまひになつてゐたらしく、石づみ土ぬりの

しきり壁がある。ただし、いまは、それらも大部分が崩壊して、内部は亂雜をきはめてゐる。主室も東西にながく、ながさ約 42.50m、それが兩端で折れておくにはいり、コの字形のプランである。さらに、その東房北端では、西にむかってなほ岩壁をきりひらかうとしたあとがある。だから、はじめに企圖されたのは、方柱を中心にもつ塔廟窟である。しかも、その方柱のはゞが東西にひろく、約 28.00m、奥ゆきは完成してゐないのでわからないが、せまく、せいぜい 8.00m 以下といふところである。第四洞に似た長方形の方柱窟であつたのである。(Fig. 19b) 壁面の完成はみてゐないけれども、天井のたかさは約 13.00m あつて、ほゞ計劃のたかさには達してゐるのであらう。いま天井、その他にのこる歴々たる石きりのあとは、この石窟を、きりひらいていった行程をつぶさにしめしてゐる。(Pl. 87—90)

北魏のとき着工して、こゝまで工事のすゝんだとき、それが突然に中止された。どんな理由かわからない。けれども、未完成のまますてられたのである。そののち、おそらく遼代と推定するのであるが、そのときになって、この方柱南面の西端に大佛龕が彫られたのである。高さ約 10.00m、幅約 7.80m。それは倚坐佛を中心にして、左右に菩薩立像をはべらした三尊佛である。いづれも、ゆたかな、まるまるとした肉つきで、しかも極度に官能的である。雲岡の佛像の諸形式を、たぶんにもつてゐるとはいへ、一見後代のものたることをしめすに足る作品である。風化は、さうたうにあるが、顔、手足はひじょうによくのこつてゐてうつくしい。

本尊の佛倚像は高さ約 9.00m、シムメトリックの通肩である。うすい衣が、はちきれんやうにむっくりした全身をおほうてゐる。ひだはあさく、腕のうへでは階段状になり、膝のしたでは逆階段状になり、胸のあたりでは逆階段状になりながらも、そのふちがむっくりとあがつてゐる。かういふひだも、まったく北魏佛とちがふところである。右手はあげ、左手は左膝におき掌をみせてゐる。脚もととはとけてゐるせゐもあつてか、頭の方がやゝ大きすぎる感じである。頭は大きく、大きな肉髻ushnisaがのつてゐるが、頭髮はあらはしてゐない。面貌は大きく、つよいが、口もとにはたぶん表情がある。眉はながく、みごとな弧をゑがき、目に大きな孔がある。白毫urvaは大きく、あさい。この大佛をつゝむ光背は大きく、龕いっぱいひろがつてゐる。圓光も舉身光も、外縁は火焰、内帯は飛天、つぎは化佛の順になつてゐる。火焰も北魏の方式をとらないし、内區に配された飛天、化佛も北魏のものとはちがつてあさく、輪廓の肉が自然にひくゝなつて背地にきえこみ、しかもその境目の線がくつきりと像をきはだゝせてゐる。かくて、この本尊舉身光のすそに、脇侍の寶珠光が接してゐる。(Pl. 73—78)

脇侍の寶珠光は火焰のふち、化佛の内帯、それに蓮華の中心がある。このしたに肉體のまるまるした脇侍菩薩がたつてゐる。その高さ約 6.00m。兩脇侍とも右手を胸にあてゝ、蓮の蕾のやうなものをもつてゐる。左手はしたにさげてゐる。衣裳は下裳と右肩からかゝる天衣とである。下裳は、さきにいふ逆階段状のひだ、胸の天衣は、すこしもりあがつたひだである。胸はまるく、腹もま

るく、手の甲が實にまるまるとしてゐる。顔は左右によってすこしちがふ。右脇侍の方がやさしく、とゞのつてをり、左脇侍はやゝきつく、目鼻口が大きい。いづれも華美な寶冠をつけ、その「まへだて」に右脇侍は花枝をもった水瓶があり、左脇侍は獅子頭がある。頭髮はつよく線條であらはされ、たかい髻をもち、うしろからたれた髪は、東になって兩肩にかゝってゐる。もし水瓶のある菩薩を『觀無量壽經』(大正大藏經、第十二卷、p. 344) にいふごとく、大勢至菩薩Mahā-sthāmaprāptaとすれば、その相手は觀音菩薩Avalokiteśvaraであり、本尊は阿彌陀佛Amitābha Buddhaといふことになる。ところが、どうしたことか、この觀音たるべき左脇侍の寶冠に化佛がない。この點は阿彌陀三尊と解釋するのに、ひとつの難點となる。また隋唐時代では、倚坐佛は、ほとんどきまつて彌勒佛Maitreya Buddhaである。この點も、阿彌陀佛とするには困難がある。けれども、この石佛が遼代にできたといふことをみとめれば、後者はあまり決定的な難點とならない。また前者は、もとより、さほど決定的な難點でもないから、おそらく阿彌陀佛をあらはしたものであるとして、さしつかへないであらう。(Pl. 79—86)

〔上室〕 テラスのうへにある、いはゞ上室は、およそ 5.10m に 3.00m の長方形である。交脚菩薩を北壁本尊にして、ほゞ完了をみた小窟である。(Fig. 19a) しかし、これが獨立したものでなく、第三洞の附屬であることは、その位置からして明白である。第七洞北壁のやうに、上下二層の佛龕をつくり、上龕に交脚菩薩を安置したのと、おなじ意味あひであらうか。佛龕は北壁いっぱいの楣拱龕で三間にわかれ、左右に脇侍として菩薩立像を彫る。中央のふかい龕に寶壇をまうけ、交脚菩薩をおさめてゐる。像高約 3.00m。いま大破してゐるが、脚の左脇に獅子がうづくまってゐる。獅子もひどく溶けてゐる。右手をあげ、左手を膝のうへにふせてゐる。化佛をつけた、たかい寶冠は比較的よくのこり、北魏當初の氣品がたもたれてゐる。きゃしゃな體軀に、繊細なひだをもった下裳をつけ、天衣をX字形にまじへたところに、環をうがってゐる。光背はよくのこり、第五、第六洞、第十三洞に似るが、より繊細である。龕のふちに小さい比丘の立像がある。楣拱龕のしたには幕をしぼって垂れてゐる。拱額中央の框に、坐佛の三尊のあるのがめづらしい。(Pl. 95—99)

左右壁、前壁は、みな千佛の列龕である。左右壁のまんなかに、やゝ大きな龕がある。腰壁との境には蓮瓣文帯があり、腰壁には逆髪で裸形の天神たちが、兩手で蓮瓣文帯をさゝげてゐる。周壁の上端に、天井なげしともみなされる一帯がある。あるひは第八洞のごとく、線刻で框が彫つてあるかも知れない。そのうへは天井になる。(Pl. 91—94)

天井は東西一本、南北三本の梁で八つの格間にわかれてゐる。格間のなかは破壊がひどいが、四角にふちとりがあつて、そのなかに蓮華文があつたとおもはれる。また梁のした、および側面には、たてにならぶ環つなぎ唐草文帯がある。(Pl. 100, 101)

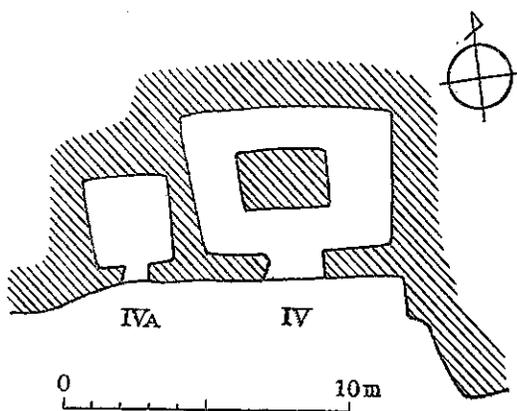
第四章 第四洞

第四洞も未完成窟といへるであらう。アチ形¹の入口はひとつだが、左右に明窓がある。(Fig. 21) 内部は、まだ入口だけのふかさにいたつてゐない。床は入口の上ばとほゞ同高、明窓のすこしたのところををはつてゐる。室内は東西約7.00m、南北約5.00m、そのまんなか²に東西にながい方柱があり、第三洞の小型モデルのやうである。要するに、いまの床は、完成したものでない。(Pl. 102) 内部は、やはり住居になつてゐたとみえ、埴や岩石をつんで壁をつくつたり、爐をきつたりしてあつたが、なによりひどいのは壁面をおほふ煤である。南壁は追刻の小龕のみ雑然としてゐる。その中央部に、亡夫侍中云々の造像記が刻してある。北壁にはなにも鑿つてない。東西壁ではおくの一龕が、最初の計畫のものかとおもはれるが、その他はやはり、追刻の小龕のみである。(Pl. 103—107, 112B, Fig. 20, Plan XVII)

室内のまんなかを占める方柱は、たゞの方柱で、なんら建築的な造構はない。しかし、その意味は塔廟をあらはすもので、やはり塔廟窟の一種である。たゞ造形的に塔のかたちをしてゐないので、第一、第二洞の塔柱に對し、方柱といふほかない。東西約3.00m、南北約2.00mである。ひろい南北兩面にそれぞれ二組の三尊佛立像、せまい東西兩面にそれぞれ一組の三尊佛立像を彫つてゐる。佛龕をつくらず、ぢかに光背をつくり、三尊をならべてゐる。その點、やゝ第十一洞方柱の上層に似てゐる。佛像は、いまみな首をうしなつて、實に慘憺たるありさまであるが、第五、第六洞ふうの長身瘦軀型で、衣裳も中國式である。³(Fig. 22—27) きゃしゃな體格に特色があるといふもに、するどい、そして、はりのあるひだの線にも特色がある。(Pl. 108—110)

天井は格天井⁴であり、蓮華をいれ、また飛天を配してゐる。(Pl. 111, 112A)

〔第四A洞〕 これは第四洞にすぐ接した小窟である。方約3.00mの方形。三壁三龕の、もっとも單純な石窟といへる。外壁は崩壞し、自然南壁はない。東壁は楣拱龕交脚菩薩像、北壁は龕形不明で佛の坐像、西壁は尖拱龕佛坐像である。やはり第五洞、第六洞式の佛像で、楣拱額に、をりたゞみふうの意匠があり、とくに第五洞外壁A窟B窟によく似てゐる。東壁交脚菩薩像は、第三洞上室交脚菩薩ともくらべることができる。腰壁、天井なども風化はなはだしく、當初のすがたを再現することはむづかしい。(Pl. 113—115, Fig. 20)



第二十圖 (Fig. 20)

第四洞, 第四A洞平面略圖

¹ 長廣敏雄「雲岡石窟に於ける佛像の服制について」(東方學報, 京都第十五冊四分) 京都 1947年刊, p. 435

第二十一図から第二十三図は未許諾のため削除

第二十一圖 第四洞および第四A洞外景
Fig. 21 Outside View of Caves IV and IVA.

第二十二圖 菩薩上身(第四洞方柱東面右脇侍)
Fig. 22 Bodhisattva, Upper Body
(Cave IV, Central Pillar, East Face, Right Attendant).

第二十三圖 佛上身(第四洞方柱東面本尊)
Fig. 23 Buddha, Upper Body
(Cave IV, Central Pillar, East Face, Main Buddha).



第二十四圖 佛三尊上身(第四洞方柱南面)
Fig. 24 Buddha Trinities, Upper Bodies
(Cave IV, Central Pillar, South Face).

第二十五圖 佛三尊上身(第四洞方柱南面西群)
Fig. 25 Buddha Trinity, Upper Bodies
(Cave IV, Central Pillar, South Face, West Group).

第二十四図、第二十六図、第二十七図は未許諾のため削除

第二十六圖 菩薩上身(第四洞方柱南面東群右脇侍)
Fig. 26 Bodhisattva, Upper Body
(Cave IV, Central Pillar, South Face,
East Group, Right Attendant).

第二十七圖 菩薩上身(第四洞方柱北面東群右脇侍)
Fig. 27 Bodhisattva, Upper Body
(Cave IV, Central Pillar, North Face,
East Group, Right Attendant).

終 章

東方石窟群の特徴

1

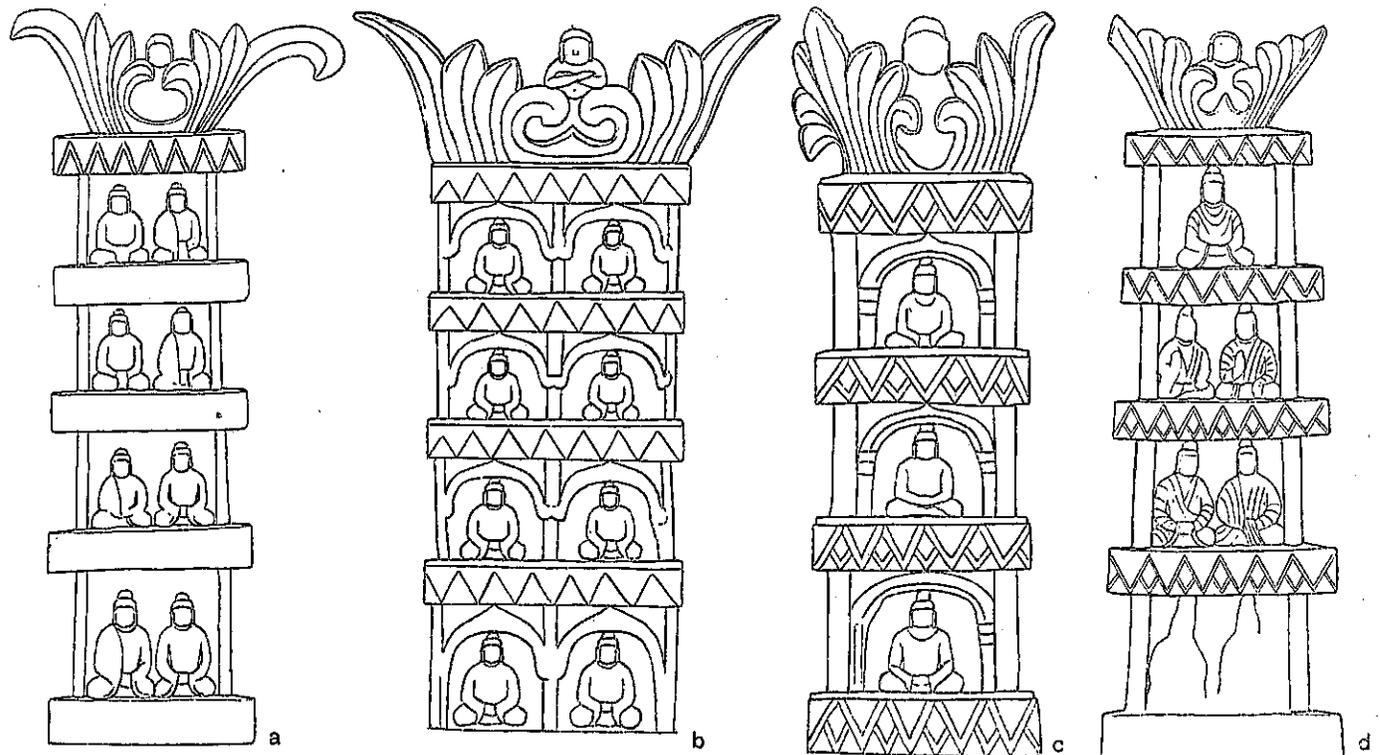
東方石窟群は第一洞と第二洞とが一群をなし、第三洞以下が別群をなすから、二つにわけて概括することが便利である。

第一洞と第二洞とは、しばしば指摘したやうに一雙窟である。厳格にくらべると、その方位が平行してゐない、第二洞西壁の龕形配置が他と照應しない、また第一洞東壁と第二洞西壁の塔形が一致しない、さういふやうな不照應はある。けれども、とにかく、規模においても、形式においてもよく一致し、よく照應するから、一雙窟とみるほかはない。さらにいふべくば、第二洞は現在佛の釋迦洞であり、第一洞は未來佛の彌勒洞であつて、たがひにおぎなひあつてもゐるのである。その點、第七、第八洞の一雙窟、第九、第十洞の一雙窟とも共通するところである。

(1) ところが、この一雙窟は、どちらも塔柱をもつてゐることにおいて特色がある。塔柱、つまり塔廟stūpaをまうけた石窟は、インド以來の定式であるが、中國では塔柱の塔廟らしいのは北魏時代(386—534)のみである。齊隋時代(550—618)では、たゞの方柱になつてしまひ、塔廟の意義がうすれ、唐代になると、その方柱すらなくなつてしまふ。北魏時代でいへば敦煌、涇川縣、義縣、鞏縣に塔廟窟はあるが、みな塔の意味が稀薄で、一步方柱にちかづいてゐる。雲岡では、第六洞、第十一洞、第三十九洞、なほ未完成窟をいれると第三洞、第四洞等が塔廟窟である。そのうちもっとも忠實に木造塔を模したものは第三十九洞、もっとも木造塔をはなれたものは第十一洞である。第一、第二、第六洞は、ほゞその中間にあり、そのうち第二洞がより木造塔的である。けれども雲岡のばあひは、どれをとつても塔廟であるといふ意識はかなり明白である。第一、第二兩洞の塔廟窟と他の塔廟窟とのちがひは、こゝの塔が石窟の面積に對しわりに小さいことである。したがつて、この窟では、かなり、ひろびろとした窟内で塔廟をみて、それをめぐることができ、pradakṣiṇā。他の塔廟窟の方柱は、みな、石窟内を大きく占居し、四周にほそながい房を形成する。そればかりでなく、他の諸洞は周壁たかく上下二層よりなるが、この洞はひくゝ、一層の制である。明窓、拱門の存在は一見二層構成のやうに見えるが、壁面をみると實は一層の構成である。たゞ塔上に須彌山をつくる點では第三十九洞に一致してゐる。

(2) 規模のうへでいふと、第一洞、第二洞は、二十一個の大洞中、第四洞、第十四洞、第十五洞より大きい、しかし、これらの小窟群のうちにある。明窓をもち、拱門をもつこと、側壁に大龕を並列し、周壁上層に樂天列龕等をめぐらし、腰壁に浮彫佛傳、供養者列像をうめること、これらは、みな大窟の特色である。小型の石窟では、ふつうそういふものをみない。たと拱門、明窓は、これよりやゝ小さい第三十五洞などにもある。要するに、この二洞は比較的小さいながらも、なほ雲岡における大窟の構造をもっているのである。

(3) ところが、その大窟のうちでは、第六洞のタイプにもっともちかい。構造上よりは(a)腰壁、中層、上層といふ三段の構成、またその各層内部の構成要素、それらがよく一致してゐる。(b)佛龕の



a) 第八洞東壁第三層

b) 第七洞西壁第一層

c) 第十洞前室東壁上層

d) 第一洞西壁

第二十八圖 (Fig. 28)

配列とこれをわかつ塔形の存在。また(c)中國式になった佛像の服制。それにとみなふ(d)佛像體軀の表現の變化、つまり肉體の充實したうつくしさに無關心になって、儀禮的な服裝の形式美を統一の基礎とかがへてゐる。この形式美はまるみのある彫刻よりも、線刻的手法によってより適切にあらはされる。こゝに漢魏以來の美術の傳統がつよくはたらきかけ、しばしば長身瘦軀、平面的な

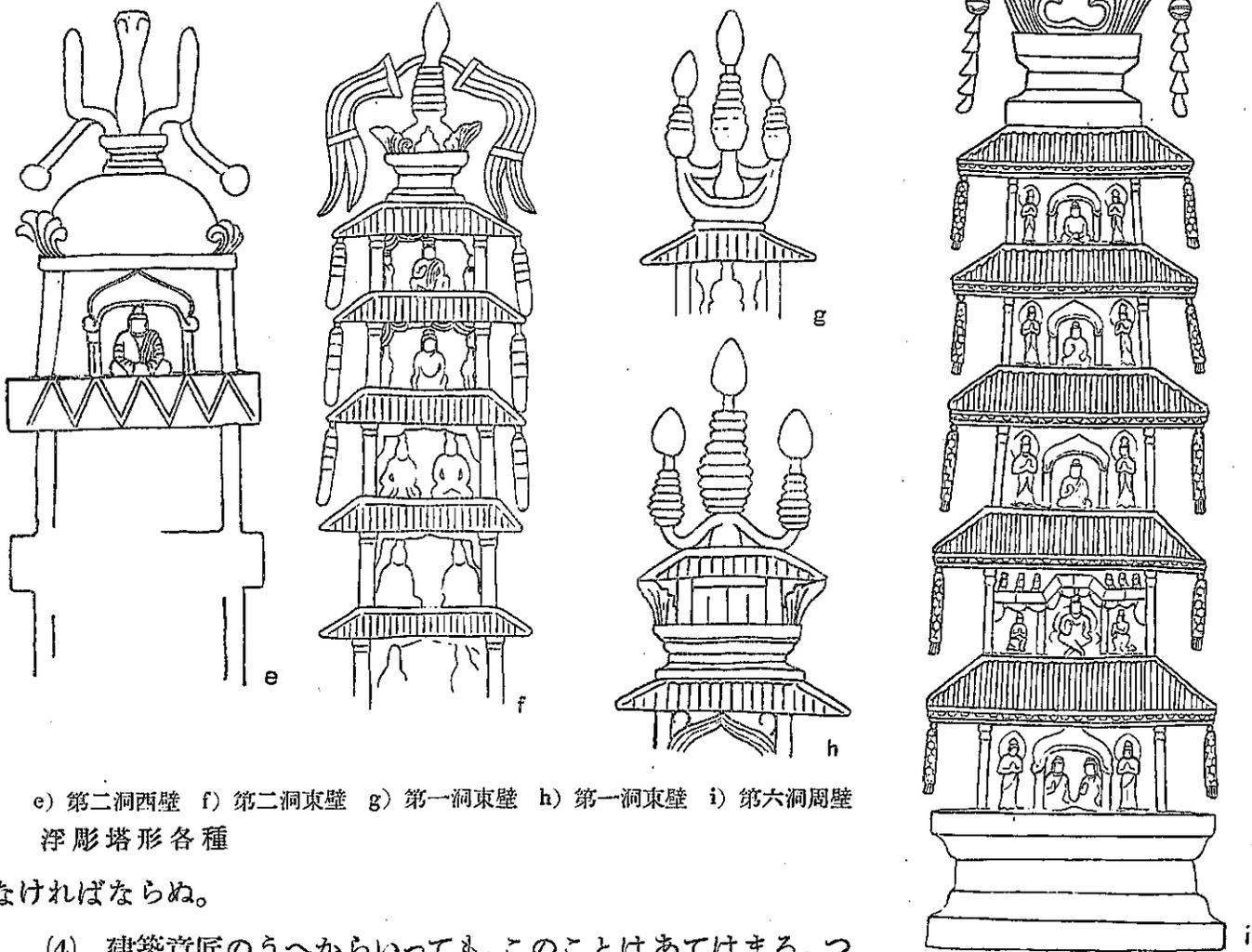
1 敦煌第69洞、第103洞、第110洞、第111A洞、第121洞、第137A洞(P. Pelliot, *Touen-houang*, Tome II-V, Paris 1920-1921, Pl. CXIV, CLXXXVI, CXC, CXCI, CXCII, CCLXXI, CCXCIV)

涇川縣 下王母廟洞 (H. Jayne, *The Buddhist Caves of the Ching Ho Valley*. Eastern Art, Vol. I, Philadelphia 1928)

義縣萬佛堂第一洞 (關野貞「滿州義縣萬佛洞」國華, 第510號, 東京1933年刊) (濱田耕作「遼西義縣の石窟寺」寶雲, 第八冊, 京都1933年刊)

鞏縣第二, 第三, 第五洞 (關野貞, 常盤大定『支那佛教史』評解第二卷, 東京1926年刊, p. 116, 117)

彫像となる。この點第五洞、第六洞にちかいのであるが、さらに一步すすめて比較すると、第一洞、第二洞ではなほ西方式の服制を固執するとともに、肉體のまるみもなほ重視されたものがある。たとへば上層の坐佛列像がそれであり、また中層でも拱額の飛天など、まだ第五洞、第六洞式にはなつてゐないのである。第五洞、第六洞ふうになつてゐるのは、まづ中層諸龕の本尊であるが、それよりも、その脇侍たち、天人たちが、はなはだしい。だから第一洞、第二洞には第五洞、第六洞ふうなもの、第九洞、第十洞ふうなものゝが混在してゐるといは



e) 第二洞西壁 f) 第二洞東壁 g) 第一洞東壁 h) 第一洞東壁 i) 第六洞周壁
浮彫塔形各種

なければならぬ。

(4) 建築意匠のうへからいっても、このことはあてはまる。つ

まり、木造建築ふうの塔をもつてゐるといふ點では第六洞に似、層柱形式の塔をもつてゐるといふ點では第九洞、第十洞に似て、ちょうどその中間になる。第九洞、第十洞は屋形龕その他には木造建築の形式を種々採用したが、塔形はやはり第七洞、第八洞以來の層柱形式を襲用した。第五洞、第六洞になると、もつぱら木造建築ふうの塔形がもちひられた。第一洞と第二洞はこの二つの形式を併用してゐるのである。第一洞、第二洞の西壁は前者であり、東壁は後者である。だから、この關係を敷衍してみると、第九、第十洞は第七、第八洞と第一、第二洞との中間にあり、第一、第二洞は第九、第十洞と第五、第六洞との中間にあるといはなければならぬ。(Fig. 28)

(5) 天井にも特色がある。塔の須彌山が大きく天井の中心をしめてゐる。須彌山が塔から天井にのびあがってゐる點では、第三十九洞におなじであるが、第三十九洞は第六洞同様に格天井である。第一洞、第二洞では、なんら建築的意匠なく、須彌山のまはりに飛天をめぐらし、前方の餘白に大蓮華をならべてゐる。第七洞以下第十洞では、かなり構造的、立體的であつた天井が、こゝではまったく非構造的、平面的になりきつてゐる。

うへに第九、第十洞、乃至第五、第六洞との比較をしばしばのべたが、しかし、そのどれともちがつて、あの華美な唐草文帯は、第一、第二洞には、すこしもない。このことは充分に注意されてよい。また、こゝにはペルシア・インド的な獸形拱のあることをのべたが、それは部分的な意匠の問題である。ぜんたいの様式のうへに、西方様式がつよいといふことはない。たとへば、軒ぐみにある多臂神像をみても、けつして第七、第八洞よりも西方的であるとはいへないのである。また第九、第十洞と比較してみても、いかにこゝの像が圓熟した雲岡中期の様式になりきつてゐるかといふことがわかる。要するに、以上の結果を綜合すると第五、第六洞にもつともちかいが、一面またそれとちがつて第九、第十洞にちかい點もある。それで、もしその造建次第をかんがへるならば第九、第十洞と第五、第六洞との中間におかるべきであらう。第五、第六洞が、のちにのべるやうに高祖孝文帝の太和十年後(A.D. cir. 487)、第九、第十洞が太和初年(A.D. 477)の造營とすれば、この洞は太和はじめの數年間(A.D. cir. 480)にできたものと推論しなければならないであらう。

2

第三洞と第四洞とは、ともに未完成窟である。ところが現状をもつてするも、完成したばあひを想像するも、雲岡における異常な石窟である。ユニクな構造をもつた石窟である。第三洞は雲岡第一といふほど大きく、第四洞は雲岡二十一大洞中最小のひとつである。けれども、東西にながい方柱をのこすことにおいて、兩方に明窓をひらくことにおいて、まったく相似である。一方を原型、一方を模型といつてもよいやうな關係である。その完成された第三洞上室、双塔などの佛像様式を、また第四洞のそれに比較すると、これもたがひに相似てゐるから、時期もほゞ平行してつくられたものとおもふ。

たゞ第三洞と第四洞とを比較して、是非一言しなければならないのは、石窟開鑿の過程にちがひのあることである。それは第三洞をみると、全壁面が荒けづりであるが、いちおう仕あがつてゐる。そしてそののちに佛龕、佛像等がつくられる順序であつたらしい。ところが、第四洞では、これに反し上層だけ鑿り、すぐ上層方柱の佛像、それから天井をしあげ、上層周壁の龕にとりかゝつてゐる。この石窟に最初計畫されてゐたらしい下層は、その拱門のふかいつくりから、うたがへないのであるが、これよりのちにつくられるべき順序にあつたと推測される。第十三B洞の未完成方柱

洞は、やはり第三洞とおなじ工程がみとめられるし、第十三洞外の佛龕でも小さくはあるが、まづ全構造を荒けづりてつくり、それから部分的にしあげていってゐる。だから、第三洞の工程がふつうで、第四洞の工程がむしろ異例だといふことになる。さうすると、あの17.00~18.00mにおよぶ雲岡における大洞の上層部しあげは、みなさうたうな足場をくまなければならなかつたであらう。第四洞の異例は、當初一層の計畫であつたのが、のち二層に変更されたためともおもへるが、それでは入口と明窓の配置が不都合である。



a) 下華嚴寺脇侍(遼) b) 下華嚴寺本尊(遼) c) 第三洞右脇侍 d) 第三洞本尊 e) 響堂山北洞(北齊) f) 響堂山中洞(北齊)

第二十九圖 (Fig. 29) 光背各種

第三洞は、いづれにしてもユニクな存在である。それは、まづ第一に(a)その大きさにあるが、つぎは(b)その長方形の大方柱にある。それから(c)二つの明窓、二つの拱門、そのひとつは開鑿されないうまゝにをはつたのである。(d)コの字形の前室である。(e)前室のうへがテラスであり、(f)そこに上室があり、(g)双塔がそびえてゐる¹⁾。かういふ諸點において、雲岡中まったくその類例をみないのであるが、いま雲岡以外についてかんがへても、また似たものがない。

上室や双塔の佛像、佛龕の形式からすると、前述のごとく雲岡大洞中最末期のものである。それに、これだけの大造營は、どうしても帝室の力が必要である。さうすると、この石窟を未完成にをはらせた運命は、なによりも孝文帝の唐突な洛陽遷都(A.D. 494)に歸せざるをえない。つまり平城が、はなやかな首都であつた太和の末年に着工され、洛陽遷都とともに放棄されたと解すべきであらう。いひかへると太和十七、八年(A.D. 493, 494)の造營である。

¹⁾ わがくには飛鳥白鳳時代の寺院が一塔制であり、奈良時代になり双塔制があらはれるので、一般に双塔制はあたらしいかのやうにかんがへられてゐる。村田治郎博士は、その『支那の佛塔』(京都1940年刊) p. 52において『歷代名畫記』卷五の武昌昌樂寺の東西二塔を引用して、北朝すでに双塔制のあることを指摘されたが、これもその北魏の實例とすることができよう。

こゝで、もうひとつの問題は石窟外壁の梁の孔と、たるきの孔である。かくのごとき木造架構をしめす造作が、はたして北魏の當時におこなはれたものかどうか、といふことである。この種のL字形になった大孔は、第五洞、第六洞の外壁上部にもある。けれども、それは現在の木造架構にすこしも關係してゐない。したがって古いものであると推定される。丘のうへまでつきぬけてゐない梁の孔は第九、第十洞まへにもあり、曇曜五窟にもある。ことに後者には小さいたるき孔まで整然とならんでをり、棟木のとほったやうな水平のあともあり、第三洞外壁とまったくおなじである。これらを総合してかんがへると、この工事がほどこされたのは、當然さうたうに造營のさかんなときであるとしなければならない。それに、あの丘のうへまで貫通した大工事は、石工のさかんなときでないといふはしくない。この洞は未完成にをはってゐる。この工事は北魏の當初か、あるひは三尊大佛をつくったときか、どちらかであるが、さうすると局部的な三尊龕を鑿ったときより、全面に工事をおこなった、北魏時代の作とする方がより自然であらう。したがって、場所において、また時期において、もっとも接近してゐる第五、第六洞が、これとおなじL字形の梁孔をもつてゐることも、また、ふさはしいことであらう。

つぎは内部の三尊大佛の製作年代である。これについては、すでに關野貞博士の説がある。それによると、よろづに、はでごのみの隋の煬帝が北方開發のためと、父文帝の冥福のためとにつくったといふのである。この説は、なんら積極的な證據がない。博士の一時的な想像かとおもはれる。いま博士の説を想起しつゝ直接作品の検討にはいりたいとおもふが、それにはまづ注意しておかなければならないことがある。それは、この三尊佛が、北魏石佛の淵藪である雲岡においてつくられてゐるため、擬古的要素が多分にふくまれてゐるといふ點である。たとへば光背の形式、佛頭、通肩の衣などはそれである。もし、この擬古的な要素が誤解されると、製作年代もはるか古くみられるやうなおそれがある。まづ、この北魏様式に對する擬古的な要素をぬきにして考察をすゝめなければならない。

佛や菩薩の顔容、姿態が、かたいブロック的である點が隋式と共通することは、だれしも、いちおう目をつけるところであらう。しかし、眉目の微妙な表情、鼻や口もとの甘美さ、耳のかはった彫りこみ、髪ぎはの官能的な觸覺などは、隋佛にみられないものである。その點は、かりに山東の駝山や雲門山の隋の大佛、天龍山の隋の石佛にくらべてみれば、あきらかである。肩や胸、脇腹にきはめてうすい衣文をつくり、やはらかな肌ざはりさへ感じられることも、北齊や隋佛にないことである。いはゞブロック的な體格と、體溫を感じさせるやうな官能的な表情との混在は、どうみても盛唐

1 關野貞「雲岡石窟の年代と其様式の起源に就いて」(支那の建築と藝術) p. 484, 485. この講演は雲岡石窟の概要をといたものとして、すぐれた内容をもつてゐる。隋の煬帝説は、その後常盤博士との共著『支那佛教史蹟』評解第二冊、東京 1926年刊、p. 37, 38 にはとかれてゐない。たゞ隋佛といふのみである。

2 關野貞、常盤大定『支那佛教史蹟』第四冊、東京 1925年刊、Pl. 91—101, 75—83.

3 同書、第三冊、東京 1927年刊、Pl. 41, 42. 天龍山、第八窟佛龕

以後の所産である。たとへば、いま脇侍菩薩の口もと(Pl. 83, 84)と、大同下華嚴寺薄伽教藏の左端菩薩像の口もととを比較すれば、そのいちじるしい類同はおほいがたい。

つぎに脇侍菩薩の寶冠裝飾をみると、事態はさらに明瞭になる。べつにのべたごとく、寶冠裝飾のうちに北齊式をおもはせる大葉唐草がある。しかし、その葉の反轉のぐあひは、すっかりちがってゐる。第一、かういふ華美な寶冠は、北齊にも隋式にもない。また、その冠帶にしばられた頭髪のコまかい表現も、まったくみないものである。これに、いちばんちかいものは、やはり遼の菩薩像である。おなじ下華嚴寺の菩薩坐像²をみればわかる。下華嚴寺の菩薩寶冠と、第三洞の菩薩寶冠とのあひだには、裝飾のモチーフはちがふけれども、華美な道具だてにおいて共通するものがあるし、その冠帶につけた長方形の金具かざりも、たがひに似てゐる。この類似は重要であるとおもふ。下華嚴寺菩薩像の、冠帶下にもりあがった髪容、兩肩にたれた生々しい頭髪の波うちは、雲岡像と共通である。そして雲岡像の冠上にたかく屹立する寶髻は、けっして唐代以前にはあらはれないものである。とともに、このやうな璽珞のかざりをもたぬ菩薩像は、北齊、隋像には稀有である。

最後に光背である。火焰がおほまかで、幅のひろい點は、いちおう北齊式との類似がないではない。けれども、それは表面的な類似である。北魏の傳統をもった北齊式の火焰は、つねに波状にうごくことを原理としてゐる。火焰の面も緊張があつて、けっして平板ではない。かういふ點もあはせかんがへ、おほまかで、幅ひろい點をみると、むしろ下華嚴寺薄伽教藏の光背がよりよく似てゐるとおもふ。(Fig. 29)光背にある化佛と飛天の浮彫も、ふつう雲岡にみるものとはちがつてゐる。北魏のものでないことはもとよりであるが、その彫り方のあさく、しかも像のはしにゆくほど自然にひくゝなつて、背面に接觸するところの輪廓が、ほそく線的に印象づけられるのは、一種獨特のおもむきがある。そして、それは第十一洞方柱南面の、遼代と推定される浮彫像と一致する。

なにしろ、まだ遼代の佛像様式が確立してゐないので、以上のやうな比較だけでは、なほ不安を感じられるかも知れないが、こゝに雲岡造營の一般狀況を参照すると、もういちだん、遼代造像説が有力になるとおもふ。雲岡の造營は北魏の全盛期をすぎると、それ以後はいっかうふるはず、遼代にいたつて、はじめて活潑な復興期にはいるのである。遼(契丹)はシラムレン^{Sira-muren}の流域におこつた遊牧民族の王朝(916—1125)であるが、たくみに麾下の漢人を活用し、契丹人との二重體制をうちたて、また後晋(937—946)の石敬瑭をたすけては、燕雲十六州(北京から長城地帯)を手にいれ、軍事的に宋を制壓するとともに、文化的には宋の文物をさかんに吸収した。その六代聖宗(983—1030)、七代興宗(1031—1054)、八代道宗(1055—1100)の時代はもつとも文化すゝみ、佛教もとくにさかんな時代であつた。ことに大同(雲州)は、興宗の重熙十三年(1044)に五京の一たる西京になつて、ふたゝ

1 關野貞、竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』東京 1934年刊、上巻、Pl. 54.

2 同書、Pl. 53.

3 『遼史』卷一九、興宗紀。

び北魏國都時代につぐ盛況をみることになったとおもはれる。大同下華嚴寺薄伽教藏には、これにさきだつ六年、重熙七年(1038)創建の棟札がある¹⁾。したがって、すでに西京になる以前から、北族活躍のこの時期には、長城地帯の要衝として、殷賑になりつゝあつた大同のすがたが、しのばれるであらう。西京になったのちには、雲岡は北魏時代にやゝ似た環境にめぐまれた。第一には(a)大同に都があつたこと、第二には(b)王朝が北族出身者であつたこと、第三には(c)佛教が、またさかんであつたこと。かくて大同の城内に華嚴寺、善化寺等の建立されるに平行して、雲岡にも大規模の復興工事がおこなはれ、各石窟のまへには一様に佛殿建築がつくられたやうである。このことは、各洞まへその他の發掘において、いたるところに遼の瓦磚が見いだされることによってあきらかである。このときの造築は、ほとんど雲岡の全面にわたつたやうである。第十三洞内の刻字には、多数の石像が修治されたとのべられてゐる²⁾。したがって、第三洞や第十一洞内の石像が、つくりだされる環境は十分に成熟してゐたのである。いま、第三洞の三尊が、重熙七年(1038)創建の下華嚴寺諸尊によく似てゐるといふことであれば、この第三洞三尊の製作年代も、またそれにきはめてちかゝつたと推定してよからうとおもふ。とにかく、隋唐時代を反映するなにもものもない雲岡に、これだけ遼代遺構のゆたかなのをみると、この石像の遼代造建説はもつとも無理のない結論だとおもふ。

1 竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』東京 1944年刊, p. 76, 77.

2 この修像記は第十三洞の第十卷で發表する豫定である。

圖 版 解 説

雲 岡 石 窟

Pl. 1 雲岡石窟 全景

武州川南岸の丘のうへからみた石窟の全景である。むかつて左方が曇曜五窟をふくむ西方群である。建物のあるあたりが中央群であり、右方のしげみの左右が東方群である。この寫眞では、いちおう西方石窟群のまへが廣場になってゐる。そのまへにならんでゐる、ひくい建物は窰 yao とよばれてゐる民居である。そのまへが柳の並木になり、川になる。左方にみえるのは堤である。これをさかのぼると南側から突出した對岸の突角、魯班窰といふところに二つの石窟がある。これは番號をつけてゐない。さらに1 km ばかりさかのぼると、つぎの部落、吳官屯の南に若干の佛龕がある。けれども、いふべきほどのものはない。これを、なほ

さかのぼって西方にゆくと左雲になり、右玉となり、殺虎口をこえて緩急盆地にでる。

それとは反對に、圖版の右方へ川にそうてくると、ちやうどこの寫眞のはづれあたりに、若干の石窟が川にのぞんだ崖にいとなまれてゐる。しかし、こゝにも、とくに寫眞にするほどのものはない。たゞ、これをくだつてゆくと青磁窰をへ、小站をへて大同に達するのである。

丘のうへにでると一望荒涼たる高原である。ひくい骨ばった山が大同の方面にみえる。高原のうへは畑になってゐるが、楊柳のある村は、みな水にちかい谷間にひそんでゐる。これに反し、烽臺はたかいところをぬって西へ、北へ、あるひは東へと、點々としてつらなつてゐる。

第 一 洞

Pl. 2A 東端 諸洞

B 左雲縣 交界

A. これらの石窟は第一洞から4~500m はなれた東方にある。河中からのぞんだ寫眞である。石窟のまへに舊道がとほり、うへに新道がはしつてゐる。石窟は四つみえるが、入口は土でふさがれてゐる。大きさは第四A洞くらゐであるが、なかにはみべきものがない。外壁もひどく風化し、たゞ洞側の力士像が、かすかにうかがはれるのみである。これにもっとも近いものは、第五洞の外壁A窟、西方の第三十五洞あたりで、それは同時にそのつくられた時代を暗示してゐる。

B. 第一洞のそと、東がはに若干の佛龕がある。二佛並坐の小窟、また屋形龕の形迹がみとめられる。さらにその東に「左雲交界」の文字がふかぶかとほつてある。さうすると、石窟群の東端まで左雲縣がのびてゐたわけである。いま大同縣に屬してゐる雲岡鎮が、もとは左雲縣に屬してゐたのである。

A. むかつて右の、明窓のみえるのが第一洞、左の大きく口をひらいて崩壊してゐるのが第二洞である。さらに東方にも崩壊した小窟があり、西方にも小さい佛龕のあとがある。けれども今日では、べつに見るべきものはなにもない。左雲交界の文字のあるのは、むかつて右端、くろくみえる小窟のすこし東方である。

B. どちらにも内部の塔がみえる。外壁の様子はどうなつてゐたか、わからないけれども、第二洞の西側には、風化しながらも等身大の人物列像がある。せまい運搬の帶狀文様のしたに、頭髮をさかだてた天人がある。供養する天人列像である。前室といふほどのものは、なかつたであらうが、岩山を鑿りひらいたために、まへわきに袖のやうな岩塊がつきでゐる。第一洞上部にみえる方形の區劃、それには後世遊人の題記が彫つてある。第二洞上部の長方形の區劃も、やはりおなじ目的からつくられたものである。

Pl. 4 第一洞 外壁

外壁は風化はなはだしく、なにもものこつてゐない。門口の基部は、なほいくらか土中にうまつてゐる。むかつ

Pl. 3A,B 第一洞, 第二洞 外観

雲岡石窟第一洞

て右上の方形には監察御史朱豊翰の「遊雲岡石佛寺題記」がある。

Pl. 5 第一洞 拱門

拱門のわきには武装の門神でもあったらうが、風化してゐて、いまはなにものこつてゐない。拱門天井には交龍の浮彫があつて、第十二洞の拱門とおなじである。(拱門現在高 2.20m)

Pl. 6, 7 第一洞 西壁, 東壁

中央に塔があり、西壁の四龍がみえ、東壁のおくの三龍がみえる。これが洞内の全貌である。いま朱と緑青の補彩が全壁をおほうてゐる。風化と龜裂のひどい石窟である。床は、まだ土中にうまつてゐる。(側壁現在高約 5.25m)

Pl. 8, 9, 10 第一洞 南壁

風化は下層腰壁のほか、あまりひどくないが、龜裂はかへつてはなはだしい。床はまだ、すこしうまつてゐる。入口拱門のうへに尖拱額があり、拱門左右の中層には屋形の龍がある。明窓の左右にあたる上層には、坐佛の列像があり、そのうへには三角垂飾があり、さらに樂天の列龍がある。腰壁以下は、なにがあつたか、まったく不明である。しかし、東壁北隅の状態からすれば、最下には浮彫列像のあつたことは、ほぼ確實であらう。(現在高 5.00m, 幅 6.50m)

Pl. 11A 第一洞 南壁 拱門拱額

B 第一洞 拱門 天井交龍

A. 上部は缺損してゐるが、拱額中央に佛の坐像がある。かざりのない方座にすわり、膝のした、足のうへから衣端をたれさげてゐる。いはゆる裳懸座である。左右からそれぞれ四體づきの天人が、ひさまづいて合掌してゐる。うしろへ大きくはねかへつた天衣は、型紙をおしあてたやうに形式化してゐる。拱端は獸形になつてゐて、前脚をふんばり、頭をうしろにふりむけてゐる。どちらも虎頭である。拱額のうへ、左右のあきまに、下半身をよこたへた二體の飛天をあらはしてゐるが、いまは無残にも大破してゐる。大正初年の撮影にかかる岩田秀則氏の寫真には、なほこの飛天がみとめられる。(拱門幅 2.20m)

B. 龍の意匠は、漢代、いな先秦以來中國人のこのむところである。こゝでもみごとな浮彫に彫りあげてゐる。たゞ惜しむらくは、外壁風化のため南がはが破損しさつてゐることである。左右シムメトリックに龍頭を相對せしめ、拱

頂で龍身を交叉せしめる。龍身ははげしく彎曲し、尾部は下方にある。(Pl. 5) するとい爪のある四足は、つよくはねかへつてゐる。龍身の鱗は線刻であらはし、龍頭には奇妙なながい角と、ながい耳とがついてゐる。靈的な迫力がみなぎり、實につよい。漢代以來の傳統が、いまだによく生きてゐる。(拱門側壁幅 0.80m)

Pl. 12, 13 第一洞 南壁 上層

せまい蓮瓣帯があり、そのうへに坐佛をならべてゐる。坐佛のあひだには、蓮上の化生 *aupapādaka* が合掌して上身をのりだしてゐる。その點、第八洞上層とまったくおなじである。第八洞ではそのうへに三角形の鋸齒文帯があつたが(第五卷, Pl. 85), こゝでは三角形の垂飾と、ひだをとつた幕である。(Rub. II j) ちやうど天蓋や、寶帳にかたどつてゐる。第八洞の鋸齒文帯は、その徹底した略式である。しかし、こゝのも、第六洞天井ぎはのやうにガアランドがなく、幕のすそが第六洞方柱のやうに寫實的なひだでないのは、ある程度略式たるをまぬがれない。佛はほとんど頭部をうしなつてゐる。結跏趺坐、定印の佛といふべきであるが、衣は二種になつてゐる。一はまったく左右シムメトリカルな通肩、他は偏袒右肩のはずであるが、右肩はふかぶかと衣端でつゝみ、腕まですっぽりとくるんでゐる。前者は胸をつよくはり、わき腹がほそくくびれ、後者は胸もとがすこしあらはれるが、右の脇したはすつかりかくれ、左脇だけを通肩の佛とおなじやうに彫りこんでゐる。かうした二種の佛を交互におくことは、雲岡において、もつともふつうのやりかたである。第八洞天井ぎはの坐佛列像もさうであつたが(第五卷, Pl. 85), ガンダアラあたりにも、かういふものゝ萌芽はすでにみとめられる。¹⁾

衣文はかんたんな刻線である。小形の佛像ながら堂々としており、この石窟内の諸尊が、大部分破損してゐる現在としては貴重な彫刻である。

天蓋様の裝飾のうへは 0.18m ばかりの無文帯があり、そのうへは樂天の列龍になる。龍はおほむね崩壊してゐるが、樂天はいくらかのこり、膝のあたりまでの立ちすがたがみとめられる。したがつて、このしたの無文帯は第九洞(第六卷, Pl. 9, 13, 14) などとみる、萬字くづしの欄杆にあたるわけである。(坐佛高 0.55m)

¹⁾ A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra*, Tome I, Paris 1905, Fig. 134.

Pl. 14 第一洞 南壁 東龍

上部蓮瓣文帯と腰壁の半パルメット並列文帯とはさまれた主要部である。東西ともに屋形龕。この東龕は、なまむきの姿勢で牀座に腰をおろした維摩像 Vimalakīrti を中心とする。いま頭部をうしなっているが、岩田秀則氏の寫眞 (Fig. 10) では、まだよくのこっている。かなりふかい丸彫で三角帽をつけ、泰然とかまへてゐる。牀座の屏障のぐあひ、あつい丸味のゆたかなからだに、うすい衣をまとったさまは、第六洞南壁の維摩像に似てゐる。右手を牀につき、左手をあげてゐる。この維摩像に對して、その左わきに文殊菩薩 Mañjuśrī の小像がある。やはり椅子に腰をかけてゐるが、椅子も横むきにあらはされてゐる。衣はやゝ形式化しておもく、ひだは刻線であらはされてゐる。右手をあげ、維摩によびかけてゐる形だが、視線をしめす首をうしなつて、たゞ圓光がむなしくのこるのみである。岩田氏の寫眞 (Fig. 11) でも、すでに顔面がいたんでゐる。文殊のうへに二人、維摩の背後に三人、合掌した供養者がゐる。これは聴聞の大衆であらう。このやうに維摩と文殊を一龕におさめたのは異例である。しかも維摩像を文殊像に比して、かうまで大きくしたのもめづらしい。あらはすところは、もちろん『維摩詰所説經』(大正大藏經, 第十四卷)にとくところの文殊問疾の一件である。もとより維摩が中心で、文殊は脇役であるから、維摩が大きくあらはされるのは當然であらう。維摩は居士であるから、寛潤な、當時の貴族の服装をしてゐる。また病氣であるから、牀座のうへにすわつてゐるのであらう。第六洞の例とおなじく、頭には三角頭巾をかぶり、左手には塵尾をもつてゐるらしい。(龕高 1.80m)

Pl. 15 第一洞 南壁 西龕

屋形のなかに、二體の彫像が相對してゐる。中央像の頭部と両手とは古く破損したらしく、補修の孔がのこつてゐる。かざりのない方座に左足をたれ、右足を座上によこたへてゐる。この坐法は佛の尊像にふさはしくない。うつくしく波うった衣文が、兩肩から胸、腹にながれるのも、佛像のふつうの衣文とちがつてゐる。なまむきにむいて腰をかけ、バラモン仙者に話かけてゐる。バラモンは、これに對し、半跏思惟像とおなじやうに藤椅子(筌蹄)¹⁾に、なまむきに腰をかけ、左脚を右腿のうへにあげてゐる。左手はあげ、右手は左足のうへにのせてゐる。頭部をうしなつてゐるのは惜しいが、悠然たるかまへである。岩田氏の寫眞 (Fig. 12) には高髻をいたゞき、鬚髯をたくはへ、第九洞のバラモンとおなじく²⁾、やせて骨ばつた姿に腰衣と肩布とをつけてゐる。

老人らしく、ひたひに刻線のいちじるしい皺をつくつてゐる。この對問像のむかつて右には、小形の比丘立像七體を、自由にかさねてゐるが、いづれも頭部をうしなつてゐる。この屋形龕の彫像は、全體として物語ふうな自由な構成である。東龕との照應からかんがへて、この場面を『維摩詰所説經』(大正大藏經, 第十四卷)の一節と推測する。同經「佛國品」第一 (p. 538) には、釋迦佛を中心としてシャリプトラ Śāriputra (舍利弗) と螺髻の梵王 Brahmā とのみじかい問答がある。シャリプトラのいはく「われこの土をみるに丘陵、坑坎、荆棘、砂礫、土石、諸山、穢惡充滿す」と。バラモンのいはく「なんじ、心に高下あり、佛慧によらざるがゆゑに、この土をみて不淨となすのみ、シャリプトラよ、菩薩は一切衆において、ことごとくみな平等にして深心清淨なり、佛の知慧によれば、すなはち、よくこの佛土の清淨なるをみん」と。こゝにおいて佛は足指をもつて地を按じたまふに、即時にして三千大千世界は若干百千の珍寶をもつて嚴飾すること、たとへば寶莊嚴佛の無量功德寶莊嚴土のごとくになった。つまり、この瘦身の寶髻をむすんだバラモン形は螺髻梵王、中央像は足指もつて地を按ずる佛であらう。

螺髻の梵王は、この會にあつまつた多數の梵天王 Brahmā の一人であらう。唐の玄奘の新譯『說無垢稱經』(大正大藏經, 第十四卷 p. 558) では「萬の梵あり、持髻梵王が上首となる」と、はっきり持髻梵王、つまり螺髻梵王の主導性をみとめてゐる。しかし、吳の支謙の異譯『維摩詰經』(同卷, p. 519) では「萬の婆羅門あり、みな編髮のごとし」といひ、梵天 Brahmā でなく、バラモン Brāhmaṇa たちである。シャリプトラとの問答に際しても、はっきり編髮梵志 Brahmācārin といつてゐる。いまサンスクリット本はつたはつてゐないのでわからないが、佛を讚し、佛説を敷演するのはバラモンよりも、梵天の方が、よりふさはしいとおもふ。とにかく一説にはバラモンとの傳承もあつたわけである。だから圖像の作者は梵天 Brahmā を意圖したかもしれぬが、ともかく、こゝではバラモン形でこれをあらはしたのである。羅什の『維摩詰所説經』では、あきらかに梵天 Brahmā であるが、それにしても梵天とバラモンとの親近性から、かういふすがたであらはされることもまた當然であらう。(龕高 1.75m)

¹⁾ 本書, 第五卷, p. 34.

²⁾ 本書, 第六卷, Pl. 46.

Pl. 16, 17 第一洞 東壁

雲岡石窟第一洞

上層、中層、下層の三段にわかれ、みな南壁の三段に相應する。しかし上層三角垂飾以上はほとんど剝落してわからず、たゞ下層のおくが、やゝよく保存されてゐて、南壁で全然わからなかつた腰壁のやうすを、ほど推察せしめるのはさいはひである。すなはち、そこには本生の浮彫帶と、供養者の列像とがあるのである。そのうち供養者の層はかなり土中にうまつてゐる。中層とのあひだには南壁と同様半パルメットの並列文帯がある。中層は四つの佛龕よりなるが、尖拱龕と楣拱龕とを交互に配してゐる。南から第一龕は坐佛、第二龕は二佛並坐、第三龕は交脚菩薩、第四龕は坐佛である。みな近世の泥佛か、骨ばかりの石佛である。第一、第二龕のしたには追刻の小佛龕が、かすかにそのかたちをとどめてゐる。(現在高 5.25m, 幅 9.45m)

Pl. 18 第一洞 東壁 第一龕上部

第一龕上部の楣拱額がみえる。七つの區劃に一體づゝの飛天があり、そのしたに帳幕が弧状にさがつてゐる。左右上隅には合掌の供養者がのぞき、第二龕とのあひだには浮彫塔形がある。ひどくこはれてゐるが、三本の剝柱と平頭 harmika とともいふべき基壇と最上層の尊像がみえる。中央が倚坐像であるらしいのはめづらしい。伏鉢の存在が明瞭でない。

上層蓮瓣文帯(Rub. IIA)の上の坐佛列像は保存がわるく佛頭は無残にも、うちかゝれてゐる。(坐佛高 0.55m)

Pl. 19 第一洞 東壁 第四龕

ほとんどとけてしまった坐佛龕である。尖拱龕であることが、おぼろげながらわかる。拱端獸形のしたに、これをうける天の立像があつたらしい。拱額のなかは禪定佛九乃至十一體である。かたはらの多層塔もほとんどきえてゐるが、五層塔であり、第一層が二佛並坐の龕であることが、ほど推定できる。したの腰壁とをわかつ半パルメット並列の唐草文帯(Rub. IIB)がよくのこつてゐる。(龕高 1.95m)

Pl. 20 第一洞 東壁下層 浮彫本生

こゝ第四龕のしただけ、からうじて浮彫帶がのこつてゐる。腰壁の基部は過半うづもれてゐるが、供養者の行列であることはあきらかである。その供養者は天人でも、僧侶でもなく、また胡人でも、女人でもないことがあきらかである。わづかにのこつてゐる冠と、その姿勢よりすれば、衣冠の北魏人にほかならぬことがわかる。ちやうど第十九洞西脇洞の臺座にみる供養者とおなじである。みな拱門の方に

むかつてならんでゐるらしい。

この最下層と半パルメット並列文帯にはさまれて本生 Jataka の浮彫帶がある。いま二つの場面だけがのこつてゐるが、圖版左から第一の場面は、騎馬の人物が宮門をあとにして山中にすゝんでゆくところである。うしろから従者が蓋をさしかけてゐる。しかも、どちらも圓光をおうてゐる。人物にくらべて宮門ははるかに小さい。これだけでは、この圖像の意味はわからないが、つぎの狩獵の光景と連絡すると、その意圖はあきらかになる。第二の場面は、左下から右上へと對角線的に山の起伏をもちあげた構圖である。右半の山中に、にげてゆく鹿がみえる。左半には馬上で弓をひいた貴人が先頭になり、騎馬の従者が二人ついてゐる。うしろからの侍者は馬上で蓋をさゝげもつ。なほ山中には鹿らしい獸形がみえる。そのかたはらに一人の人物がひざまづいてゐる。これにも圓光がある。貴人の弓はおのづとその獸と人物をねらつてゐるやうである。したがつて、自然とおもひうかぶのはシャマ本生 Śyāma Jataka である。それは孝子シャマが鹿皮をきて水邊に水をくまうとするのを、をりから狩獵にでたカアン Kāsi (迦尸) 國王ブラハダッタ Brahaddatta (梵摩達) にみあやまれ、弓で射られるといふはなしである。ひざまづいた人物の右肩にみえる直線は、つきたつた矢であらう。シャマ本生の浮彫は第九洞にもあるが、それとくらべると、その風俗はまったくちがふ。(第六卷, Pl. 19—26A, p. 61, 62) こゝでは、したの供養者列とおなじやうに、また敦煌第135洞前壁¹⁾の本生圖とおなじやうに、漢化した服装になつてゐる。また彫り方をみても第九第十洞のは輪廓をふかく直角に彫りこんで、ガンダラの浮彫にちかいが、こゝのは第六洞の畫像に似てあさく、しかもいく層もの面になつてゐる。おくの場面も弓矢こそみえぬが、やはり國王出獵の前段であらう。(浮彫帶高 0.70m)

¹⁾ P. Pelliot, *Touen-houang*, Paris 1921, Tome V, Pl. CCLXXX.

Pl. 21 第一洞 北壁 全景

北壁はさうたう風化がはなはだしい。他の諸壁とちがつて、中層下層とほして、大きな楣拱龕をたゞひとつつてゐる。上層はほとんど風化してゐるが坐佛の列像があつたらしい。たゞ中央部の楣拱の、たかくなつたあたりは坐佛をかくが、そのうへの樂天の列像は、はしからはしまでとほつてゐる。

楣拱龕は通例のごとく、したが三間にわかれてゐる。中央は交脚菩薩像、左右はともに半跏菩薩像である。基壇はうもれてゐるが、左右壁の供養者列像が、こゝにもついで

いるらしい。(現在高4.80m, 幅8.70m)

Pl. 22 第一洞 北壁 主尊 交脚菩薩像

胸に両手をあげた像で、表面は風化してゐるが、全體の形はほゞわかる。足もとの獅子も頭部にかけてゐるが、その力づよい前膊のやうすは充分にみとめられる。うすくほりだした脇侍が左右にたち、そのうへに飛天があつたらしい。光背の右半がよくのこつてゐる。それは第六洞などとおなじ火焰光背で、肩の三角區にも火焰がある。楣拱額のしたは、左右から相むかふ飛天が弧狀に彫られてゐる。それは第八洞北壁上龕(第五卷, Pl. 39)のやうに、弧狀にしぼつた幕のあひだに彫られてゐるのではないらしい。(像高3.10m)

Pl. 23A 第一洞 北壁 右廂 菩薩光背

B 第一洞 北壁 右廂 右脇 供養者像

C 第一洞 北壁 右廂 左脇 供養者像

A. 左廂半跏像の光背は風化して、まったく見えぬが、右廂半跏像の光背はわりによくのこつてゐる。たゞ龕内が完好な半ドウム状をなさぬので、光背のさきが急にをれてゐる。光背の外區は、あらい半パルメット並列文をあらはし、内區は蓮華である。いづれも彫りはあさい。(Rub. IG) 冠のむすびめが、大きくまるくあらはされ、三角形のきれが耳のうしろにさがつてゐるほか、ながい布片が一回轉しながら、左右に大きくひるがへつてゐる。これはその大きな冠とともに、ガンダアラ、アフガニスタンその他のイラン系人物像によくみるやり方である。(光背幅1.16m)

B. 半跏思惟像の右脇にたつた合掌の天人像である。彫りはあさいが、すうりとたつて脇侍のごとくである。天衣はかるくまひあがつてゐる。兩脚はつよく左右にひらいてゐる。この像のおくに、なほひざまづいた天人像が、よりあさい彫りであらはされてゐる。柔軟な身體とあふられた天衣とが、うつくしい諧調をしめしてゐる。(跪坐像高0.90m)

C. おなじく左わきの供養者たちである。立像の方は、ほとんど風化してゐる。ひざまづいた方は右手をさしだして、なにかをさしあげてゐるさまである。天衣のあふられて立ちあがつてゐることは、右わきの天人におなじである。(跪坐像高1.00m)

Pl. 24, 25 第一洞 西壁

南壁、東壁のごとく、西壁もまた三段制で、中層は東壁とおなじく四佛龕をならべてゐる。楣拱龕、尖拱龕を交互

におき、南より第一龕、第二龕は坐佛(Pl. 24)、第三龕は倚坐像、第四龕は交脚像(Pl. 25)であるらしい。下層は、まったく壊滅して、なにもものみえない。第三龕本尊は龕の中央になく、すこし左にかたよつてゐる。それはたてにとほる、大きな龜裂をさけたからとおもはれる。したがつて、この龜裂は造營當初からのものだといふことが知られる。(現在高5.30m, 幅9.30m)

Pl. 26 第一洞 西壁 第一龕

第一龕は楣拱額である。拱額のしたに弧狀にしぼつた張幕があり、これをうけた二本の八角柱があつて、三間にわかれてゐる。中央の坐像は頭部をうしなふが、上身は、この石窟としてわりによくのこつてゐる。その衣文は、だいたい、第五洞、第六洞ふうで厚紙をかさねたやうである。右廂には天人か菩薩かわからないが、中央にむかつてあゆみよるやうな脇侍があり、その左手には大きな水瓶をさげてゐる。おしいことには、いま頭部をうしなつてゐるが、岩田氏の寫眞(Fig. 13)には、まだよくのこつてゐて、高髻をいたゞいた細おもての顔がみられる。なで肩できゃしゃな身體つきをし、衣文も繊細であつて、まことに清楚である。背景に大きなあさい舉身光が線刻されてゐる。左廂は塔を彫つたのでせまくなつたためか脇侍がなく、ひざまづいた小さい天人を、しかも塔の方にむけて彫つてゐる。(龕高1.85m)

Pl. 27 第一洞 西壁 第二龕

第二龕は尖拱龕である。本尊は第一龕と同様の坐佛である。拱額には、小さい坐佛を中心に、ひざまづいた供養天人が左右からむきあつてゐる。拱端には獸形がある。獸は脚をはねあげて、つばり、頭をうしろにふりむけてゐる。不安定であるうへに、これをうける拱柱もない。たゞ脇侍をかねた小立像が、こゝにたいすんでゐる。龕の左右には、つぎの龕とのあひだに塔がある。した一層は風化してみえないが、もとは五層の塔であつたらしい。塔身には一佛乃至二佛を大きく彫り、各層の屋根は天蓋のごとくたゞの長方形で、それに三角の垂飾を彫るのみである。頂には四葉の半パルメットからなる承花^{ウケバナ}があり、まんなかに化生をのぞかせてゐる。この層柱は第七、第八洞(第五卷, Pl. 68, 69)にあり、第九、第十洞(第六卷, Pl. 8, 18)にもさかんにつかはれた。この洞では、北壁大龕の左右にもつかはれてゐるが、こゝでは一般に萎縮してゐる。この種層柱の最後の段階をしめすものであらう。それにしても、東壁の木造構架

雲岡石窟第一洞

式五層塔(Pl. 16, 17)に對し、西壁にこの重層塔柱をわざとつかってゐることは注意される。(龕高 1.90m)

Pl. 28 第一洞 西壁 第三龕上部

第三龕の楣拱額には第一龕楣拱額とおなじく一區一體づつの飛天をおさめてゐる。飛天は逆髪形の天と高髻の天とを交互においてゐるが、どちらも丸々とふとつた身體で、手足を大きくふりあげてゐる。こゝには上層の蓮瓣文帶と坐佛列と三角垂飾の幕の部分がよくみえる。(坐佛高 0.55m)

Pl. 29 第一洞 西壁 第四龕上部

第四龕の尖拱額は、第二龕のそれと同様に、坐佛を中央においたもので、左右から胡跪の供養天人がむかひあつてゐる。むかつて左端の獸形は、かなりよくのこつてゐて、その慄慄な相貌がうかがへる。上層の蓮瓣文帶と坐佛列像とがよくのこつてゐる。(坐佛高 0.58m)

Pl. 30A, B 第一洞 西壁 上層

蓮瓣文帶のうへの坐佛列像、そのうへの寶帳飾、そのうへの樂天列像。そのうへは天井になる。樂天列像はほとんど破損し、第三龕の小鼓をもつた樂天がやつとみとめられる程度である。わりによくのこつてゐたとおもはれる南端の坐佛(A)は、無殘にも頭部をかきとられ、かへつて北半の坐佛(B)に、いくらかむかしをしのばすものがある。(上層全高 1.90m)

Pl. 31 第一洞 塔柱 南面

洞内中央にある塔柱は二層である。うへに大きな須彌山 Sumeru をいたゞき、したには大きな基壇をまうけてゐる。基壇はほとんど風化しきつてゐるが、その方形の輪廓だけは、からうじて、みとめることができる。二層のうち、したは瓦葺を模した屋根、うへは三角垂飾の天蓋である。上層は楣拱額(Rub. IIID)で三間にわかれ、本尊は坐佛、下層は尖拱額で、おなじく本尊は坐佛である。めづらしいのは尖拱額のなかが二段の像列になつてゐることである。上段は供養者ばかり、下段は坐佛ばかり、つまり過去の七佛である。上下のまるい穴、四角の穴は修繕のためのものである。(現在高 5.60m)

Pl. 32 第一洞 塔柱 東面および北面

塔柱東面も上層楣拱額、下層尖拱額である。上層三間の楣拱額は交脚菩薩の三尊である。下層尖拱額は南面同様に

坐佛の列と供養者の列と二段になつてゐる。そして下層の軒に多臂神の束と獸形の三つ斗がみえる。(現在高 5.60m)

Pl. 33 第一洞 塔柱 北面および西面

北面はかくのごとく崩壊してゐる。西面上層は東面と同様の交脚菩薩像、下層の軒に獸形三つ斗がひとつのこつてゐる。上層天蓋のいちばんよくのこつてゐるのも、この面である。(現在高 5.60m)

Pl. 34 第一洞 塔柱 東面上層

天蓋の部分はすっかり破損してゐる。塔身の北端もすこしおちてゐる。しかし上層楣拱額から下層の軒まではのこつてゐる。楣拱額は、だいたい西面におなじであるが、三間の中央は交脚菩薩像とその脇侍である。脇侍のうへには合掌胡跪の天人があさくきさまれてゐる。本尊は右手をあげ、左手を膝においた形式だが、大きな光背をおひ、足下には足をさげた人物が上半身をあらはしてゐる。右廂には錫杖をもつた比丘像があり、左廂には香爐をさげた天人がゐる。楣拱額(Rub. IIIE)には各區に蓮華をあさく彫り、帳幕をたれ、額上の空白には坐佛を二體づゝ彫つてゐる。(上層塔身高 0.85m)

Pl. 35 第一洞 塔柱 西面上層

まったく東面(Pl. 34)におなじであるが、こゝの交脚像には足をうける人物像がゐない。首はおしくも、うちかゝれてゐる。楣拱額の框内には蓮華文のほか、三つ葉を四方に射出したものがみられる。(Rub. IIIC) この面で注意されるのは天蓋である。塔身に比してかなり突出してゐる。上半部はなげしのやうになつてゐて、こまかく方形にしきり、各區は蓮華文と三つ葉の四川文でうめてゐる。下半部は三角形の垂飾である。それにひだをとつた垂幕がさがつてゐる。ちやうど、わが法隆寺のいはゆる橋夫人の厨子にみられる形である。さらにこの天蓋うらの天井には大きな蓮瓣文を彫つて、それがこの側では、幕のこはれたところから、ほんのすこしばかり顔をだしてゐる。(Rub. IIF) しかし、より充分には Pl. 37A にみられる。(天蓋高 0.60m)

Pl. 36 第一洞 塔柱 東面下層軒

これには第一層の本瓦葺屋根、それからふとい方形のたるきがみられる。それよりも多臂神をかたどつた束と獸形の三つ斗とを注意されたい。四臂の神像である。下身がこはれてゐるが、場所からいって坐像であつたらう。小さい光

背があり、天衣を大きくひるがへしてゐる。右第一手はなにか雷のやうなものをもち、左第一手は膝におき、左右の第二手をもって軒桁をさへてゐる。さういふ點で、まったく東の用をはたしてゐるわけである。たかい髻をつけ、なまめへをみる顔つきが、ひきしまつてゐる。三つ斗は左右の拱が、それぞれ獸の側面形になつてゐる。前脚をのばした上半身である。毛なみは線彫りで、胸毛のまいた表現法はおもしろい。ちやうど、ペルシア式の柱頭をみる感がある。まんなかの斗は方形であり、そのしたに獅子頭がある。正面形は大きく口をひらき、大きな齒なみがそろつてゐる。下顎は、はじめから、あらはされなかつたのであらう。眉間の木葉形の毛なみは雲岡の獅子の特色である。(Rub. II I) なほ、この圖版には東面下層龕の上部空白にある逆髮形の天人がうかゞはれる¹。(三つ斗高 0.47m)

¹ 水野清一「逆髮形について—雲岡圖像學」(佛教藝術, 第12號)大阪 1951, p. 78—81.

Pl. 37A 第一洞 塔柱 西面上層 天蓋裏面

B 第一洞 塔柱 西面 下層 三つ斗

A. 天蓋うらにある蓮瓣帯である。やゝあさい彫りであるが、やはりのびのびと彫つてある。(Rub. II F) ひだのある張幕の下面がみえてゐるが、そのをりかさなつた布のぐあひを線彫りでしめしてゐる。この點、第六洞の塔柱天蓋と同様である。(蓮瓣帯幅 0.32m)

B. これは西面の三つ斗である。まんなかの獅子は上顎の齒なみからしたをうしなふが、左右の獸形は、東面よりもよく保存されてゐる。(Rub. II II) むかつて右方に多臂神像の痕迹がみえる。(三つ斗高 0.47m)

Pl. 38 第一洞 塔柱 最上部

さきにのべた天蓋からうへは、いったんほそくなって、さ

らに天井につゞくところがひろがつてゐる。さうして、そのあたり一面にみえるのは、大きな龍のわだかまりである。こゝからはむかつて右方に後脚をふんばつたのがみえ、右端にからんだ龍身がみえる。そのしたには龍にとりまかれた須彌山 Sumeru の、「たこ」の頭のやうな峯がのぞいてゐる。神聖な塔と神靈な須彌山との結合は、おそらく中國人の考案であらう。龍が盤踞して塔上周邊の天井をうめ、そのため天井はせまくなつてゐるが、のこつた壁ぎには、一列にならぶ大きな飛天がある。いまは、おほかた剝落してしまつてゐるが、こゝには上半身ののこつた一體と、下半身ののこつた一體とがみえる。まるい圓光をつけ、線彫りであらした大きな天衣をひるがへしてゐる。(天蓋高 0.60m)

Pl. 39A 第一洞 塔柱 南面 最上部

B 第一洞 天井 南部

A. これは塔柱南面の須彌山の部分だけをあらはしたのである。大きく龍がからみあつてわだかまり、須彌山の全面をおほふてゐる。左右の隅からまんなかののびでたところに、龍頭がみとめられる。ながい角、ながい耳が顯著である。まんなかのしたは龍尾である。そのうへのまるくもりあがつた輪は雲氣のやうなものらしい。そのふちにそうて小さい隆起がつらなつてゐる。それから、そのうへに一列、たこの頭がならんでゐるのは須彌山の山峰であらう。

B. 須彌山の南がはは、東西側とおなじやうに飛天の一列がある。そしてその南には三つの大蓮華文を彫つてゐる。花瓣を二重にかさね、まんなかには八つ、九つの子房を彫つてゐる。飛天よりもはるかにあさい彫りである。つまり須彌山をめぐる大きな飛天を一列にめぐらし、そのあまつた南方の餘白に、蓮華文をならべたものとみえる。(中央蓮華徑 1.40m)

第 二 洞

Pl. 40 第二洞 外景

前室はないけれども、岩壁をそろへるために山をきりこんでゐるから、西端に袖ができる。そこに東面の佛龕、南面の佛龕をほつてゐること圖のごとくである。東面の龕は坐佛、南面の龕は二佛並坐である。第二洞の外壁になると、その東半は崩壊してゐるし、西半は剝落したうへに後世の遊記題刻がある。わづかに當初のおもかげのうかゞへるのは

西半の下部だけである。蓮瓣文帯のしたに逆髮形の天神の供養者が彫つてある。ならんでゐるので、たんに供養者と判断したが、そのからだをくねらせて、力んだ姿勢は同時に護門の衛士 Dvārapāla でもあつたらう。力をいれてはゐるが、實に悠然たるかまへである。なほ蓮瓣文帯のうへには、胡跪の供養者がならんでゐたものとおもはれる。これは外壁構造のわかる、ほとんど唯一の例であつて貴重である

雲岡石窟第二洞

Pl. 41 第二洞 内部

洞内中央に塔柱をもった石窟で、第一洞とよく似てゐる。西北隅に泉があつて水がたまってゐる。そのためもあつて北壁、西壁はひどくいたんでゐる。入口はすっかり崩壊してゐるが、拱門の左端がわづかにのこつてゐる。それはやはり交龍の浮彫であつたとおもふが、第一洞拱門のそれとは頭の位置が反対になつてゐたらしい。明窓の部分はすっかり崩壊してわからない。

Pl. 42 第二洞 南壁 西半

壁面の水平分割は第一洞にまったくおなじである。下層の腰壁にはなにものもこつてゐない。中層は佛龕があり、屋形龕である。上層は蓮瓣文帯(Rub. II C)のうへに坐佛の列像、天蓋やうの三角垂飾、そしてそのうへには樂天の列龕がある。第一洞の坐佛とくらべると、この方がやゝ洞がながくつくられてゐる。屋形龕は菩薩やうの像が中心にあり、なゝめよこをむいてゐる。右手をあげたやうすをみると半跏像であつたかとおもへる。それにしても、なに像か不明である。龕底には合掌の像がいっぱい彫られてゐた。東がは傍柱のそとにも一體の供養天人がたつてゐる。軒端には帳幕を弧状にくゞり、屋上には鴟尾と三角飾のほかには鳥が彫つてゐる。第一洞の屋形龕には鳥がゐない。

入口拱額のむかつて右端がわづかにのこつてゐる。拱額のなかに坐佛をならべ、そのうへには合掌供養者を彫つたらしい。第一洞にくらべると、すべての像がきゃしゃに見える。(現在高5.70m)

Pl. 43-45 第二洞 東壁

上下の層序は南壁におなじである。中層には四佛龕があり、楣拱龕と尖拱龕とを交互におく。そのあひだをわかつものは五層の塔形である。北壁、西壁にくらべると、いくらか保存はよいが、下層はほとんど潰滅し、おくのはしにわづかに浮彫畫像帯の一部がのこつてゐるのみである。こゝでは最下の供養者列像はまったくみとめられない。

第一龕は佛坐像、第二龕は佛倚坐像(Pl. 44)、第三龕は交脚像、第四龕は佛坐像である。(Pl. 45) みな第六洞式の折り目のたつた服制で、第一龕のみがやゝよくのこつてゐる。通肩のひだが垂直にさがり、胸にひものむすびめがみえる。なで肩につくられたこの像は、第一洞よりはきゃしゃである。この龕のわきには脇侍として天蓋のしたに供養天人がたつてゐる。ほっそりした、きゃしゃな天人である。本尊とこの脇侍の頭部は、岩田氏の寫眞(Fig. 18)にみとめ

られる。龕の右わきは五層塔になるが、左わきには塔がない。そのかはりか、こゝにはたちあがつた天人像がある。腰布だけの裸形で、片足をあげ、片手をたかくさしあげてゐる。やはりものをさゝげる侏儒像 Atlantes からでたのであらう。

第四龕の尖拱額(Pl. 45)は、第二龕同様に坐佛を中心とし、跪坐供養者を左右に配してゐる。このあたりもひどくいたんでゐるが、下層の浮彫がわづかにのこつてゐる。むかつて左端の合掌の立像、なゝめにみえる合掌の跪坐像は、みな北壁左廂のうちの供養者たちである。(現在高5.30m、幅9.80m)

Pl. 46 第二洞 東壁 第二龕

本尊は通肩である。折り目だつた衣が兩肩をおほひ、衣のはしが幅のある布片となつてU字形に胸から左肩にかゝつてゐる。第五洞、第六洞に共通する特色である。缺けた頭部は Fig. 17 をみよ。堂々として端正な面相をしてゐたことがわかる。倚坐像で、右手はうへにあげ、左手は膝においてゐる。龕傍には脇侍やうの比丘の小像があつたらしい。拱額は保存よく、禪定の佛を中心に、左右にひさまづいた合掌、讚嘆、恭敬する供養者をおく。拱端の龍は頭をふりかへり、前脚を上下にふんばつてゐる。拱額のうへの空白には頭髪をたてた天神の列像がある。やはり天の小神であらう。こゝの作ゆきはすこしきこちない。

兩わきの塔は、こゝでは比較的よくのこつてゐる。五層の木造瓦葺の塔形である。塔身には帳幕がしぼつてゐる。たゞ右わきの塔の第三層は圓拱龕になつてゐる。いづれも三層までは佛の並坐像、第四層は三尊形式の佛倚坐像、第五層は三尊形式の菩薩交脚像である。それから五成の基壇があり、承花があり、伏鉢があり、相輪の刹柱がある。しかも、めづらしいのは、この刹柱には二旒の幡があつて、へんぼんと、ひるがへつてゐることである。『法華經』(大正大藏經、第九卷、p. 9)卷一、序品には「一々の塔廟に各千の幢幡あり、珠をもつて交露せる幔あつて、寶鈴和鳴せり」といひ、卷四、見寶塔品(p. 32)には「佛のみまへに七寶の塔あり、……五千の欄楯あつて龕室千萬なり、無數の幢幡もて嚴飾となし、寶の瓔珞をたれ、寶鈴萬億そのうへにかかれり」といふ。つまり多數の幢幡のかざりがあることをいふが、雲岡の塔は、いつも長幡二旒である。法隆寺の法會につかふ五重塔の長幡とそのおもむきは一である。(龕高2.05m)

Pl. 47 第二洞 東壁 上層中部

こゝは比較的によくのこつてゐる方である。しかしそれでもたてに大きな龜裂があり、また表面に剝落がある。そのうへ坐佛列像の頭部は、無残にもみなうちかゝれてゐる。むかつて右端の像のわづかにのこつた口もとをみよ。そのありし日の毅然たる風貌がうかゞはれる。樂天籠は南端よりいふと(1)小鼓、(2)堅笛、(3)舞踊、(4)横笛、(5)腰鼓、(6)銅鈸、(7)琵琶、(8)銅鈸、(9)堅笛、(10)排管(簫)、(11)合掌といふふうにつぎ、こゝには(5)腰鼓以下(11)合掌までがみえてゐる。(巻頭圖版)(上層全高1.90m,坐佛高0.65m)

Pl. 48A 第二洞 東壁 上層南部

B 第二洞 東壁 腰壁 浮彫佛傳

A. 前圖版(Pl. 47)につゞく南部である。樂天籠の(1)小鼓、(2)堅笛、(3)舞踊、(4)横笛等がみえる。前壁の崩壊した部分も注意されたい。(上層全高1.90m)

B. 半パルメット並列唐草文帯のしたにみる浮彫の佛傳である。太鼓のやうなものが三つならび、三人の射手が矢をつがへてゐる。左足をあげた姿勢である。かうした競射の光景は、いふまでもなく佛傳の一節である。シッダアルタSid-dhārtha 太子の諸藝にすぐれてゐることをしめす一段である。呉の支謙譯『太子瑞應本起經』(大正大藏經,第三卷, p. 474) 卷上には、デヴァダッタ Devadatta (調達)、ナンダ Nanda (難陀)と鐵戟を射ることをきそひ、つねに二人をしのごさまをのぶ。西晉の竺法護譯『普曜經』(大正大藏經,第三卷, p. 501) 試藝品第十では、やはり三人の競射になつてゐるが、かなり誇大されてゐる。劉宋求那跋陀羅譯『過去現在因果經』(大正大藏經,第三卷, p. 618)では師のまへで、たゞひとりためされるので、この圖とはあはしない。(像高約0.65m)

Pl. 49A,B 第二洞 北壁

ひどく磨滅してゐるので、どういふ佛龕があつたかわかりにくい。(B)でわづかにうかゞへる飛天からすると、楣拱龕で三間になつてゐたことが察せられる。中央は第一洞の交脚菩薩像に對し、すはつた佛(A)である。左右の廂は第一洞同様に半跏の思惟菩薩であつたとおもはれる。それはいまわづかにのこつてゐる石の磨滅のぐあひ(B)から察せられるだけである。この二つの洞の関係はやはり第七洞、第八洞とおなじく佛と菩薩とを交互にその本尊としてゐるのである。(本尊頭頂高3.30m)

Pl. 50A 第二洞 北壁 主尊佛上身

B 第二洞 北壁 左廂 供養者像

A. 顔面はひどくいたんでゐる。けれども、波状にとゞのへた頭髪がみえる。あさい線刻である。耳の彫りもあさい。光背も第六洞の光背によく似てゐる。あさい彫りで、頭のまはりに蓮華文があり、つぎは火焰である。それから舉身光のふちも火焰である。さうして、そのうちに飛天の一帶があり、肩の三角にのこる部分には、また火焰をいれてゐる。(Rub. I D)(佛頭高1.20m)

B. 北壁の左廂左わきである。龕壁がまはつて西面してゐるあたりに、この像がある。(Pl. 45, 61B 参照) 合掌して、すこし上身を内がはにまはし、天衣をたかくはねて、弧状をふがいてゐる。この像のすぐ右わきに合掌胡跪の天人がある。たかい髻をたて、すんなりした姿體をしめしてゐる。(跪坐像高0.75m)

Pl. 51A 第二洞 北壁 左廂 菩薩光背

B 第二洞 北壁 中央佛龕 供養者像

A. 北壁左廂である。光背の一部がよくのこつてゐる。それをみると第一洞兩廂とまつたくおなじである。舉身光は外縁が火焰、そのうちがはと頭光のふちは半パルメット並列唐草文である。寶冠のひもが一回轉して大きくひるがへり、左右に磨滅した飛天がみられる。(Rub. I E)(龕幅1.65m)

B. これは中央の龕内、右がは、光背のそとにならぶ供養者たちである。數段にわかれてゐるが、こゝには三人の一段がみえる。天人たちは合掌し、あるひは片手をあげ、ひざまづいてゐる。髻はたてに三つの山形になつてゐる。(像高約0.35m)

Pl. 52A,B 第二洞 西壁

西壁もひどく風化してゐる。東壁に照應して四龕にわかれ、尖拱龕と楣拱龕とを交互に配す。南の第一龕は二佛並坐(Fig. 16)、第二龕は交脚菩薩、第三龕は坐佛、第四龕は交脚菩薩像である。そしてこれをわかつのに、やはり塔形をおいてゐる。塔形は、もちろん多層塔とおもふが、瓦葺屋根ではない。いまわづかに最上層のみがのこつてゐるが、それを見ると承花、伏鉢、刹柱があり、屋根も軒もなく、そのしたちかに塔身がある。この種の塔は、單層のものを第十四洞西壁にみるが、多層のものは例がない。(現在高5.60m,幅10.10m)

Pl. 53 第二洞 塔柱 南面

南面のほか、すこし西面がみえてゐる。第一洞とちがひ

雲岡石窟第二洞

三層塔である。基壇はみえないが、小さくとも、なにかあったことであらう。第一洞とおなじやうに天蓋があり、そのうへには盤龍と山がある。屋根と軒は木造をまね、三つ斗サスツカと叉手束があらはされてゐる。第二層、第三層はとくに軒がでい、四隅には大面とりの方柱がたつてゐる。その方柱の下部に、もとは木製の欄杆でもはめてあったやうである。また斗拱部の下面は、あさい蓮瓣帯を彫つてゐる。第一層は龕上に樂天の列龕があつて、うへの二層とはちがつてゐる。南面第一層の龕は二佛並坐である。あるひは多寶塔といふべきであらうか。南面第二層は、まんなかが坐佛の尖拱龕、左右は倚坐佛の楣拱龕、第三層は、まんなかが交脚菩薩の楣拱龕、左右は坐佛の尖拱龕である。(現在高5.40m)

Pl. 54 第二洞 塔柱 東面および北面

むかつて右がはに、北面もすこしみえてゐる。東面、第一層は龕形不明、三龕にそれぞれ坐佛が彫つてゐる。第二層はまんなかが坐佛の尖拱龕、左右が坐佛の楣拱龕、第三層はまんなかが坐佛の楣拱龕、左右が坐佛の尖拱龕である。(東面現在高5.30m)

Pl. 55, 56 第二洞 塔柱 北面および西面

北面(Pl. 55)は天蓋がまったくかけおちてゐる。第一層は三間になつて、まんなかは坐佛の尖拱龕らしいが、左右はたゞ天蓋をいたゞいてゐる佛の立像である。第二層はまったく風化してゐるが、中央は倚坐佛であつたらしくみえる。第三層は中央が交脚菩薩の楣拱龕、左右が坐佛の尖拱龕である。

Pl. 56 のむかつて右がはには塔柱西面がみえる。西面の第一層はまんなかが坐佛、左右が立像、龕形はまったくわからない。こゝでは第二層、第三層の西北隅が、扇たるきになつてゐることがよくわかる。(北面現在高5.10m)

Pl. 57 第二洞 塔柱 東南隅

東南隅をみあげたところ。軒うらの扇たるきになつてゐるのがよくみえる。斗拱部下面の蓮瓣帯をみよ。(Rub. II E) 天蓋は框ぐみのなかに方形の蓮華がならび、それに三角の垂飾と、ひだをとつた繒帛がたれてゐる。(Rub. II K) (第三層塔身高0.60m)

Pl. 58 第二洞 塔柱 東面 第三層

本瓦葺の屋根は、丸瓦と平瓦のはしを忠實にうつしてゐ

る。第三層軸部は三間にわかれ、楣拱龕と尖拱龕をおさめてゐるが、みな偏袒右肩の坐佛である。中間の柱は合掌の比丘像、それから合掌の天人像を彫つてゐる。その小像は第六洞の諸像をおもはすが、佛像は第六洞のやうに折り目だつたひだでなく、わきしたもふかくはいつてゐて、からだのまるみをよくあらはしてゐる。その點が周壁諸尊とのちがひである。軒がでい、隅にたつ大面とりの方柱は、したになるほどふとい。うへには肌板があり、斗があり、桁をうけてゐる。柱の下部内側には欄杆をさしこんだらしく、基部に方形の穴がある。(塔身高0.60m)

Pl. 59 第二洞 塔柱 北面 第三層

左右の坐佛、まんなかの交脚菩薩像、みな顔がとけてゐる。交脚菩薩は左右に獅子をしたがへ、兩手は胸にあげてゐる。まるい頭光、その左右に天衣が大きくひるがへり、腕にかゝつてひるがへつてゐる。そのさまが風化しながらも、實によくとゞのつてゐる。それに身體つきもどつしりしてゐる。左右わきの合掌佛像も、小さいながらにまるまるとした身體である。龕のあひだの柱には、合掌天人のあさい浮彫像がある。尊像配置は南面第三層におなじである。(塔身高0.65m)

Pl. 60 第二洞 塔柱 西面 第二層、第三層

東面第三層におなじである。みな坐佛で、中央が三尊の楣拱龕、左右が一尊の尖拱龕である。こゝには西面第二層もみえてゐる。(Rub. II G) 東面第二層とはちがひ、まんなかが交脚菩薩の三尊龕である。それに左も右も半跏の思惟像らしい。それに左わきでは、馬がひざまづき太子の足をなめてゐることがわかる。右わきもおなじやうな馬があつたらしく、四本の脚がみとめられる。しかし、この馬はどうもひざまづいてはゐないらしい。とにかく、これはシッダアルタ Siddhārtha 太子が白馬カンタカ Kanthaka とわかれるところをあらわしたものである。曇無讖の『佛所行讚』Buddhacarita(大正大藏經、第四卷、p. 12)卷二には、白馬は「太子の眞實の言をきいて、膝を屈し足を舐め、長息して涙流連した」といつてゐる。(第三層塔身高0.70m)

Pl. 61A 第二洞 塔柱 西南隅 第三層

B 第二洞 塔柱 西面 第二層

A. 西南隅をやゝみあげたところ。隅の大面とりの方柱と大斗が隅の三つ斗をうけてゐる。そのうへに軒うらがみえてゐるが、扇たるきである。第二層の隅も扇たるきであ

る。軒ぐみの下面に蓮瓣かざりがみえてゐる。天蓋の下面は繒帛のひだのみで、あとはたゞあらい石の面がみとめられる。(第三層塔身高0.70m)

B. 西面第二層は交脚菩薩像を中心にし、左右は半跏思惟の太子像であるが、どちらも足もとに馬を彫って、まったくシムメトリイである。これはひじょうにめづらしいことである。交脚菩薩に半跏太子像を配することは、しばしばあり、ちかいところでは、第一洞北壁もそれであるが(Pl. 21)、白馬との別離をあらはすことは、第六洞のほかに例がない。この圖版のむかつて左はしには、北壁左廂の左脇侍がよくみえてゐる。(第二層塔身高0.75m)

Pl. 62A 第二洞 塔柱 東面 第三層 左龕

B 第二洞 塔柱 西面 第二層 左龕

A. 偏袒右肩の坐佛である。右手は胸に、左手は膝において衣端をもつてゐる。頭部はこはれてゐるが、そのとほった鼻、ひきしまった口は、まだみとめられる。左右に小さい脇侍がある。うへの尖拱額には五體の坐佛があり、その上隅には二體の供養者がある。さらにうへをみれば、のきうらの蓮瓣帯がみえ、したをみるとあらい彫りの床がみえる。つまり、したからみると、こゝはみえないので、あら彫りのまゝのこしたのであらう。(龕高0.40m)

B. 西面第二層の左龕である。右龕同様に楣拱龕で帳幕をかいてゐる。半跏思惟像はからうじてみとめられる。右わきにひさまづいて首をのばしてゐる馬がある。これはいふまでもなく太子が山中にいたり、いよいよ白馬カンタカ Kanthaka (健陟)とわかれるところである。カンタカはわかれをおしみ、太子の足をなめたといはれてゐる。足を折り頭をのばしてゐる。右隅にみえるのは従者チャングカ Chandaka (車匿)であり、左手にみえるのは單なる合掌供養者であらう。さきの右龕太子像(Pl. 60)の馬はひさまづいてはゐないやうである。(龕高0.44m)

Pl. 63 第二洞 天井 南部

これは天井の南部であるが、こゝには第一洞とおなじやうに大きな蓮華が三つならんでゐる。あさい彫りである。蓮瓣は二重になつてゐて、大きな子房があり、蓮實の數も多い。(Rub. IIIA, B) いま剝落はなはだしく、白くみえるところは緑青、黒くみえるところは朱がぬつてゐる。むかつて左上にみえる天人は、第一洞同様に須彌山をとりまく飛天

の一例である。(中央蓮華徑1.60m)

Pl. 64 第二洞 天井 東南部

前圖版(Pl. 63)のむかつて左上にみえた飛天である。剝落はなはだしく、彫りはあさい。両手をのばし、兩足をはねて、力づよくとんでゐる。胸はつよくふくれてゐる。天衣はこれにかゝり、また手のまはりにも、ひるがへつてゐる。下邊にみえるのは東壁の樂天列龕である。南から小鼓、堅笛、琵琶、銅鈸?、堅笛と推定される。(飛天像高0.80m)

Pl. 65A 第二B洞(碧霞洞)外景

B 第二A洞 外景

A. 第二洞と第三洞との中間に碧霞洞 Pi-hsia-tung とよぶ石窟がある。われわれはこれを第二B洞と名づけた。山の斜面をきりこんで、垂直の壁面をつくり、こゝに明窓と拱門とが上下に口をひらいてゐる。また左右にそれぞれ上下二つづゝの窓をひらいてゐる。いま入口のうへに「碧霞洞」の文字が彫つてゐる。その左右に小さい孔があるのは、なにかの造構のあとである。(外壁幅7.30m)

B. 第二洞と第三洞とのあひだにある未完成の無名洞でこれを第二A洞と名づけた。寫眞には明窓の一部がみえてゐるが、さきの碧霞洞とよく似てゐるから、やはり北魏の時代に着工したものとおもはれる。(外壁幅6.90m)

Pl. 66A, B 第二B洞 内部

ひろさ7.70m ばかり、奥ゆき3.30m あまりの矩形の石窟である。床はすこしうまつてゐるのであらう。壁面は荒けづりのまゝだから、未完成窟のやうにおもふが、前壁、後壁にのこる同高の方形の穴をみると、こゝにねだをわたし、階上と階下とをわかつたやうである。さうすれば一種の住房である。しかし、それも、むしろ後世の利用かも知れない。前壁がほとんど垂直にたつて、後壁がつよくまへのめつてゐる點など、北魏窟らしい特徴であるし、壁面にのこるあらあらしい鑿痕にも、北魏のいぶきを感じられる。

Pl. 67A, B 第二B洞 天井

ひらたい天井で、これを格子状にしきり、格天井にしてゐる。ほとんど風化してゐるわけだが、そのなかに蓮華、飛天などのあつたことが、かすかにわかり、その様式によつて、やはり北魏窟だと推定するのである。

第三洞

Pl. 68 第三洞, 第四洞 外景

むかつて左手が東方群と中央群とをわかつ小さい谷である。やゝまんなかに口をひらいてゐるのが、第三洞の門口である。しかし、實をいふと、これは西の洞口であり、前室への洞口である。いまはすっかり破損してゐるけれども、これに應ずる東の洞口もあつたらしい。これらの洞口をはいると、主室にはいる入口があり、そのうへに明窓がひらかれてゐる。主室への入口は、西のひとつしかできてゐないが、明窓は一雙ある。明窓の左右、テラスのうへに三層塔をきりだし、その中間にのこした岩塊に、小さい石窟を鑿りぬいてゐる。いま、そのまへに、石づみがあり、南がはに二つのアチ窓と、西がはに一つの拱門がみえてゐる。これは、もとより近時の追加である。明窓より一段たかいところの岩壁に、長方形の梁穴がならんでゐる。總數十二ある。これは第五洞、第六洞の外壁にもあるもので、こゝに大建築をつくったときの梁穴とおもへる。この穴はなかで折れて垂直になり、丘のうへまでつきぬけてゐる。この梁穴のうへに、一列の小さい穴がならんでゐる。(Fig. 19 a, b)

むかつて左端の岩塊は第四洞である。ほとんどうまつてしまつたやうな入口がそれであり、その左右に明窓がある。東の明窓はつみ石でうめられてゐる。これについて大きく口をひらいてゐるのが、第四A洞とよんでゐる小窟である。第三洞から第四洞のまへ、一面にある石づみの壁は、近世住房につかつたなごりである。山下の舊道は、そのまへをとほつて東西にはしてゐる。(外壁高約 24.00m)

Pl. 69A 第三洞 外壁 西部

B 第三洞 外壁 東部

A. 前室にはいる西の門口である。この西にまた明窓があつたらしい。この前室のうへは、岩が段になってゐて、そのうへに一基の層塔をほりだしてゐる。うへの方に大きな梁の穴が三つみえる。小さい穴はうへに一列みえるが、前室の外壁にもひくいところに一列ある。圖版左端前方にのこる岩塊には、第四洞がほりこまれてゐるのである。(拱門幅約 2.70m)

B. さきの圖版に對應する東部である。前室の門口はのこつてゐるが、前室の天井が崩壊したため、みるかげもないすがたである。前室のうへの層塔がみえ、方形の穴とま

るい小さい穴の列とがみえてゐる。

Pl. 70 第三洞 外壁 西塔

西塔を東北隅よりのぞんだところである。下部はうもれてゐるけれども、木造構築をまねた三層塔である。屋根はこはれてゐるが、三つ斗と叉首東の軒ぐみはよくわかる。第三層は各面を三間にわけ、それぞれ佛龕をおさめたらしく、東面中央には交脚菩薩の楣拱龕、左右には坐佛の尖拱龕がある。東面第二層はまんなかに、二佛並坐の尖拱龕をおいたゞけで、左右は龕なく浮彫像であつたらしい。第一層はうもれてゐてわからない。彫像のやうすは第一洞、第二洞の塔柱に似てゐるといつてよからう。露盤や刹柱はわからないが、石でなかつたこともかんがへられる。(方約 3.00m)

Pl. 71 第三洞 外壁 東塔

西南隅よりみた東塔である。これも西塔とおなじく木造構築をまねた三層塔である。佛龕のやうすも西塔に應ずるやうである。しかし、この方が風化がひどい。露盤からうへはわからないが、わりにづんぐりとした塔であつた。基壇のぐあひも、よくわからぬが、あまりたかくはなかつたらしい。

圖版のむかつて左上の隅に、梁穴のこはれたものがみえる。そのなかのくろくみえるところが、うへにむかつてあいた垂直の穴である。(方約 3.20m)

Pl. 72 第三洞 門口

正確にいふと西の門口である。しかし、いまはこゝだけしか出入できない。ゆるい拱門になってゐるが彫刻などのあつたやうすはない。これをはいと、よこながい前室になってゐる。うへにみえるのは西の明窓、その光のしたに、第三洞主室の本尊たる、うつくしい三尊佛が配置されてゐる。こゝにも梁の穴、柱の穴が水平にならんでみえるが、そのうへが水平に、すこしくぼんでゐるやうである。こゝに佛殿の棟がとほつてゐたわけであらうか。(拱門幅約 2.70m)

Pl. 73 第三洞 主室全景 (東方より)

むかつて左の明窓に對して主室三尊の大佛龕がある。ほかには全然彫刻がない。いたるところに未完成で、凹凸の

ある不規則な壁が、風蝕に抗しながらたつてゐる。洞外の左右塔を脳裡におけば、その外景のながさに應じた長大な部屋であることがわかる。しかし、その中心に方柱が、きりこされてゐるため、室内は、こゝにみるごとく廊下のやうなせまい空間になるのである。三尊龕のあるのは未完成方柱南面の西端にあたる。だからこのせまい部屋は、こゝから直角に北にをれ、また東端からも北に部屋がのびてゐる。つまり、こゝにはコの字形の部屋ができるわけである。手まへのくろい土壁は近世の施設である。(室高約 13.00m)

Pl. 74 第三洞 主室 全景 (西方より)

これには方柱南面の全部がうつてゐる。その凹凸があり、あれは壁面を注意されたい。はるかむかふの明りは東の窓からである。そのしたに拱門はない。方柱南面の東端から、また部屋が北にのびて、こゝに、いはば東房をつくる。三尊龕のまはりには、なんの装飾もない。三尊の足もとは、すこしうまつてゐる。(本尊高約 9.00m)

Pl. 75 第三洞 主室 三尊大龕

あさく鑿りこんだ龕形に、一光三尊の大三尊佛を彫つてゐる。すこしとがったアアチ形のなかは、大きな舉光身がいっぱいになってゐる。その兩わきに寶珠形の光背を背おつた、たけのひくい菩薩の立像がたつてゐる。本尊の倚坐佛はゆたかな、はちきれさうな肉體をしてゐる。顔のわりに、すこし胸以下の方が小さいやうである。

Pl. 76, 77 第三洞 主室 本尊と左右脇侍

この二枚の圖版をあわせると、三尊像の全貌がえられる。本尊の胸、足もとは、かなり風化してゐる。小さいまるい穴は、修理にあたって棒杵をさしたあとである。たくましい兩肩、そこから兩腕が左右にさがる。右手をあげ、左手を膝において掌をみせてゐる。左手のかたちはめづらしい異例である。右脇侍は寶冠のうへに寶瓶をいたゞき、左脇侍は獅子をのせてゐる。これもめづらしい。もし左脇侍が化佛をいたゞいてゐるとすれば、觀音菩薩 Avalokiteśvara になり、寶瓶の右脇侍が大勢至菩薩 Mahāsthāmaprāpta といふことになり、『觀無量壽經』(大正大藏經、第十二卷、p. 344) にいふごとく、本尊はまさしく阿彌陀佛 Amitābha Buddha のはずである。さうすれば本尊の手も、右は施無畏の印 abhaya mudrā であり、左は興願の印 vara mudrā の變形であるとおもはれる。けれども、たゞ左脇侍の寶冠に型のごとく化佛をのせないことが、この推定をちゆうちよさせ

る。

本尊の衣は通肩で、きはめてうすい。堂々たる巨軀をおほうて、胸に、膝にゆるやかな弧状のひだをゑがく。そのひだのやり方は、雲岡のどのひだともちがふ。その衣のぬれたやうな柔かさが、豪快な身體にやさしい感觸をおこさせてゐる。右手の袖口の處理にみられるやうに、一應寫實的ではあるが、作者は形式的なものに、はしらうとしてゐる。手もひじやうに特色がある。みじかい五指はづんぐりとまるく、大きな掌は肉があつて、とくに右手と手首との造形上の關係は粗朴である。雲岡一般の佛手の優美さとくらぶべくもない。

光背はかたちの大きなわりに、ふちの光焰帯がせまい。また火焰もまるい彎曲で緊張にとほしく、またその面がひろいので、もえあがる力はよわい。頭のまはりの圓光も、ふちに光焰文帯がある。光焰のつきには、どちらも飛天の一帯がある。これもわりにせまく、飛天も小さい。そのつぎの内帯は坐佛の列である。これよりうちについてはよくわからないが、肩にそうて火焰があり、頭にそうてごくほそい蓮華文があつたらしい。(右脇侍光背高約 2.60m)

Pl. 78 第三洞 主室 本尊上身

胸はかなり風化してゐるが、顔はひじやうによくのこつてゐる。しかし、よくみると表面が硬化してゐるだけで、一皮したは、すぐ粗糲になってゐるらしい。胸にも顔にも木釘をうった生々しい修理のあとがみえる。ことに顔面の釘は、うすい布片または紙をおさへたらしく、木の上に鐵釘をうって、それをよこにをりまげてゐる。

頭の肉髻や頭髮の部分には、毛髪をあらはしてゐない。そのどつしりした形には、北魏やうが影響してゐる。顔面は頬がたれてまるく、かなりひらたい。顎もあさく、顎はふとくみじかい。細部のしあげは、まるまるとしてゐる。髮際もまるく、鼻もまるい。雲岡の北魏諸像とのちがひは、鼻梁、鼻端のまるさ、やはらかさにいちじるしい。鼻した、うは唇の造形は、特殊な切れ目がめだつ。頤のわも大きくまるく、額の白毫 ūṛṇa のあとが大きい。眉も目も大きくゆたかな弧をゑがき、それに刻線をくはへて、くつきりとあらはしてゐる。眼の中心には大きい孔がほりこまれてゐる。これは黒眼をいれたわけであるが、眼のふちをこぼつてまで大きく孔をつくつてゐる。はめこんだのは黒釉の陶器だが、はたして、それはいつのころの細工であらうか。(頭高約 2.70m)

雲岡石窟第三洞

Pl. 79 第三洞 主室 右脇侍

肉つきのゆたかな菩薩立像である。足もとのとけてゐることもあって、すこししたすぼみの感がある。蓮座でもあったのかとおもふが、いまはない。身體にくらべて頭部が大きく、胸にくらべて両腕が大きい。顔はまるく、胸も腹もまるく、そこに臍があらわされてゐる。かういふことは雲岡北魏の石佛にかつてないことである。下裳はきはめてひくい、あさいひだをつくつてゐる。上身の天衣もおなじくあさいひだである。瓔珞のたぐひは一切ない。右手にはなにか未敷の蓮華でももつてゐるらしい。まるまるとふとつた手であるが、その指の彫法は素朴である。左の手さきはをれてゐる。

光背は寶珠形で、火焰のふち、化佛の帯、さうして中心に蓮華がある。(Rub. IA) その火焰のよわい曲線、化佛の散慢なすがた、蓮華のほそい瓣、いづれも雲岡の北魏佛とはちがつてゐる。むしろ、この大まかな、ゆるやかな火焰は北齊堂山中洞の火焰飾¹⁾、くだつては大同華嚴寺の大佛光背²⁾に似てゐる。(像高約 6.00m)

¹⁾ 水野、長庚『雲堂山石窟』京都 1937年刊、Pl. L, LI.

²⁾ 關野貞、竹島卓一『遼金時代の建築と其の佛像』上巻、東京 1934年刊、Pl. 50—52

Pl. 80 第三洞 主室 右脇侍 上身

肩ははつてゐるが、ごくうすい衣文を彫つて、肉體のやはらかさをしめしてゐる。これは左脇侍にもみとめられる。衣のひだは、これ以上あさくできないほどにあさく、ふちだけが、ひだを強調するやうに、やゝふくらんでゐる。しかも雲岡のふつうの北魏佛とちがふところは、ひだのかさなりかたである。つまり一般には、うへのひだが生たをおほふてゐるが、こゝではしたのひだが、うへのひだにかさなつてゐる。頸はふとく、頸の輪はつよく、しまつてゐる。額の髪やこめかみの髪、また耳の彫り方にも特色がある。眉、目などは本尊におなじである。くろい眼は、なにか嵌入了ものらしく、いま大きなうつろになつてゐる。鼻のかたち、唇の彎曲も本尊に似てゐるが、人中はとくにとがつてくひこんでゐる。しかし、豪華な寶冠と入念な高髻とにふさはしい威嚴のある顔貌である。耳たぶには耳環があり、肩には頭髮の一部が波うつてゐる。(頭高約 1.80m)

Pl. 81 第三洞 主室 右脇侍 頭部 (正面)

髪容は克明にきさまれてゐる。ほそい平行の刻線を彫り、それがあつまつて、いくつかのふっくりしたたばになつ

てゐる。かうしてよくとゞのつた頭髮のうへに寶冠がある。寶冠は方形の金具を中心に、渦巻飾をそのまはりにおき、そしてそのうへに花瓶をのせ、瓶には寶華を挿してゐる。さらに冠側は方形の金具やうのものがあつて、側面の花枝につながつてゐる。實に豪華な寶冠で、雲岡では、ほかにみられないものである。もちろん、一々の細部、とくに唐草の曲線は、みな雲岡の北魏佛とちがふ。また、そのおほまかなところは北齊のものに似てゐるともいへるが、はるかに緊張がたりない。水瓶をいたゞいたのは大勢至菩薩かとおもふが、さきにのべたやうに、これに照應すべき觀世音菩薩がはつきりしない。(頭高約 1.50m)

Pl. 82 第三洞 主室 左脇侍

これもやゝづんぐりした、ふとつた菩薩像である。風化は、この方がひどい。右の手首がのこつてゐるのみである。光背ものこつてゐない。たゞ菩薩の頭部が、荒廢のまんまかに、不思議なほどみごとくにのこつてゐる。

こゝでは本尊の左手がちかくにみえ、ひさにかゝつたうすいひだが、逆にかさなつてゐるのがよくわかる。(像高約 6.00m)

Pl. 83, 84 第三洞 主室 左脇侍 上身、頭部 (正面)

かなりあれてゐるが、手のふくらみ、やはらかみはよくわかる。顔の細部は右脇侍によく似てゐるけれども、右頸から頸がすこし破損してゐる。こゝのまるい眼には黒釉の陶器がはめてあつた。それはごく近世のものとおもはれたが、はたしていつからくろい陶器を嵌入するやうになつたのかは不明である。右の耳はうしなはれてゐるが、左の耳はよくのこつてゐる。耳たぶに耳環があり、その肩に頭髮がたれかゝつてゐることも、右脇侍におなじである。

寶冠のま正面は獅子頭である。これについて長方形の金具やうのものがあつて、側面の花飾と連結してゐる。光背は破損してゐるが、これも右脇侍と同様、火焰化佛帯、蓮華の寶珠光であつたらしい。(頭高 1.50m)

Pl. 85A 第三洞 主室 右脇侍 頭部 (側面)

B 第三洞 主室 左脇侍 頭部 (側面)

側面をみると北魏佛とのちがひが、またはつきりする。顔のまるさがいちじるしい。眼のしたから頭にかけての柔かさは、血のかよつた皮膚の感じである。髪毛の、形式的ながらも、みづみづしさは人目をひく。寶冠はどこへまはつても豪華である。寶冠の左右側面はなん段にもかさねた

寶華文である。一面北齊裝飾をおもはせるが、平板的であり、面の緊張がたりない。牡丹唐草ともいへるが、形がくづれて、やゝ明晰を缺く。(頭高各約 1.50m)

Pl. 86A 第三洞 主室 右脇侍寶冠

B 第三洞 主室 左脇侍寶冠

A. 正面方形の金具飾のしたに渦文があり、左右には三段の渦文がある。(Rub. 1B) いずれも中心が突出してゐて、素朴な、しまりのない印象をあたへる。そのうへにたつ水瓶はしたに蓮座があり、なかに一輪の花がさしてある。めづらしい花瓶である。なんの花ともいへない八輪花で、莖の左右に唐草の葉がひろがってゐる。水瓶は頸のほそい、高臺のある壺である。蓮座は二重に五瓣がさがり、その左右にまきこんだ葉がある。その唐草のおもむきは、いくらか北齊、隋ふうな大葉であり、また大まかである。けれども、彫法の點では、北齊、隋の特色はすこしもあらはれてゐない。要するに、擬古的な作品の徹底しない一面があらはれてゐるとみとめられる。(寶冠高約 0.76m)

B. これは獅子頭といへよう。(Rub. 1C) まるい眼、みじかい鼻、大きくひらいた口には四枚の門歯がならび、牙がある。下顎はふさふさとした毛なみにかくれてみえない。毛はその端をまきながら、文樣的にならべられ、うつくしくとゞのへられてゐる。異様なのは二段になった大きな角であり、その中間に弦月とまるい太陽とがある。獅子面といふものは、わりに時代の特徴のはっきりせぬものであるが、そのこまかい細部の描寫は、どうしても唐以後のものといへよう。(寶冠高 0.53m)

Pl. 87 第三洞 主室 南壁 (西方より)

第三洞前室よりふみこんだところである。むかつて右に見えるのが前室からの入口であり、そのうへが明窓、その光のした、むかつて左方が三尊大佛のあるところ。こゝに方柱の南面がなゞめにみえてゐる。はるかに、むかふにみえる明りが東の明窓である。いまこゝからは東壁の一部がみえ、そしてまた水平の天井がみえてゐる。手まへの西の明窓の東、天井にちかいところに、もうひとつ小さい明窓がある。(室高約 13.00m)

Pl. 88A, B, 89A, B 第三洞 主室 南壁

これらの寫眞四枚は、主室南壁をしめすためにあげた。Pl. 88A はその東端であり、Pl. 89B はその西端である。Pl. 88B と Pl. 89A とはともに南壁の中央部であつて、それ

を東からみたもの(Pl. 88B)と、西からみたもの(Pl. 89A)とである。Pl. 88Bには方柱南面が右方にうつてをり、Pl. 89Aには西房の東壁一部が、むかつて左手にうつてゐる。のこされた中央ブロックからいへば西面の壁である。Pl. 88Aには、むかつて右手に方柱東面がうつてゐる。一般の風化はまぬがれないが、平行線の鑿あとが歴然とのこつてゐる。もちろん、長年の風化は、その凹凸をいくらかなめらかにしてゐるであらう。Pl. 89B のむかつて左方は、北にのびた西房の東壁である。(壁高約 13.00m)

Pl. 90A 第三洞 主室 西部 (南方より)

B 第三洞 主室 東部 (南方より)

A. これは西房の全景である。おくに北壁がみえ、むかつて右に東壁、いひかへると、のこされた方柱の西面がみえる。北壁に若干の方形の彫りこみがみえるが、もとより、その意圖はわからない。床に石づみのみえるのは、近世における洞内居住のなごりである。(西房北壁幅約 5.50m)

B. 東房もおなじである。おくにみえてゐるのは北壁であり、むかつて右は東壁である。左にみえるブロックは中央に鑿りのこされた方柱の一部。この東房では、このおくがすこし西にむかつて鑿りこまれてゐる。このことから中央に大きな方柱のブロックをのこし、周囲をくりぬく意圖であつたことがよみとられる。それにしても、こゝの洞窟は東西の幅がひろいから、第五洞のやうな方柱でなく、第四洞のやうな矩形の柱をのこすつもりであつたとおもはれる。(東房東西幅約 5.50m)

Pl. 91A 第三洞 上室 西壁

B 第三洞 上室 東壁

上室の側壁は東西とも北から南にかけ大龜裂がある。兩壁ともかなりいたんでゐるが、千佛龕でうまつてゐたことだけはあきらかである。九龕九層で八十一龕であるが、中央に大龕があつて二十龕分の地をしめ、左右の餘白に五、六龕彫りくはへられてゐるから、事實は一壁七十四、五龕といふところである。千佛中央にある大龕は三尊坐佛の尖拱龕である。拱額内には過去の七佛を彫り、拱額外には合掌供養者を彫る。みな、ほっそりした瘦身、なで肩で、中國ふうの衣をつけてゐる。

ひくい腰壁は東壁によつてからうじてわかるが、逆髮裸形の天神たちで、みな手をあげて蓋をさゞげてゐるらしい。つまり侏儒であり、アトランテス Atlantes であり、また天神でもあるらしい。(西壁幅約 2.70m, 東壁幅約 2.60m)

雲岡石窟第三洞

Pl. 92 第三洞上室南壁上部和天井

千佛の南壁と格間の天井との関係がよくわかる。これをわかす天井なげしの部分には、なにも装飾はないが、わりに整然たる構造である。圖版上端にほんのすこしみえてゐるのは、北壁佛龕の帳幕である。

Pl. 93A, B, 94A, B 第三洞上室南壁細部

室がせまくて南壁の全貌を一時にみることはできない。しかし、よくみると、やはり九段で、一段おのおの十八龕ある。けれども門口があるため、その全数はなく、いま百三十四龕といふところ、それに左右餘白に數龕がある。ほそい、きゃしゃな佛像である。左右相稱の通肩と、右肩右腕を大きく衣端でくるんだものとの二種類を交互においてゐる。

腰壁は東がはがやゝ保存よく(Pl. 94B)、逆髮裸形の天神たちと、そのうへによこたはる蓮瓣文帯がみとめられる。門口は方形である。いつか兩扇の扉をほどこしたものとみえ、樞の孔その他がみとめられる。

Pl. 95, 96A, B 第三洞上室北壁交脚菩薩

北壁いっぱいには楣拱龕がある。そのなかの間をふかくつくり、交脚菩薩を彫つてゐる。みにくく風化してゐるが、瘦身の菩薩で、龕内の空間がひろびろとしてゐる。ながい龕いっぱいの寶座があり、そのまへに本尊のほそい脚と足くびがすらりとのび、左右にかたばかりの獅子像がある。寶座のまへ、左右の龕壁に脇侍の羅漢を小さく彫つてゐるが、羅漢は獅子の背後からでた蓮華のうへにたつてゐる。

菩薩は右手をあげ左手を膝においてゐる。兩膝からたれた衣文はするどく平行線のひだをつくつてゐる。いま、ひどくいたんでゐるけれども、もとは雲岡末期ふうの、すらりとした優雅な彫刻であつたらう。耳が長大で、三面冠がよくのこつてゐる。三面とも單瓣の蓮華をかざつてゐる。璣珞も、リボンも中間の唐草も退化してゐる。たゞ正面の化佛はある。彌勒菩薩をあらはしたものであることはうたがへない。

Pl. 97A 第三洞上室北壁菩薩光背

B 第三洞上室北壁龕内東側

A. 菩薩光背は繊細である。舉身光外縁と頭光外縁に、いきほひのよい火焰をいれてゐる。その焰の一條づゝをみると根もとから先端まで、特殊の曲線で作られてゐる。圓光の内帯は化佛、舉身光の内帯は飛天、圓光の中心は蓮

華、舉身光の中心は半パルメット並列文帯と火焰とである。その作、第六洞、第十三洞よりも繊細で、五華洞外壁の佛龕や、龍門古陽洞内の佛龕のものにいくらかちかい。¹⁾

B. 光背のそとに供養者がゐる。まづ脇侍羅漢像とのあひだ(Pl. 96A, 98A)に、ごくあさく彫つた天人立像がある。その内がはに、もう一人ぐらゐ合掌の供養者がたつてゐたらしい。これらのうへに胡跪合掌の二天がをり、さらにそのうへの三角形になつた空白に、手をのばした飛天がゐる。この飛天はみじかい特色のある上衣をき、つよく腰をひねつて、第六洞や五華洞外壁小龕のものによく似てゐる。

¹⁾ 水野、長廣『龍門石窟の研究』東京 1941, Pl. XXII.

Pl. 98A 第三洞上室北壁龕内西側

B 第三洞上室北壁東部

A. 前者(Pl. 97B)に對する西がはである。脇侍として羅漢ふうの立像がみえ、そのうちにまた天人ふうの立像があつたらしい。ともにあさい彫りである。前者はながい袖で、正面にむき合掌してゐる。これに對する東がはのものも羅漢像であるらしい。

B. 左右廂は本尊龕との境に方形の柱をもつ。うへに楣拱の翼部があり、そのしたに幕がある。廂内にはすらりとした脇侍菩薩立像がある。左脇侍がいくらかよくのこつてゐるが、たかい寶冠、面ながの顔、まへでまじはるX字形の天衣などが注意される。

Pl. 99A—C 第三洞上室北壁楣拱

すぐ天井に接して楣拱がある。幕帳は八つの弧にしぼつてゐるが、その弧はゆるく、くゝつた紐の垂下もみじかい。ひだのとりかたも形式的である。楣拱の水平部は三區にわかかれ、中央はめづらしく三尊佛、その中心坐佛は通肩合手の禪定佛である。あるひは交脚本尊の化佛を意味するものかもしれない。左右の脇侍は菩薩といふより、天人といふべきかも知れぬ。合掌してやゝまへに身體をかたむけてゐる。左右の二區の飛天は上衣と裳のはしとに特色がある。第六洞にはじまり雲岡末期に流行した形式である¹⁾。菱形部も、翼部も、また同類の飛天である。その形式も五華洞外壁の小龕に似てゐる。

¹⁾ 長廣『飛天の藝術』大阪 1949, p. 79—88.

Pl. 100, 101A, B 第三洞上室天井

天井は八つの格間にわかれてゐる。みるとほりのあれ方で、格間のうちには、なにもものもどめてゐない。角材の

梁には半パルメットの波状蔓を二本あはせ、たてに尖卵形をならべた文様をつくる。また梁の交界に線刻の蓮華文をおく。あさい単瓣の花である。梁の側面にも半パルメットの波状連続文(Pl. 101B)のあったことがわかる。格間のな

かは、さらに方形に縁どられ、まんやかに、やゝむっくりした蓮華文でもあったらしい。Pl. 101B, 南列東より第三の格間を、とくに参照されたい。

第 四 洞

Pl. 102 第四洞, 第四A洞 外景

第三洞右翼に鑿りのこされた岩塊である。その南面に二つの方孔がシムメトリカルにあいてゐる。これが第四洞左右の明窓である。入口は、この中間、やゝさがったところにあいてゐる。わづかに上縁がカアヅしてゐるが、たぶん拱門であつたらう。Fig. 21 をみると、この入口のやうすがあきららかである。しかし、こゝをはいと床は一段とたかい。つぎの圖版でわかるやうに、明窓の下端から約0.50~0.60mした、拱門の上端から約0.20~0.30mしたに床がある。

Pl. 103A, B 第四洞 南壁

二つの明窓はシムメトリックの配置であるが、入口から判断すれば、未完成窟といふほかない。最初の計畫が放擲されたのち、この南壁の小龕が漸次つくられたものであらう。Bのむかつて左にみえる方柱の尊像は、拱門のたかさからすると、最上層の彫刻としてつくられたものとおもへる。さうすると、天井と方柱の上部の尊像だけが完成されて、その他は未完成のまゝをはつたのである。この洞は、石窟開鑿の過程をしめす一例として興味があふかい。

南壁諸龕中、もっとも大きいのは西窓と拱門とのあひだにある三龕のうち、した二龕である。これは二佛並坐の龕と、交脚菩薩の龕とを上下にかさねたもので(A), 第七洞北壁の上下龕, 第十七洞の太和十三年龕と、まったくおなじ方式である。ただし、この方が貧弱であり、中國式の服制であり、時期がおくれていることはあきららかである。したはふつうの尖拱龕であるが、うへの龕はせりもちの拱をなさず、たゞ楣と幕とからなつてゐる。さらに、注意されるのは、交脚菩薩の左右、半跏思惟像のうへに一對の倚坐佛をおさめてゐることである。したがつて、この上下兩龕は、まったく第七洞北壁の上下龕と尊像配置が一致する。(本書第四卷, Pl. 28)

このうへにやゝせまくなって、三尊坐佛の尖拱龕がある。二佛並坐龕の西、西窓のしたには三尊交脚菩薩の楣拱龕(B)がある。さらに拱門のうへにも三龕がかさなり(A),

それに東接する平らな壁面には文字を刻してゐる。解説しがたいが、亡夫侍中云々の北魏の文字である。その東にも多数の龕がある。なかには未完成で、尖拱龕の線刻だけがあるものもある。たいてい菩薩を脇侍とした三尊佛で、力士などを脇侍にしたものはない。佛像はすべて、中國式服制で、なで肩、面ながであり、雲岡末期の作である。なほ龕の配置をみると、明窓あるひは拱門が、決してあとから鑿られたものでないことがあきらかである。(南壁幅約7.00m)

Pl. 104A 第四洞 南壁 交脚菩薩龕

B 第四洞 南壁 刻文

A. 南壁西窓したの小龕である。(Pl. 103B) 楣拱龕の左右廂に半跏思惟像があり、中央にこの交脚菩薩像がある。その構成は第十七洞明窓の太和十三年龕と同様であるが、身體はきゃしゃで、衣文はすっかり簡素になり、雲岡後期の彫像になりきつてゐる。

B. この刻文は拱門のうへにある。(Pl. 103A) しかし、全體に對する記銘ではないらしい。いづれこのあたりの小龕に附随したものとおもふが、字が小さくてよくよめない。判讀するとしたのごとくである。

□□□□靈□非□魂以濟其源靈委□麗□□悲

・ ・ □□爲亡夫侍中平□大□
 ・ ・ □世□□□亡息濟言怕滅□
 ・ ・ 亡者一區□亡者託生淨土酒
 ・ ・ ・ ・ □之玄源神□□明於
 ・ ・ ・ ・ 皇祚永隆惠澤其敷
 ・ ・ ・ ・ □電相識憑□□

・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ 閏・月廿三日・

Pl. 105A, B 第四洞 東壁

圖版 A, B のおくに東壁がみえてゐる。東壁はこのやう

雲岡石窟第四洞

に、まったく荒けづりのまゝである。しかし、北部(A)にはやゝ大きな龕もあって、最初の計畫の一部かとおもはれるが、完成をみたのは本尊だけであらうか。それにあとからその膝もかきとられてゐる。(Pl. 112B) 中部と南部とにみえる小龕は、かなり風化したあとで泥作の修理をうけたらしく、椀杖の孔をとめてゐる。(B)のむかつて左にみえるのは方柱の南面である。(東壁幅約5.00m)

Pl. 106A, B 第四洞 西壁

南半(A)は南壁同様に追刻らしい小龕がたくさんある。北半(B)はおくにみえるが、すっかり風化してゐる。よくみると東壁の北龕に應ずる當初の大龕があったらしい。これは一應、本尊以外の脇侍なども完成をみたらしく、いまその右廂の立面(A)がのこつてゐる。(B)の左手には方柱の北面が、東北角とともにみえてゐる。(西壁幅約5.00m)

Pl. 107 第四洞 西壁 南部

圖版のまんなかには三尊佛の尖拱龕がみえてゐる。本尊坐佛は裳をまへにたれ、つよくひろげた形式である。左右脇侍は頭上に天蓋飾があり、そのうへには合掌比丘像をならべてゐる。壺座の中央に記文をしるす方形をのこし、左右にあさい俗形供養者をならべてゐる。西方諸洞や龍門北魏窟に似る造像形式である。これに接して、すぐその北がはに千佛の一區がある。まんなかには交脚菩薩像を彫るのは、過去の千佛に對し、未來の彌勒菩薩の意であらうか。その他はとくにいふべきものはないが、南端中位にある菩薩立像の小龕はめづらしい。雲岡の石窟には菩薩像立像を中心とした龕はない。ほとんど、これが唯一の例である。菩薩立像は、おそらく當時の圖像學からすると觀音菩薩と解釋して、まちがひないとおもふ。

Pl. 108A 第四洞 方柱 東面

B 第四洞 方柱 西面

A. 方柱の東面は三尊佛の立像である。西面にくらべてやゝ粗朴に感じられるが、さいはひ脚のあたりまで、ほゞのこつてゐる。岩田氏の寫眞(Fig. 22, 23)をみると、まだ頭部がよくのこつてゐる。長手の溫和な、したしみのある顔である。脇侍の冠が、まへと左右は三角形の板、そのあひだに蓮華の蕾らしいものをたてゐる。これは第四洞あたりの菩薩一般にみる特色である。これにも大きな、なんのかざりもない光背があつて、本尊をひきたゞせてゐる。方柱から天井にうつる壁のカアヴが、こゝにみとめられる。(東面

幅約1.50m)

B. 西面も東面におなじ三尊佛立像である。龕をほらずに平らな壁面に彫りつけてゐる。おしいことに頭部をみなうしなつてゐるが、その繊細にして優雅な姿體は注意をひく。胸にあげた手のつよさ、脚をひろげてすっきりとたつた姿は、端正であり威嚴がある。中國式服制で、厚紙をかさねたやうな衣文が、儀禮的なまじめさをしめてゐる。そしてその高身の姿にふさはしく、たけだかい舉身光を天井までのばしてゐる。左右の脇侍は寶珠光をおひ、まへにX字形に交叉した衣文には、まるい環がはめてある。そのうへには僧形、天人の供養者が合掌して、上身をあらはしてゐる。(西面幅約1.70m)

Pl. 109A, B 第四洞 方柱 南面

方柱の南面と北面はひろいので、おなじ形式の三尊佛立像を二組ならべてゐる。みな首をうしなつてゐるのは遺憾であるが、その繊細な衣文におほはれた端嚴な姿は注意するに足る。(Fig. 24—26) ほそい肩からさがる衣の併行線、そとに反つたながい袖、胸まへにさがつたながい紐など、みなこの像の正面性をつよめてゐる。この諸像はもとより西端諸洞の像に類するが、とくに瘦身長軀にその特色がある。西がはの佛は、內衣の紐をネクタイのやうにさげただけであるが、東がはの佛は輪をつくつてむすび、その餘をたれてゐる。(南面幅約3.00m)

Pl. 110A 第四洞 方柱 北面 東半

B 第四洞 方柱 北面 西半

こゝにも三尊佛立像が二組ある。同様に瘦身長軀であるが、膝からしたの壁が損じてゐる。西がはの佛は手くびからさがる衣のふちが、妙に波だつたひだをつくつてゐる。東がは三尊の左脇侍は、たれた左手になにか華か果實のやうなものをもつてゐる。(Fig. 27) うへの方はいたんで光背がすっかりきえてゐる。(北面幅約3.00m)

Pl. 111A 第四洞 天井 南部

B 第四洞 天井 南西部

A. 天井は格天井ふうである。ところが、まんなかには方柱があるから、四房にわかれて各房に一行の格間しかない。南方中央區に二重の蓮華文がある。そとが複瓣で、なかが單瓣である。花托が小さく突出し、第七洞や第八洞天井にみるやうなおもかげはない。左右の格間は飛天を彫り、方形のなかに身を屈折し、天衣をひるがへしてゐる。これも

第六洞ふうで、特殊な裳のはしをしめしてゐる。各格間の四隅には蓮華の蕾のやうな突起をつくつてゐる。

B. 圖版の左手が天井の南がはである。南がは中央から三つ目の飛天、つぎの蓮華文がみえてゐる。ところが、こゝは西南隅になるので、梁が隅がけにでゝゐて四邊形だが、一邊だけがなゝめになつてゐる。西がはにまはつて、すこしひろくなつた四邊形に、飛天二體が左右から相むかつて、蓮華かなにかをさゝげてゐる。やゝ無理のある身體つきである。つきが西がは中央の蓮華の格間で、これより以北 (Pl. 106A) は、まったく崩壊してゐる。

Pl. 112A 第四洞 天井 東部

B 第四洞 東壁 未完成龕

A. こゝには東房の天井がしめされてゐる。中心が二重の蓮華、左右が飛天である。しかし未完成のためか彫りがあさくて、彫繪のやうである。

B. これは東壁の北半で Pl. 105A を近寫したのである。坐佛龕のわきに、長方形のくぼみと尖拱龕がみとめられる。

Pl. 113 第四A洞 外景

すぐ第四洞に隣接し、一應完成をみた石窟である。すっかり前壁がこはれて内部がみえてゐる。外部の裝飾はわからない。門口は前壁の三分の一ぐらゐの幅であつたらしい。

Pl. 114 第四A洞 東壁

この小さな石窟は三壁三龕制である。東壁は交脚菩薩の楣拱龕である。あとからうがつた眼の孔が異様に目だつてゐる。すこし長手の顔で、頸がほそい。寶冠にはなにも彫

つてない。天衣がひろく肩をおほひ、そのはしが、ひれのやうにひるがへり、まへにたれたところはX字形にまじはつて、そこにまるい大きな環がある。下裳は平行したひださががり、左右にひらいた膝からは、やはり平行した線が弧狀にたれ、そのはしがまたひれのやうにはねかへつてゐる。第三洞上室の交脚像に似てゐるが、なほこの方が完成した様式をしめしてゐる。両手はいづれもうつくしい。右手は胸にあげるが、左手は膝におかず、まへにだした掌をたれてゐる。獅子も脚下にある。龕内は、まったくなにも彫らず、光背すらないので、落ちついた背景の効果がある。左右の廂には立つた菩薩像があり、寶珠形の頭光をおふ。楣拱額は框に分割しないで、なにか折りたゞみ式のものをおもはず意匠で、そのまへにでた表面に、坐佛をあさく彫つてゐる。楣拱のしたに圓光をおうた比丘形をならべ、それが璣珞のはしはしをもつてゐる。いはゆる經にいふ寶羅網といふやうなものである¹⁾。さらに楣拱のうへは供養天人、供養比丘の上半身がみえる。とにかく、これらの楣拱の意匠は、第五洞外壁小窟中にみるものに共通する。腰壁以下はまったく崩壊してゐる。(東壁幅約 3.00m)

¹⁾ あるひは『法華經』(大正大藏經, 第九卷 p. 3) 卷一に「球をもつて交踏せる較あつて云云」といふやうなものかとおもふ。また北凉譯の『不退轉法輪經』(大正大藏經, 第九卷, p. 228) に「雜寶の網羅をもつてそのうへをおほふ云云」ともいふ。

Pl. 115 A 第四A洞 西壁

B 第四A洞 北壁

西壁も北壁も、天井とともに風化はなはだしく、なにものもみえない。たゞ三尊坐佛の尖拱龕だといふことが、からうじてわかるのみである。(各壁幅約 3.00m)